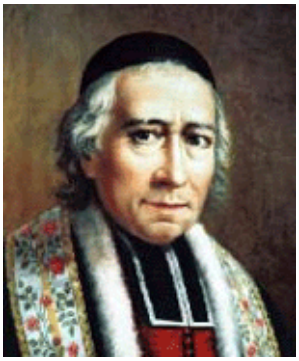

シャミナード師のメッセージ

～ その現代的意味 ～

エドアルド・ベンヨック著／清水一男訳

本書は、フランス、イタリア、スペインの信徒マリアニスト共同体の人々、

チリにおけるマリアニスト活動、

世界中のマリアニスト関連団体、

そして今日、何らかの形でシャミナード師の精神のうちに生きている

すべての人々に捧げられています。

スペインにマリアニストが到着してから 100 年の記念に。(1887-1987)

エドアルド・ベンヨック　ＳＭ

目　次

序文：本書の目的 ---------- i

第一部　シャミナード師の宣教計画 ---------- 1
－ その起源と発展 －

年表：シャミナード師の人生、主な出来事とその日付 ---------- 1

第一章　神からの霊示 ---------- 4

第二章　胎動期の宣教計画 ---------- 17

第三章　計画の開始 ---------- 36

第四章　宣教計画の強化 ---------- 55

第二部　シャミナード師のメッセージの現状 ---------- 77

第二部の導入として ---------- 77
－ 組織体と精神 －

第五章　マリアニスト家族 ---------- 82

第六章　マリアニストの精神 ---------- 99

序　文

本書は、シャミナード師の新しい伝記ではありません。著者が伝記的な事実関係の正確さを調べたことは事実ですが、そのことが中心的な関心事ではありませんでした。この本を記した主な理由は、シャミナード師の霊的あるいは司牧的直観が、師の生涯の中でどのような時に起きたのかを再発見するためでした。

シャミナード師の人生で最も実り多い時期は 1800 年から 1817 年まで、つまり 39 才から 56 才までの最も円熟した時期と重なっています。1800 年の信徒マリアニスト共同体のスタート時から 1817 年のマリア会創立までの 17 年間に、シャミナード師は福音宣教をめざした使徒的プロジェクトの組織をつくりました。マリア会創立の時から、シャミナード師は絶えず、自分がつくった福音宣教の手段をより良いものにし、それに真の精神を注ぎ込もうと努力し、その組織を通して、フランスの再キリスト教化に熱心に取り組んだのです。

ここで本当に興味を引くのは、シャミナード師のメッセージです。ところで「メッセージ」という言葉は何を意味するでしょうか。人はいろいろな形で、例えば、話されたり書かれたりした言葉を通して伝達された独創的な思想によって、メッセージを後世の人々に伝えることが出来ます。著名な雄弁家が有名な演説を残しているように、有名な著述家は、人間の知識に関するあらゆる分野で、「教説」を、つまり、人間の持っているとても深い疑問に新しい光を投げかける知的な発見や理論を、私たちに残しています。他の人々にとって、その「教説」というのは、彼らが語る言葉ではなく、むしろ彼らの活動です。人生においてこのような著述家を信奉する人々が受け継ぐ教訓は、これらの著述家の行為、何かに対する反応、また、彼らの仕事が有する輝かしい模範などから成り立っています。他の人々は、自分の「教説」を通してよりも、自分たちの発明、新たに設立するものごと、あるいは、後の世代を通して人類にとって善の源であり続けたあらゆる種類の仕事を通して、人間活動のあらゆる面において創造的に生きた人々でした。これら全ての人々は、メッセージを伝達して、何か生き続けるもの、何か意味といのちの豊穣性を有するものを、後に続く世代に伝えてきたのです。

本書は、次の質問に答えようとするものです。現在、シャミナード師のメッ

セージは、生き続けているでしょうか。師は現代の人々に最も価値あるものとして、私たちに何を伝えたのでしょうか。

私たちが「シャミナード・ドクトリン＜教説＞」と呼んでもよいようなものを発見し、それを説明する試みがこれまでになされてきました。これらの説明は、教説を総合体としてまとめる性質を帯びていますが、まさにここに危険性があるのです。一つの総合体を明確に系統立てて述べようとして、文筆家でも神学者でもなく、活動家、司牧者、創立者であったシャミナード師の考えとは違ったかたちになってしまうかもしれないのです。シャミナード師が書いたものはすべて、明確な司牧的な目的をもっており、師が指導した人々や、師が創設したグループの絶対的な必要性に常に関連していました。師は出版を目的としてはほとんど何も書きませんでしたが、ただ個人的に使うため、また、師が導いていた人々や、精神を注いでいたグループがより良い実を結ぶために書いたのです。そのために、師の書き物には他の著者からの非常に多くの引用や、そこから影響を受けた考え方が数多くみられます。また、シャミナード師は、自分の秘書や他の人に委託して書かせたものにサインをしましたが、時として、サインはしたものの完全には同意しないものもありました。師の唯一の関心事は、自分の書いたものがその書かれた目的、つまり、ある特殊な司牧的目的に役立つかどうかということでした。多方面にわたるシャミナード師の考え方を、時代を超越して教義的な教えに統合しようとするどのような試みも、いくらか不自然なものにならざるを得ません。今日、シャミナード師のメッセージを一連の教説として示す事は出来ません。

シャミナード師が二つの修道会の創立者であったという事実から、私たちはその修道会の中に師のメッセージを探すようにと誘われるかもしれません。私たちは、汚れなきマリア修道会とマリア会が、今日、世界と教会の中で活動しているということを認識する必要があります。これら二つの修道会は、私たちの時代にとって、ギョーム・ヨゼフ・シャミナード師の最も価値ある遺産でしょうか。正直なところ、私はそうは思いません。

シャミナード師について研究したり考えたりする時、あまりに単純化して、師が両修道会の創立者であるという観点だけで考えてしまう可能性があります。シャミナードという人物を理解する上での基本であり主要な鍵として提示されるこのような単純化された見方よって、師の人となりや仕事について書かれた伝記や研究が偏っているように私には思えます。マリア会の創立に先立って師

の人生に起こったことはすべて､創立のための準備のように思われていますし、マリア会創立後のできごとは全部、この基礎となる歴史的なできごとの発展であり結果である、と考えられていますが、私の意見では、このような見方はシャミナード師の考えていた現実に一致していません。

そこで、私は、もしシャミナード師の創立した男女修道会が、他のマリアニストの組織と切り離して考察されるとすれば、この両修道会はシャミナード師のメッセージのもつ豊かさと発展性を表現していないということを示そうと思います。事実、汚れなきマリア修道会とマリア会は、それ以前に創立されたグループの緊急かつ重要な必要性に応えて生まれたのです。フランスの再キリスト教化のために、シャミナード師が信徒マリアニスト共同体（ＭＬＣ）を活気づけるという仕事が増大し、それに忙殺されたことによって、ＭＬＣを活性化させこれを広めるという、師が行っていることに参画する人々が必要性となったのです。この指導者たちがもう一人のシャミナード師として増え、永続し、これが「死なない人」という有名な表現の意味なのです。事実、この二つの修道会は､「死なない人」として、男性（マリア会）と女性（汚れなきマリア修道会）の枝で成長したものであり、シャミナード師の使命を増大させ、永続させるものなのです。もし今日、汚れなきマリア修道会とマリア会が、活気づけ奉仕すべきキリスト者の信徒グループから自分たちを切り離すとすれば、私たちは、永続はしたが実りのないシャミナード師になってしまう自分に気づくことになるでしょう。そうなると、シャミナード師の司牧計画と宣教計画はどこに残されるのでしょうか。

さらに言えば、汚れなきマリア修道会とマリア会は、男女信徒マリアニストの間でますます強く感じられるようになった、洗礼に込められた神への奉献の頂点を表すものです。シャミナード師の計画が持つ真の目的は、フランスの再キリスト教化であり、師はすでにそのことに大きなエネルギーを注ぎ、豊かな実りをもたらしてきたのです。1800 年にＭＬＣを創立した時、師はこれを修道会創立のための準備段階として考えていたのではありません。世界を福音化するという使徒的な計画を神の計画と理解し、亡命の日々を過ごす中で深く練り上げた計画に着手し始めていたのです。

修道会の誕生を歴史的な見地に立って考察することはより一層重要です。なぜなら､それは修道会の根本的な使命が何であるかを決定するためだけでなく、修道会を活気づける精神を示し、それを忠実に生きるためだからです。もし、

シャミナード師の事業の真の中心が司牧的なビジョンであり、これに応えて宣教戦略を開始することだったとすれば、この戦略の構成要素と宣教計画の要因を分離させても孤立させてもいけません。この二つを同時に考察すると、相応しい見地からその真の意味が見えてきます。二つを切り離してしまうと、その使命を衰弱させることになり、従って、この戦略と宣教計画に活気と発展を約束するはずの精神をも衰えさせることになるのです。

本書のねらいは、シャミナード師の司牧計画が何であるかを調べ、宣教戦略を理解し、シャミナード師の優れた資質から生まれた福音宣教のさまざまな手段を確認することです。このねらいが達せられれば、今日なぜマリアニスト家族が豊かな多様性をもって成長しているのか、また、どのような精神がそれに活気をあたえるのかを理解するのはそれほど難しいことではないと思います。これこそが、現代においてシャミナード師のメッセージを理解し、発見することになると私は信じます。

第一部　シャミナード師の宣教計画

―その起源と発展―

ギョーム・ヨゼフ・シャミナード師の年表

展開しようとしているテーマを扱う前に、当然、伝記的な日付や出来事を調べる必要があります。次の年表は、この本の読者が一番関心を持っている時期に限定しています。その目的は、シャミナード師の人生のある特定の時期に関して、これから述べる私の考えを理解しやすくするためです。

1761 年 4 月 8 日	ギョーム・ヨゼフ・シャミナード師は、ブレ―ズ・シャミナードとカテリーヌ・ベトンの第 14 子で最後の子として、ペリゴールの昔の首都ペリグー市に生まれています。父は熟練のガラス職人兼ガラス商人であり、後に織物商人となった人でした。
1771 年 11 月	10 歳半の時、彼はミュシダンの聖シャルル・ボロメオ学院に寄宿生として入学します。彼の兄弟ルイもそこで学んでいます。彼の長兄ジャン・バプチストはその学院の指導者の一人であり、イエズス会が禁止されるまで、その会員でした。 この長兄がギョームに霊的生活の手ほどきをし、間もなく、ギョームは初聖体と堅信を受け、その時に第二の名前としてヨゼフを選びました。そして、スータンを着用し、トンスラの式を受けました。15 歳か 16 歳の時、彼は清貧、貞潔、従順の私的誓願を立てます。長兄の勧めに従って、彼はミュシダンに留まり、その学校を経営していた聖シャルル司祭会に加わる決断をします。
1776 年 11 月	ギョーム・ヨゼフは哲学を学び、ミュシダンの学校の教師をし、会計係りである兄ジャン・バプチストの補佐をしています。おそらく、神学の勉強を終えるためにボルドーにも行っています。
1782 年 4 月	兄ジャン･バプチストがミュシダンの学校の校長に任命され、それに伴い、ギョーム・ヨゼフが会計係りになります。

1782 年末	副助祭になる準備をするため、パリに行きます。そこで、サンスルピス会の司祭と接触します。間もなくミュシダンに帰ります。
1785 年 5 月 14 日	おそらく、この日に叙階されたと推定されます。学校の会計係と教師の仕事も続けます。
1790 年 1 月	兄ジャン・バプチスト　帰天。
1791 年　初頭	聖シャルル会の司祭は「聖職者市民憲章」への宣誓を拒否し、解散します。
1792 年 1 月 5 日	ギョーム・ヨゼフ・シャミナード師は終の棲家となるボルドーへ移ります。恐怖時代、「非宣誓」司祭として秘密裏に司祭職を遂行します。
1795 年	マリー・テレ―ズ・ド・ラムルスと出会い、彼女の霊的指導者となります。また、聴罪司祭として、「宣誓」司祭を教会と和解させる働きをします。
1797 年 10 月 11 日	執政政治によって追放され、スペインのサラゴサに到着し、そこで、兄弟のルイ・ザビエルと一緒になります。三年間の亡命生活を祈りと内省のうちに過ごします。
1800 年 11 月	ボルドーに帰り、使徒活動を開始します。同時に、バザ教区の管理者として二年間奉仕します。
1800 年 12 月 8 日	ボルドーで「無原罪の聖母青年会」（ソダリティ）を始めます。この会は、福音宣教を目的としてマリアに奉献した信徒のグループです。
1801 年 1 月	シャミナード師に鼓舞されたマリー・テレ―ズ・ド・ラムルスは、婦人更正施設であるミゼリコルド会の責任者となります。
1801 年 3 月 28 日	聖座から「教皇派遣宣教師」に任じられます。フランスの再キリスト教化に向けて、「無原罪の聖母聖年会」を広めるために献身します。

1808 年 秋	アデル・ド・バッツ・ド・トランケレオンと文通するようになります。彼女は、アジャン地方で「アソシアシオン」という女性の会を推し進めてきた若い女性です。
1813 年 4 月	アデルのグループは幾多の困難の後、最終的に完全なかたちで「無原罪の聖母聖年会」と統合します。
1816 年 5 月 25 日	シャミナード師とアデル・ド・バッツ・ド・トランケレオンは、「汚れなきマリア修道会」（マリアニストシスターズ）を創立します。
1817 年 5 月 1 日	『最も記念すべき日』 「無原罪の聖母聖年会」会員の一人ジャン・バプチスト・ラランは、自分もシャミナード師と同じような生活と働きに献身するために、師に自分を委ね、最初のマリア会員の一人となりました。
1817 年 10 月 2 日	シャミナード師は「マリア会」（マリアニスト）を創立します。この時から、師は自身の生活のすべてを捧げて、自分が創立した信徒会、ミゼリコルド会、汚れなきマリア修道会、そしてマリア会を指導し、精神を吹き込むことに専念します。
1823 年から	二つの修道会は、フランス南西部から北東部のアルザスとフランシュ・コンテ地方へと拡がり始めます。
1839 年 4 月 12 日	教皇グレゴリオ 14 世は、汚れなきマリア修道会とマリア会の両修道会称賛の教令を発布しました。
1839 年	マリア会はスイスに拡がります。
1840 年末	シャミナード師の人生の最後の時期が始まります。この時期は、師が創立したマリア会内部からくる苦しみと試練の時期です。
1849 年 7 月	マリア会員がアメリカ合衆国に渡ります。
1850 年 1 月 22 日	シャミナード師、ボルドーにて帰天。

第一章

神からの霊示

この章でとり上げる問題に焦点を正しく絞ることはそれほど簡単ではありません。ギョーム・ヨゼフ・シャミナード師が創立したもの、特にマリア会に関してのものは、語られた事や調査された事のすべては、神からの霊示に基づいている、という事実を文書で裏付けることは簡単です。シャミナード師は自身の一生を通じてこの事実をしっかりと確認しています。ただ、この霊示がいつ、どこで、どのように、またどのような状況であったのかを確定することはもっと複雑です。この点に関しては、シャミナード師の直接の証言がないからです。

マリア会内に定着した古い伝統によれば、その霊示はサラゴサでの追放の時期に与えられました。しかし、それはどのようになされたのでしょうか。それは一瞬のうちにあった強烈な洞察だったのでしょうか。それとも、長期にわたる恵みと深い霊的体験の間に与えられたものだったのでしょうか。そして何よりも、その霊示とは厳密に言ってどのようなものだったのでしょうか。帰国後フランスを再キリスト教化するという司牧計画を見出したのでしょうか。それとも、単にマリア会を創立するという着想を得たのでしょうか。もし後者だとすると、このことは、シャミナード師はサラゴサに行くもっと以前から修道会創立の意向を持っていた、ということをうかがわせる他の事実とどう調和するでしょうか。さらに、サラゴサで起こったマリア会を創立するというこの霊示は、帰国後の数年間、師が特に信徒と関わったという否定できない歴史的事実とどう調和するでしょうか。

この件に関して意見が異なるのは、私たちは間接的な証言だけで、つまり、ある人が自分はシャミナード師がこう言うのを聞いたという証言で満足しなければならないからです。そして、時々これらの証言はあくまでも間接的なものでしかありません。なぜなら、これらの証言は、シャミナード師がこのように語るのを聞いたとある人が言ったのを又聞きした人からのものだからです。けれども、本書の目的を考えると、この神からの霊示に関することは重要です。もし私たちがシャミナード師の宣教計画を再現しようと望むなら、この計画の始まりとなった霊示のことを、私たちは多少なりとも明らかにしなければなり

ません。

そこで可能な限り公正に、また間接的な証言から来る先入観を排除して、この難問をもう一度初めから考え直してみましょう。これについては、最もよく知られた証言と非常に大きな影響を与えてきた証言に限ろうと思います。まず、シャミナード師と同時代の人の中から、最も重要な意味を持つ三人から始めます。ジョルジュ・カイエ、シャルル・ロテア、ジャン・バプチスト・ラランの三人です。この三人を比較してみると、霊示の場所、内容、日付に関して、彼らの証言は必ずしも一致しないということに気づきます。

次に、もっと後のマリアニスト伝承を代表する二人の会員の証言を聞こうと思います。それはヨゼフ・シムレルとアンリ・ルソーです。二人には神からの霊示に関して確固たるものがみられますが、霊示の時と内容についてはいくらか違いがあることがわかります。

さらに、いくつか別の観点に立ち戻って考察してみようと思います。シャミナード師の人生を考察していくと、サラゴサで過ごした時期に、師の人生の中で決定的に重要な出来事が起こったということが明らかになります。様々な証言をつき合わせても、このことに関しては、すべての証言は事実上一致しています。従って、師の人生のこの時期に、特に焦点を合わせてみましょう。

以上のことを考察した後、本書はいくつかの結論を提示します。しかしながら、この研究においてよりよい結果を得るために、第二章で同じテーマに関する探究を別の方法で続けたいと思います。

1．ジョルジュ・カイエ師（1790－1874）の証言

シャミナード師が受けた神からの霊示に関する間接的な証言の中で、シャミナード師に最も近く、一番はっきりしているのはカイエ師のものです。カイエ師はシャミナード師を非常によく知っており、かなり長く一緒に住み、マリア会の総長職をシャミナード師から引き継いだ人でした。1850 年 2 月 13 日、シャミナード師の死後間もなく、カイエ師はマリア会員に宛てた回章 21 号で、シャミナード師の伝記に関するデータをいくつか挙げています。彼は自分が述べようとしている論点に関連して、次のように書いています。

「感謝に溢れ、魂をほとばしらせて、シャミナード師が私に対し、

また私たちに、自分を通して神が行われた偉大な事について語ったのは総長自身だったので、師が語った細部にわたる出来事はそれだけいっそう貴重なものです。」

シャミナード師の追放生活に関連して、カイエ師は次のように書いています。

「シャミナード師は自分の黙想の場所として、『柱の聖母』の巡礼地として有名なサラゴサを選びました。師はそこで、不運に見舞われた自国フランスに幸せな日々をもたらして神の意向にかなうようになるまで、神の摂理の計画に従って静かに待ちました。またそこで、マリアに対してすでに持っていた深い愛が、もっと熱烈なものとなり著しく成長しました。

柱の聖母を見て自分の心を満たした感情について師が詳しく話すのを聞くうちに、私たちは師が感じていた幸せに共感して、至聖なる乙女がこの荘厳な巡礼地で師に与えようと計画された、いくつかの特別な恵みを心に描くことが出来ました。その結果、私たちは、『シャミナード師はまたこの巡礼地で、神からの霊示を通して、後にあれほどの成功を収めた司牧計画が師の胸の中に宿された。』と言明するのを恐れません。つまり、この計画とは、もし帰国できたとしたら、フランスに天の元后の誉れのための信徒会とマリアに特別に奉献されることになる修道会を創立することでした。」

ここで、シャミナード師は神の霊示について話していますが、それは柱の聖母から与えられた一連の特別な恵みです。以上述べてきたことから、次の点が示唆されるように思われます。第一に、サラゴサで過ごした追放の時が、シャミナード師にとってひとつの非常に深い霊的体験であったこと。第二に、神の霊示を通して師が受けたものは、マリアに特別に奉献された修道会の創立と同様に、天の元后の誉れのためにフランスに信徒会を創立するという計画でした。サラゴサでの霊示は、マリア会の創立ということだけに限られてはいませんでした。それはより広い計画を包含していたのです。

カイエ師は、その生涯を終えるころ、シャミナード師のサラゴサの時期に関して同じような解釈を繰り返しています。マリア会総本部公文書館（AGMAR）に

は、ところどころ非常に細かい筆跡で書かれた一冊の青い表紙のノートがありますが、このノートには、カイエ師の死（1874 年 8 月 18 日）後、少し経ってから、ドマンジョン師によって集められたシャミナード師に関するカイエ師の思い出も記されています。このノートには、次のような多少つじつまの合わない箇所があります。「シャミナード師はその人生の細部についてはあまり語りませんでした。例えば、師がそれについて繰り返して語り、また、そこで多くの恵みを受け、また信徒会を結成するという霊示を受けたとしばしば語った『柱の聖母』の前で祈った時に感じた喜び等…。」このような曖昧さを伴っているとしても、「信徒会を結成する」ということに言及していることは、上で述べたのと同様に、単にマリア会を創立することよりも広い計画を示唆しているように思われます。

2. シャルル・ロテア師（1791－1868）の証言

シャルル・ロテア師と彼の兄弟のルイ・ロテアを混同してはなりません。ルイはアルザス出身の最初のマリア会員であり、マリア会をアルザスに根づかせた人です。ルイはまた当時サント・マリー・オ・ミーヌの教区司祭であった自分の兄弟シャルルを、1821 年にマリア会に入会させました。1829 年 6 月 16 日の日付でシャルル・ロテア師は 18 ページに及ぶ長い話を書いていますが、この文書の最後の部分で、彼は自分の個人的な召命と自分の歩みの中で体験した召命にかかわる困難なことに言及しています。自分のマリアニストとしての召命を強化するために、彼は「マリア会は神の計画が実行に移されたものである」ということを確信したいと望んでいます。そして、創立者が受けたと言われる神からの霊示について語っています。その後で、彼は次のように書いています。「シャミナード師がかなり前に修道会を創立するようにと告げる声のようなものを聞いたと、私は何度も教えられました。・・・・・私は、祈りについての講話か内的生活についての話の中で、シャミナード師が一度次のように言ったことを覚えています。『皆さん、あなた方が今ここにいるのと同じ姿を私はかつて見たことがあります。それはずっと以前に、一瞬のうちに起こったのです。』」

ロテア師はマリア会を創立するという霊示について話していますが、その霊示がどういうものであるかについては明確に語っていません。彼は、「声のような」（聴覚）とか、「私はあなた方を見た」（視覚）とか、多様な言い回しをして

います。この霊示が起こった時に関しては、「ずっと以前に」とあるだけで、何も明確に述べられていません。ロテア師はそれが起こった場所についても何も触れていません。大部分は、この霊示がまさにサラゴサで過ごした時期と符合させようとして書かれました。さらに、このテキストを用いて、サラゴサでの霊示が、将来のマリア会の明確な展望であると説明しようとしました。これらすべてのことが、よく知られている一つの論争をマリア会員の間に引き起こしたのです。

ロテア師が遠回しに触れているビジョンがサラゴサでの時期に当てはまり得ることを認めるとしても、それは、マリアによって鼓舞され、マリアに奉献した将来の修道者である福音宣教者についてのひらめき、つまり、超自然的な直観として解釈できるのです。このように解釈すると、このビジョンは、すべての恵みと超自然的な直観にも当てはまるでしょう。それはフランスの再キリスト教化をめざすすべての宣教計画と信徒宣教者を含みます。ロテア師の証言によれば、シャミナード師は「ずっと以前に・・・・あなたがたを見ました」と言いましたが、これは、シャミナード師が汚れなきマリア修道会や信徒会のメンバーについても考えていたという可能性を排除するものではありません。

私たちはシャルル・ロテア師がマリア会での自分の修道召命について不安を感じていた時に、シャミナード師について話していることを忘れてはなりません。シャミナード師は自分が受けたビジョンをマリア会だけに限定したのでしょうか。むしろ、シャミナード師がこの祈りや内的な声についての話の中で、信徒会や汚れなきマリア修道会について何も触れていないのは、それはただ単に、その時師がマリア会のメンバーにだけ話していたからだとも考えられます。

以上、私が述べてきたことは単なる仮説であり、それほど価値はありません。間接的な証言は、明確化し具体化するのが常に困難な超自然的な出来事に非常に漠然と言及するものですが、この間接的な証言についてなされ得る他の仮説も、それほど重要視する必要はありません。

3. ジャン・バプチスト・ララン師(1795-1879) の証言

ララン師は最初のマリア会のメンバーでした。1817 年 5 月 1 日、シャミナード師と同じような生き方をし、同じ働きに身を捧げるために、自分のすべてを師に委ねた「最も記念すべき日」に起こったことを話している時に、ララン師

はシャミナード師が語ったとされる次のことばを残しています。「これこそ私が長い間待ち続けてきたことです。神様に賛美あれ！神様がそのみ旨をお示しくださいました。30 年前に神様が私に霊示をくださってから探しつづけてきた計画を実行するときが、今来たのです。」

ここで述べられている霊示がマリア会の創立のことに言及していることは疑う余地がありません。しかし同時にこの霊示が、サラゴサの時期ではなく、それよりも約 10 年も前の時期に言及しているということも明らかです。この明白な矛盾に直面して、何人かのマリア会員は多少とも有効な解釈学的な方法によって、「30 年前に」という表現を「相当以前に」とか、「20 年前に」とさえ変えようと試みてきました。そうすればサラゴサの時期とうまく合致するわけです。20 年前がサラゴサの時期と符合するとは言え、事実としては、1817 年 5 月 1 日の 30 年前はミュシダンのころになります。「創立の精神」はララン師の証言を引用していますが、何の説明もなく 30 年を 20 年に変更しています。アンリ・ルボン師（ＳＭ）もその著書「マリア会、その 100 年の歩み」にララン師を引用していますが、20 年と書いています。雑誌「マリアの使徒」の記事では、30 年を 20 年に変更したことを説明して次のように述べています。「ララン師のオリジナルのテキストでは 30 年となっていますが、これは彼の書き間違いです。原稿の主要部が示しているように、彼は日付に関して非常に不正確な人だったからです。」ララン師がその著作の中で、しばしば日付、名前、場所についての事実関係で間違っているのは紛れもない事実ですが、このケースに関しては、30 年を 20 年に変更することはありえないと思われます。この第一章と第二章で、私はその点について説明するつもりです。マリア会創立に関する神の霊示に言及しているすべての証言を、サラゴサの時期に合わせようとするこのような試みは、サラゴサでの霊示をマリア会創立のことだけに限定しようとする傾向の表れに過ぎないのです。

この証言の持つ他の面も強調する必要があります。それはララン師がシャミナード師は長い間―それが 20 年か 30 年かは別にして―神様が師に与えてくださった霊示を実行しようと努めてきた、と明確に述べていることです。それによって、あの霊示を実行するということは長期にわたり捜し求めてきたとことを推定させるのです。このことは、次の第二章で述べる歴史的な事実関係と正確に符合することになります。

4. シムレル総長（1833－1920）によって収集された伝承

マリア会の第４代総長であり、シャミナード師の最初の伝記作者であるヨゼフ・シムレル師は、神からの霊示に関する伝承に度々言及しています。マリア会内でこの伝承が強化され、解釈される上で彼が及ぼした影響を考えると、彼のいくつかの著作について考察せざるを得ません。そしてすぐ確認できることは、彼は必ずしもこの霊示をいつも同じようには提示していないということです。1887 年、最初の著述の中で彼は次のように書いています。

> 「シャミナード師はボルドーに戻り、二度と離れることはありませんでした。師は、この大きな街に住みました。キリスト教信仰を公然と実践しようと望んでいた様々な身分の人々は、師の質素な礼拝堂、後にはマドレーヌ聖堂に引き付けられました。師は無原罪の乙女の保護のもとに、それぞれ青年男子、青年女子、父親、母親のための『聖母会』を創設しましたが、これはほんの始まりに過ぎませんでした。シャミナード師は、長い間心中深くとても大きな計画を温めてきたのです。サラゴサでの追放期間、師はフランス教会の不幸な状況を常に案じ、柱の聖母の巡礼所で倦(う)むことなく、祈りのうちに時を過ごしたのです。そこの聖所にある奇跡のご像の下で、師は自分が至聖なる乙女から、信仰の再建とキリスト教の実践を再興するために、自身の人生を捧げるよう呼ばれていると感じました。それを実行するために、師は無原罪の乙女のみ名とご保護のもとにそれぞれ男子と女子の二つの修道会を創立することになるのです。」

このテキストで、シムレル師はサラゴサでの霊示を信仰とキリスト教実践の再興を目指した計画として提示しているように見えますが、それにも拘わらず、彼は信徒の会を「修道会の単なる始まり」に限定しています。この本で訂正したいのは、まさにこのような見解なのです。

上記に引用したテキストの数年後、1889 年に彼は少し異なる他の視点を挙げています。

> シャミナード師は有名な柱の聖母のご像の前で、教会とフランスの

不運を嘆き悲しみ、どうしたらこれほどの荒廃から立ち上がり、これほどの惨禍の再発が避けられるだろうかと自問しながらも、祈りと黙想の中で長時間過ごす幸せを感じました。師は、最も効果的な助けはマリアを通して来るであろうと確信を抱いていました。それで、マリアへの奉仕とマリアの思いに無条件で自身を委ね、この善き母に自らを奉献することが最良だと感じました。柱の聖母のご像の前でこの熱心な息子が子としての感情を吐露する間に、この優しい母はご自分の無私の奉仕者に聖なる考えを吹き込まれました。それは無原罪のマリアのみ名において、またマリアのご保護のもとに、世間に生活する人々のための信心深い共同体と、いとも聖なる乙女によってこのような修道生活に呼ばれる選ばれた魂のための二つの修道会を創設するというものでした。

このテキストによれば、マリアが示されたことは信徒の会と二つの修道会を創設することでした。その目的はフランスの教会をその荒廃から再建し、新しい惨禍が起こらないように防止することでした。これらすべてのことは、柱の聖母のご像の前でくりかえし捧げられた「子としての感情の吐露」の間に起こったように思われます。

1891 年に書かれた「パリのマリア会に関する史的描写」の中で、シムレル師は「サラゴサでの時期はシャミナード師に大きな影響を及ぼしたが、それは、師がそこで母国にある悪について黙想し、また信仰とキリスト教的実践をどうしたら最も効果的に再建できるかということについて常に思い巡らしていたからである。」と語っています。更に「これを実行するために、シャミナード師は『フランスを再キリスト教化するというこの働きは、祝福された乙女の事業である』とますます深く確信するようになりました。従って、師は自分が行う全てのことを、ますますマリアの保護に委ねたいと思いました。」とも言っています。シムレル師はマリア会の歴史について話し、シャミナード師の弟子と協働者を獲得するというマリアの計画に短く言及した後で、これから起こってくるマリア会の創立ということを強調しています。ただし、注目すべき点は、やや不正確な言葉を使っていることです。彼は「あらゆる時代と場所の必要性に適応でき、この信心深い事業を永続させるであろう恒久的な団体」について語っているのです。

後にシムレル師は、マリア会創立の考えを、ボルドーにおけるシャミナード師の最初の使徒職の時期、つまり、恐怖政治の期間にまで遡らせることになります。そのために、1904 年に彼は「マリア会の特徴に関する教え―マリア会創立 100 年にあたって―」を著しました。その中で、彼はマリア会の起源を 1794 年としていますが、それはサラゴサ追放以前ということになります。それにもかかわらず、この本の中で、シムレル師はロテア師の証言とサラゴサの時期とを明確に結びつけています。つまり、マリア会創立の考えはサラゴサ追放の時期に示されたとしています。

確かに、シムレル師はサラゴサでの霊示について繰り返し語っていますが、その霊示の内容をマリア会創立に限定していました。というのは、彼がマリア会について次のように言っているからです。即ち、マリア会は、「(追放の期間に) 柱の聖母がその信仰深い僕(しもべ)に垣間見せてくださった中心の事業です。マリアがその計画を思いつき、それを示したので、マリアが創立者となり、シャミナードがその道具となって、他のすべての使徒的事業に意味を与えるものとしてそれを見せてくださったのです。」

マリアニストの伝承は霊示があったことを絶えず確認していますが、いつこの霊示があったか、その内容がどのようなものであったかについては一致していません。

5. アンリ・ルソー師(1859-1941)の宣言

様々な責任ある地位の中で、彼はパリ管区長であり、総長補佐でもありました。また、彼は間接的ではありますがシャミナード師のことをよく知っており、その伝記を著しました。ここで、シャミナード師の列福調査に当って彼がボルドーで行った宣言の一部を紹介します。

> 1797 年 10 月 17 日にサラゴサに着いたシャミナード師は、フランスから移住してきた司祭に対して、司祭としての全ての役務が禁止されていたので、あまり活動できない状況になりました。それで、師は追放の日々の大部分を祈りのうちに過ごしました。この信仰に溢れた祈りの中で、それは特に柱の聖母の聖堂でのことですが、神のこの僕(しもべ)は天来のことばを聞きましたが、それは師がこれから 50 年

間の後半生に成し遂げる事業に、決定的かつ無条件に自身を捧げるようにと師を動かすものでした。その事業とは、世間に生活する男女キリスト者の共同体の設立であり、1816 年アジャンにおける汚れなきマリア修道会の創立、そして 1817 年ボルドーにおけるマリア会の創立でした。シャミナード師は、これらの事業を通して革命の結果である宗教無関心と戦うことができるということ、また、今始まろうとしている 19 世紀において、自分がマリアの使徒、もし必要とされるならその兵士にもなろうと考えていましたが、いとも聖なる乙女の保護のもとにすべてを委ねるべきである、と理解しました。これらの事業は、神の国のためにマリアを通して開始される必要がある新しい戦いだったのです。“*Nova bella elegit Dominus*（主は新しい戦術を選ばれた）”。

これから別の視点へと考察を進めていけば、カイエ師によって暗示された解釈とルソー師の宣言を確信するようになるでしょう。

シャミナード師の人生において
サラゴサの時期が持つ重要性に関する考察

シャミナード師の人生を全体的に振り返ってみると、サラゴサの時期が師の人生に大きな影響を及ぼし、それを劇的に変えたと結論できます。もっと正確には、「革命の日々とサラゴサでの追放期間」と言うべきかもしれません。革命以前には、シャミナード師はミュシダンで生徒、教師、チャプレン、そして特に会計係りとして生活していました。師は 1771 年 10 才半ばでそこに行き、1792 年 1 月、30 才を過ぎてからそこを去りました。この期間は、模範的で忠実な生活をしていましたが、何かを探し待機していた 20 年間でした。しかし、あまり創造的ではないごく普通の生活でした。

革命の期間に、師は、聖職者市民法への宣誓を拒否するかどうか、拒否すれば結果として地下へ潜った生活を始めるかどうか、という非常に厳しい信仰上の選択をしなければなりませんでした。この期間は緊張に満ちたもので、大なり小なり命懸けの危険を伴う秘密裡の司祭職遂行でした。これまで検証してきたように、サラゴサの期間は祈りと深い内省のときでした。

1800 年、39 才でフランスに戻った時から、シャミナード師が変わったことに私は気づきます。師は追放された時と同じ人ではありません。師は断固としており、自分が何をしようとしているかわかっていました。師は個人的な宣教計画を持っており、並外れた創造的な人になっています。師の人生は追放前のそれと同じではありません。つまり、サラゴサで何かが起こったのです。

サラゴサからフランスに戻ってたった一ヶ月後に、師は信徒のための「無原罪の聖母青年会」を誕生させました。そして間もなく、聖座から「教皇派遣宣教師」の称号を受けました。この称号によって、師は信徒がいないために機能を停止していた教会機構に縛られることなく、また、どの教区にも限定されることなく、教区を超えて自由に宣教活動を行うことが出来るようになりました。シャミナード師は、司教の権威に従いながらも教区の組織からは独立して、宣教を開始しました。そしてほとんど信徒と聖母会だけに捧げられた 16 年が過ぎて行きました。この聖母会は急速に拡大し、いくつかの危機を耐え抜き、政府によって活動を禁じられ、さらに大きな熱意をもって再出発し、発展して他のグループや団体を誕生させました。これらすべてのことは、マリアに奉献された信徒グループによって、フランスを再キリスト教化するという明確な意向をもってなされたのです。様々な試みや漸進的でダイナミックな発展を経た後ようやく、1816 年に汚れなきマリア修道会、そして 1817 年にマリア会が創立されましたが、この二つの修道会は「信徒の共同体へ奉仕し、それを活気付ける為に存在する」というはっきりとした意向をもって創立されたのです。この宣教計画全体は、神の恵みによって次第に明らかにされたこと、そして、その神の恵みはある瞬間にさらに強烈な照らしとして働いたかもしれない、とどうして結論できないでしょうか。

以上のことから、サラゴサの時期はシャミナード師の人生を決定的に方向づける転機であったと思われます。けれども、この同じ転機は注目すべき変化をもたらしたとはいえ、それは急に訪れたものでも、強制されたものでもありませんでした。それは大きなカーブを描く転機でした。すなわち、サラゴサ期間の初めごろにシャミナード師の心に醸成されつつあった多くのものは、師がすでに準備していた計画やすでに経験したことの中に、多少なりとも意識的に具体化されていました。シャミナード師は以前からのアイディアを何も持たずにサラゴサに着いたわけではありません。ですから、もし私たちが本当に、シャミナード師の計画の起源やサラゴサでの霊示の真の意味を理解したいのなら、

師がサラゴサへ行った時に心に抱いていたものを、やや表面的にではありますが、考える必要があります。それが第二章の主題です。

結　論

1. サラゴサの時期はシャミナード師にとって強烈な霊的体験の時であり、またマリアに関して深い影響を受けた時でもありました。その照らしの時を通して、師は自分に対する神の計画を見出しました。また、救いの歴史におけるマリアの役割をより明確に理解しました。
2. この霊示に応え、シャミナード師はフランスの再キリスト教化に向けて、マリアに奉献した男女と共に行う宣教計画を考え始めました。
3. フランスの再キリスト教化というより大きな計画の中に含まれるかたちで、修道会の創立という考えをシャミナード師がサラゴサに行く前に既に持っていたかもしれない、ということは大いにあり得ることです。しかし、次の第二章でみるように、ただこのことについての兆しがあるに過ぎません。このようにして、マリア会のルーツは神によって柱の聖母の前で示された計画の中にある、ということはよく理解できます。
4. 一部のマリアニスト伝承はマリア会の起源を柱の聖母に固定しようとして、それをサラゴサでの霊示だけに限定しようとしてきました。この傾向のために、他の事実を証言しているものを、時として無理なやり方で、言葉の文字通りの意味を変えてまで、サラゴサと関連させてきました。ここから、シャミナード師はサラゴサで、自分が創立しようとしているマリア会を細部にわたって見た、という考え方が始まり、流布したのです。
5. この第一章を通して提示されたすべての考察から、サラゴサでの霊示をマリア会についての正確なビジョンであったとか、マリア会創立のことだけが示されたなどとかに限定する上記 4. のような考え方は、決して結論とはならないということがわかります。また、シャミナード師がフランスに戻ってから行(おこな)ったことや、最終的にどのようにして汚れなきマリア修道会と共にマリア会を創立したかを一瞥するだけでは、師が創立しようとしていた修道会の考えがサラゴサの期間に詳細にわたって練り上げられたと断言することは出来ません。このことについては、第四章でもう少し詳しく触れることに

します。

6. 歴史的な資料を冷静に研究してみると、私たちはサラゴサの時期が、シャミナード師の宣教計画が成熟した特別な恵みのとき、深い祈りと熟考のときであった、と考えるようになります。例えば、豊富な文献が付記されているヨゼフ・ベリエ師（ＳＭ）の著作「ギョーム･ヨゼフ･シャミナードの足跡に関する歴史の道しるべ」はこのケースにあたります。その本の中で、彼はシャミナード師を、柱の聖母の前で祈り、いくつかの使徒的活動に献身し、とりわけフランスに帰った時のための計画と宣教方法について熱心に熟考していた人物、として示しています。

第二章

胎動期の宣教計画

この章では、シャミナード師の宣教計画がどのように発展したかを研究することにします。最初に、シャミナード師が追放された時、どのような霊的背景があったのかについて考察します。その理由は、計画はまずその人の心の中から生まれ、具体的な形を取るからです。

シャミナード師は、サラゴサで孤立していたわけでも、たった一人で居たわけでもありません。師はスペインに追放されて来た他のフランス人司教や司祭、移住者、その他の人々と接していました。様々な宣教計画が彼らの中で討議され、これら全てのことから明らかに影響を受けて、シャミナード師個人の考え方も豊かになったのです。

フランスへ帰国した直後に起こり始めたことを心に留め、また、シャミナード師の個人的な手紙に見られる考えを参考にしながら、この章では、師の精神と心の中に抱いていた司牧計画の概要を提示しようと思います。

サラゴサへ向けて出発した時のシャミナード師の霊的背景

霊的な歩みにおけるある特定の時期にその人が内的に、どのような霊性を持っているのかを総合するのは常に困難なことです。この章では、サラゴサに行く前のシャミナード師の人生を、四つの視点に分けて描写することにします。

（1）シャミナード師個人の堅固な信仰

シャミナード師の伝記作家たちは、師がまだ母親の腕に抱かれていた時に信経（クレド）の祈りを学んだ、と書いています。師は全生涯を通して、いつも強い確信をもってこれを唱え、また、好んで念禱の題材としていました。

師の霊的生活の手ほどきをした兄ジャン・バプチストは、優れた祈りの師であったように思われます。確かなことは、シャミナード師がかなり若いときから瞑想を始め、いつも一意専心、変わらない忠実さをもって祈っていた、ということです。シャミナード師を個人的に知っていたベネディクト・メイエは、

アントワーヌ・ジャック・ド・シャモン司教がクルトフォンテーヌにあるマリア会の修道院で次のように語ったのを思い出しています。「私が司教総代理だった時、あなたがたの創立者がこの地域でその敬虔さで知られていると聞きました。彼は、ほんの 12 才だった時、ご聖体の前にひざまずき、彫像のように動かずに何時間も過ごすことで知られていました。」

祈りがシャミナード師を信仰の人とならせました。祈りを通して、師は個人的にキリスト教信仰を理解し、その信仰が自分の人生を導く根本方針となるまでに、それを自分のものにしたのです。私たちはこの深い霊的歩みについて直接的な証拠となるものを持ち合わせていませんが、マリー・テレ―ズ・ド・ラムルス嬢に与えた助言の中にそれをいくらか見ることができます。サラゴサに行く直前に彼女に認(したた)めた手紙が二通残っていますが、その中で、師は信仰に基づく瞑想を強調しています。シャミナード師がマリー・テレ―ズという特別な人物を指導していたことは事実です。彼女は、繊細な想像力ゆえに引き起こされる小心や鬱状態という厳しい状況に翻弄されたにも拘わらず、情熱的な内的生活の持ち主でした。師の現実的な助言を通して、私たちは霊的指導者であった師がどのような指導をしていたかを知ることが出来ます。1796 年 5 月 27 日、ボルドーで書かれた最初の手紙のなかで、シャミナード師は次のように言っています。

> 朝の祈りにつけ加えて、最初はたっぷり 15 分かけて黙想をしなさい。内的に神様を礼拝し、「私は単なる塵や灰に過ぎませんが、神のみ前に我が身を置きます。」と言ってから始めなさい。（もし自分だけなら、床にひれ伏して礼拝しなさい。それから、ひざまずき、両腕を広げて信仰宣言を唱えなさい。）
>
> このような準備をしてから、出来る限り潜心して神様のみ前に自分を置きなさい。この潜心におけるあなたの魂の内的心構えは、それが信仰、希望、愛、または神の意志への従順のいずれであれ、純粋な気持ちでなければなりません。今日一日潜心して過ごし、信仰の動機によってのみ行動する恵みを神様に願ってから、黙想を終わりなさい。

シャミナード師の意図は明確です。つまり、信経を瞑想することによって信

仰を堅固なものにし、結果的には、信仰の動機によってだけ行動するようになること、これがシャミナード師の意向でした。これは師自身の霊的な道であったに違いありません。

次に掲げる1797年9月15日付けの手紙は、追放される数日前のものですが、シャミナード師はこのように書いています。

> 我が娘よ、私はあなたに、あらゆることを信仰のうちに見るようにしなさい、と繰り返し言ってきました。ある種の信仰の瞑想をするように、とさえ助言してきました。それはあなたを徳のうちに支え、進歩させるすばらしい手段であると私は確信します。同時に、それはあなたの内的な活力を回復させてくれるでしょうし、また、あなたが誰かから受けるかもしれない助言の中で、あまりに緩やかすぎたり厳格すぎたりするものからあなたを守るでしょう。そのような助言をする人は、神の霊に導かれてと言うよりも、むしろ人間的な賢明さによってあなたを導くかもしれない人なのです。私がいつもあなたに勧めてきたあの聖なる純真さによって導かれるように、あなたの想像から起こってくるすべての考え、判断、感情を常に捨てなさい。

私たちはここでも、やはりシャミナード師の同じ霊的原則に気づきます。つまり、想像や単なる人間的な賢明さによってではなく、信仰によってだけ彼女の人生は導かれるべきだ、という原則です。このような強調から、シャミナード師は自身が提唱した生き方を自ら実行していたことが浮かび上がってきます。シャミナード師の人生を形成し動機づける真の原則は、瞑想による信仰だったのです。

以上述べてきたことは、歴史上非常に荒れ狂った時期の出来事でした。シャミナード師はそのことをこの同じ手紙の初めに書いています。

> 「人は誰でも必ず死ぬ」と言われています。その通りです。しかし、死という事実を警告し、我々をその死に向けて準備させる神から、私たちはどのような教訓を得ているでしょうか！これらの教訓は一つひとつ、ある種、死に近いものです。信仰深い人は、

その魂を飲み込んでしまうような大混乱の出来事の中で、どうしたら良いのでしょうか。信仰によって自分自身を冷静に保ちなさい。その信仰が、永遠の神のご計画を礼拝するようにしてくれると同時に、「神を愛する人々にとって、すべてのことは善となる」ことを私達に保証してくれるのです。

これらすべての書簡を通して、シャミナード師自身がこの時期に体験したことが明らかになります。この時期は非常に荒れ狂った時代でした。秘密裏に行った役務の期間に、師は心から愛した人々がギロチンにかけられるのを見ましたし、多くの教会機構がもろくも消えうせ、大勢の人々が非キリスト教化されていくのを体験しました。信仰に殉じて死んでいく人々の英雄的な忠実さを見て、殉教者達の時代を回想させられました。多くの人々が信仰を放棄し、生活の異教化がどんどん進むという悲しむべき光景をみて、福音を宣教し始めた使徒たちの時代が喚起されました。革命が勃発し、司祭が聖職者市民憲章への忠誠を誓うよう要求された時、まだミュシダンの学校で会計係をしていたシャミナード師は、1791 年 2 月 2 日付けのサルラの主任司祭、ポンタール師宛ての業務用書簡の終わりに、この憲章に宣誓しないという自身の決断について、次のようにコメントしています。「この地域に、初代教会に匹敵する強固な意志をもって私がいることは間違いありません。」これは本当でした。師は宣誓を拒否し、地下に潜って殉教者とカタコンブの時代と同じように司祭職を実践しなければなりませんでした。

長時間に及ぶ瞑想によって鍛えられ、また、忠実であるか大胆であるかという個人的な選択に鍛えられてきたシャミナード師は、サラゴサに着いた時、非常に深い信仰を身に付けていました。サラゴサで、師は信仰に生きる人々を獲得するという教会の生死にかかわる緊急の問題について熟考することになります。初代教会の時代のように、信仰に生きる人々だけが、どのような逆境や迫害に直面しても信仰に忠実であることができるのです。

（2）マリアへの深い愛

シャミナード家の 14 番目の子供で、男子として最後に生まれたギョーム・ヨゼフは、母親のカトリーヌ・ベトンを非常に愛していました。列福調査を開始する過程で、シャミナード師の姪の曾孫にあたる女性は次のように証言しまし

た。「私の両親は、シャミナード師が自分の母親を非常に愛していたこと、また、まだとても幼かったのに大変信心深かった、と語りました。私の母はよく彼を模範として示していました。」

ミュシダンでの最初の年に、よく知られている事故が起こりました。ある日、遠足に行ったとき、彼は友達と採石場で遊んでいました。走っているうちに、一人の友人が踏んだために大きな岩が落下し、ギョーム・ヨゼフの片方の向うずねをひどく傷つけてしまったのです。

それで、友人達は彼を学校まで抱きかかえねばならないほどでしたが、学校でも、心配して彼の治療をしました。しかし、６週間経っても傷は治りませんでした。それどころか、傷は日ごとに悪化していきました。兄のジャン・バプチストは彼に、マリア様に助けを祈るようにと助言しました。兄弟二人はすぐ、もしマリア様の取り次ぎによって傷の回復という恵みが得られたら、ヴェルドレーの聖母聖堂に巡礼するという願を立てました。この願は間もなく叶えられたので、ギョーム・ヨゼフはいつもこれを奇跡だと思っていました。その後すぐ、彼は自ら立てた誓約を果たし、傷の回復をマリア様に感謝するために、兄とヴェルドレーに行くことが出来ました。この一連の出来事は、マリア様に対する彼の愛をそれまで以上に強めることになりました。

ギョーム・ヨゼフがボルドーで神学を勉強していた時、若者や学生の信仰の炎を燃やし、使徒職へと励ますために活動していた聖コロンブの聖母青年会のメンバーになったことは充分に考えられます。他方、ミュシダンの学校が聖母マリアに対する信心で有名だったことも我々は知っています。学校の小さな教会には無原罪の聖母に捧げられた礼拝堂があり、そこで聖母青年会の集まりが持たれたようです。教師たちはおとめマリアを賛美する信心業をいつも行っていました。また、イエズス会の聖母青年会を経験し、それを学校にどう適応させたらいいかを知っていた兄のジャン・バプチスト神父の影響があったことも疑いありません。

若い頃のギョーム・ヨゼフについて述べているこれら全てのことから、師がサラゴサに来た時、マリアに対する師の愛はすでに深いものであったと納得できます。シャミナード師はサラゴサで、マリアが一つの使命を持っているという新しい洞察を得て、マリアが教会の新たな必要性に直面して何かをなさる、ということを悟るようになります。マリアは、受肉において描かれているように、また、カナの婚礼で僕（しもべ）たちによってイエスに対する信頼を生じさせたよ

うに、信仰の模範であり、私たちをイエスへと導く方です。このような考察によって、シャミナード師はマリアへの奉献というものに本来備わっている豊かさと可能性に気づくようになるのです。

（3）確かな宣教体験

シャミナード師がミュシダンの学校で勤務していた時期、師はチャプレンおよび教師として司祭職を遂行しました。しかし、革命期間中に、師の役務はより宣教的な性格を帯び始めました。激しく変動する時代の中で、聖職者市民憲章への誓約を拒否した司祭達の生き方と活動は根本的に変化しました。信仰に関して言えば、初代教会の時代を再現するという思いがあったことについてもう既に述べました。事実、これらの司祭は教会もなく、信者たちが提供してくれるもの以外には何も持たずに隠れて生活し、どのようなテーブルであろうとそこでミサを捧げ、ブリキ缶やコップをカリスの替わりに用いました。シャミナード師も同じように生活し、行動したのです。

司教達は初代教会の宣教法を勧め、使徒言行録の時代を模範とし始めて、宣教という考え方が強くなりました。

このような状況で、司祭が信徒の協力者と共に使徒職を遂行するという考え方が定着し始めました。罪人の回心のために祈り、償いをする信仰心にあふれたグループが形成されました。多くの婦人達の援助は賞賛に値するものでした。彼女たちは刑務所を訪問し、裁判所を駆け回り、あちこちにニュースを伝え、また、拘置所にご聖体を運ぶこともあったのです。

シャミナード師が、教会生活において信徒を養成し、その責務や活動を促進するという、たゆまぬ努力に加えて、司祭職を遂行しなければならなかったのは、まさにこのような歴史的な状況があったからです。

1795 年頃、革命が一時的に中断され、非宣誓司祭たちはボルドーに数ヶ所の場所をみつけて、それをすぐに小さな礼拝所や祈祷所にすることができました。この時期にシャミナード師が行っていた司祭としての役務を示すものがいくつかあります。師はサン･ユーラリー通り 44 番地に住み、そこに小礼拝所を設けました。ボルドー教区の管理者からの依頼によって、悔い改めた宣誓司祭の和解という神経を使う仕事に聴罪師として奉仕しました。この公的な任務に加えて、シャミナード師は若い男女のために多くの時間を捧げました。多分、師は非キリスト教化しようとする哲学の途方もない影響に反撃するために、彼らの

信仰を本気で養成しようとする意図があったと思われます。これら若い人々の幾人かの名前は判っています。彼らは自分達をシャミナード師の弟子だと考えており、彼らの中から司祭や修道者が生まれ、また、その後、女子修道会の創立者となった人も何人か含まれていました。

これら司牧の仕事に献身しているうちに、突然、シャミナード師は追放の身となってしまいました。それで、師はある種の宣教体験を積んでサラゴサへ行ったことになります。師は、そこで、その時代の人々を信仰において養成するという自身の召命について新しい光を見出すことになりますし、また、信仰の人々からなるグループや共同体の証言によって成し遂げられるであろう、豊かな使徒的実りにも気づくことになります。

（4）修道生活に対する絶えざる関心

シャミナード師は若い頃から修道生活に惹かれていました。ミュシダンにいた 14〜15 才の頃、師は清貧、貞潔、従順の私誓願を立てました。晩年、これについて次のように説明しています。「私の誓願は、神だけに私を結びつけました。というのは、私は自分がどんな修道会にはいるのか、まだ何もわからなかったからです。」ミュシダンで学校を運営していた聖シャルル会というのは、厳密な意味での修道会ではなく、むしろ、司祭の団体であったことを思い起こす必要があります。

シャミナード師自身の誓願についての解釈は、その魂の状態を非常によく示しています。師は修道者になりたかったのですが、どの修道会が自分の召命に合うのかわからなかったのです。この事実は、マリア会司祭のセルマン神父によって 1857 年に著され、マリア会総本部の公文書館に保存されている「マリア会の歴史」という本の中で確認されます。「シャミナード師は、青年時代に、修道院に入りたいと熱望しましたが、それは修道院で自らの救いのために大きな助けが得られると考えたからです。このために、師は多くの修道院を訪ね、自分の傾向や好みに最も合うものを一つ選ぼうとしました。しかし、残念ながら、自分の魂が必要としている修道院をその中に見出すことができませんでした。どこでも、世俗の精神がはびこり、イエス・キリストの精神に対抗していたのです。」

これらの理由から、また、神からの新しいしるしを待ちながら、シャミナード師はミュシダンに留まりました。師の教え子の中でおそらく最も有名な人は、

ザビエル・ダリエスです。この人は 1789 年から 1791 年まで同じ学校で哲学の教師をしていましたが、シャミナード師と緊密な関係のうちに数年間過ごしました。後年、この人は「マリア会」という名を持つ修道会の創立を考え、それをスペインで始めることを望みました。そのために、その計画は、時には「スペインのマリア会」と呼ばれることもあります。しかし、彼の企ては失敗しました。彼は自分と同じようにスペインに追放された数人のフランス人司祭に、自分の修道会創立の計画について話していたのですが、彼らの中に、シャミナード師の兄弟、ルイ・ザビエル・シャミナードがいたのです。多分、このルイからシャミナード師はその計画について聞いたのです。このような事情で、私たちはシャミナード師の私的文書の中で、ダリエスの計画である「無原罪の神の母をたたえて：マリア会の計画」を読むことが出来るのです。ダリエスとシャミナード師の理念に見られる否定できない類似性と、彼らがお互いに与え合ったかもしれない影響を考え合わせると、いくつかの問題が浮かび上がってきます。シャミナード師はミュシダンで「マリア会」を創立するという何らかの意向をすでに持っていたのではないでしょうか。しかし、その目的はまだ漠然としたものであったかもしれません。ララン師の証言によれば、1817 年 5 月 1 日にシャミナード師が述べたとされるあの有名な言葉からこの仮定が説明されるかもしれないということに注目してください。それは次の言葉です。「30 年前に私が霊示を受けて以来、探し続けてきたあの計画を実行に移す時が今来ました。」前にも述べたように、1817 年から 30 年前は、ちょうどミュシダンの頃になるからです。

シャミナード師は、その人生全体を通して、教会における修道生活の発展のために真摯な関心を示しました。師が多様な修道会と関係をもったことを調べ、フランスで他の修道会が復活するために師が果たしたことを知り、また、師の弟子や信徒会員の中から多様性に富んで優れた修道召命が多数生まれ、師がそれを喜んでいたことを考えると、強い感銘を受けます。

私たちには、シャミナード師が革命中にすでに何かを組織しようとしていた、というはっきりとした証言があります。とはいえ、この研究では、このことを明確にするのを意識的に避けてきました。というのは、私たちはこの研究で、まだ仮説をとり上げているだけですし、そのしるしについてだけ考えているからです。革命の時代に、つまり追放以前に、シャミナード師と接触のあった男性の中に、ドニ・ジョッフルという人がいます。ボルドーからそれほど遠くな

いところで生まれたこの 18 才の青年は、司祭になりたいと望んでいました。彼は、この困難な時代に、誰か優れた司祭と出会いその人に密かに指導してもらって自分の召命の道を歩みたい、と思ってボルドーへ来ました。彼は幸運にもシャミナード師と出会いました。1797 年に彼が父親に書いた手紙があります。

> 私は自分の心が探しつづけていた司祭を見つけました。彼は聖人です。彼は私の指導者であり、わたしの模範となる人です。というのは、私は司祭になりたいからです。私の決意は以前よりも強くなりました。私が熱望しても、すぐには司祭になれないでしょう。今は困難な時代だからです。私は毎日働き続けています。私は午後以外にはこの聖なる人に会えませんし、それも、毎日というわけでもありません。しかし、彼は、「もうすぐ、あなたは毎日、私と一緒にいるようになるし、私の最初の弟子になります」と確約してくれます。それが彼の希望ですし、また、私の希望でもあります。

この手紙のような事柄から、シムレル師は、マリア会の起源が革命の時代にあると考えるようになりました。彼は、「マリア会創立に先行するあらゆる出来ごとは、その準備であった」といういつもの固定観念で、この手紙を「修道会創立の試み」と考えました。それにもかかわらず、革命期間中にシャミナード師が何を計画していたのかを正確に捉えることは非常に困難です。一方、歴史は、シャミナード師はマリア会を創立する以前に、若い弟子たちと信徒会の創立などを実現したことを示しています。

確かなことは、追放によって師の計画は不意に中断されてしまったということです。しかし、ドニ・ジョッフルは立派な司祭となり、父親への手紙で述べているように、シャミナード師のことをいつも聖人と思っていました。

サラゴサに着くとすぐ、シャミナード師は修道生活への愛を強めました。師はサラゴサやその近辺に修道院を持つすべての修道会、特に、少し前に マエラで創立された修道会「シトー会聖スザンナ修道院」と関わりを持ったようです。おそらく、師はしばらくの間、そこの修道者たちと生活を共にしたことさえあったようです。何年も経ってから、カイエ師は、1836 年 2 月のクルーゼ修道士宛ての手紙で、偶然にこのことを思い出しています。「シャミナード師とブ

エ修道士がかつて生活したスペインのシトー会聖スザンナ修道院の大修道院長が、４人の修道士と共にボルドーに到着しました・・・。」

シャミナード師はスペインで、フランスを再キリスト教化するというプランにおいて、修道会が持つ力と継続性を悟りました。しかし、師は自身の宣教計画と教会の新たな必要性に適応できる新しい修道生活の形式を見出さなければなりませんでした。

追放されたフランス人聖職者の宣教計画

追放されていた３年間に、シャミナード師の霊的・使徒的発展と、師が特にスペインのサラゴサでフランス人の追放された司祭や司教たちと暮らした生活との間に、間違いなく存在したと思われる関係については、これまで充分に強調されて来なかったように思われます。サラゴサでフランス人聖職者が置かれていた状況、彼らがその司教から受けていた指導、また、フランスに帰った後に実行しようと思い描いたことや成し遂げようと計画したことを知ることは必要不可欠です。シャミナード師も彼らの一人であったことを決して忘れてはなりません。

また、フランスに起こった新しい司牧的な状況に直面して、その当時準備された宣教の手引きからいくつかの内容を抜粋し、強調することは興味深いことです。それらの内容は、フランスの救いの歴史における新しい時代に使徒たちが抱える不安を示しています。

シャミナード師の司牧的発展に計り知れない影響を与えたかもしれない進取の精神は、タルブ教区を宣教によって再組織化することでした。この再組織化はサラゴサから指導されましたので、シャミナード師はそのこと知っていましたし、また、その実りについて証言できるのは確かです。

（１） サラゴサのフランス人司祭共同体の状況

シャミナード師が他のフランス人追放司祭や司教と接触していたことは確かなことです。追放されたフランス人聖職者たちが、シャミナード師が到着した時どのような状況に置かれていたかについて、私たちは多少知っています。特にサラゴサでは、彼らは真の教会共同体を形成していたようです。追放された司祭の一人であるベッセ師の個人的な回想によれば、フランス人移住者たちは

「疎外という状況のただ中にあって、共に生活する以外になす術を知りませんでした。彼らはそのすべてを、喜び、悲しみ、持ち物、或いは貧しさも、分かち合いました。フランスからの手紙やニュースは、その貰い手と同じように、すべての人を悲しませたり、慰めたりしました。それは、彼らが散歩したり、祈りや典礼を共にしていたからです。そして、このような司祭としての兄弟的な交わりは、人々の心を捉えました。」

シャミナード師が、自分と同じくスペインへ追放されたフランスの高位聖職者、オーシュの大司教ラ・トゥール・ドュ・パン・モントバンのルイ・アポリエールと連絡し合っていたことは確かです。自分の追放の地として選んだサラゴサをシャミナード師に紹介したのはこの大司教でした。ただし、この二人がスペインへの途上どこで落ち合ったかについては、伝記作家たちの間で合意がありません。追放中のシャミナード師とオーシュの大司教との密接な関係は疑えません。大司教はフランスへ戻った時、バザ教区の管理をシャミナード師に委ねました。また、シャミナード師が聖座から「教皇派遣宣教師」の称号を得たいと希望した時、それに応えました。

サラゴサとその周辺の地域には、オーシュ教区から来たかなりの数の司祭が住んでいました。彼らは、同じくサラゴサに住んでいたフランス人司祭、トーマス・カステランを通して、通常はモンセラートに住んでいた自分たちの大司教と連絡をとっていましたが、実は、彼はタルブ教区の司教総代理でした。つまり、彼はオーシュの大司教から任命を受けて、オーシュ教区の司教総代理の仕事も引き受けていたのです。カステラン神父を通して、オーシュ大司教とタルブの司教はサラゴサに住んでいた司祭たちと緊密な連絡をとっていたのです。さらに、オーシュの大司教はサラゴサへ出かけ、しばらくの間、そこで生活したこともあるようです。

フランスから移住した司祭たちは、サラゴサで兄弟的な共同体を形成しました。彼らは会合を持ち、そこで様々なことを話し合う中で、フランス教会の新しい状況がもたらした、予想もされなかった具体的な問題を討議したことは確かです。以前とは全く違った状況下ではどのような義務を果たすべきか、と彼らは自問自答しました。これらの会議はタルブの司教、フランソワ・ド・ゲン・モンタニャックの主導のもとに始められました。カステラン師がこれらの会議を準備し、世話をしました。

オーシュの大司教が自分の教区司祭に送った手紙や訓令にみられる視点は注

目に値します。数回にわたって、彼は今置かれている状況を初代教会と比較しています。ここに比較の例をいくつか挙げてみます。1792 年 2 月 4 日付けの手紙で､次のように書いています｡「初代教会のことを思い出していただくことは、皆さんのためになると私は思います。私たちは魂の救いを案じて、もっとしばしば初代教会をテーマに選び、それについて内省し、それを模範とすべきだと思います。この比較によって、私たちは自らを恥ずべきなのか、それとも、賞賛されるべきなのかを共に調べてみようではありませんか。」

1795 年 7 月 22 日の手紙では、次のように述べています。「自分の信仰に忠実に踏みとどまった人々の間にみられる真実な徳や真の勇気は、外のどこにも見出せないことは明らかです。彼らが示した数多くの特性、つまり、誰も打ち勝つことのできない忍耐、見事な不偏心、英雄的な勇気、朽ちることのない忠実さ、死よりも強い愛、などは天の光景であったし、また、初代教会がそうであったように、我々の目に教会をすばらしいものとして示してくれたのです。」

シャミナード師がサラゴサに来る前にフランス人追放者の間に漲(みなぎ)っていた雰囲気は、以上のようなものでした。

（2） この時期に準備された宣教の手引き

シャミナード師がスペインに来る少し前に、もう一つの意義深い出来事が始まりました。それは、オーシュの大司教が、自分と同じくモンセラートに住んでいたタルブとラヴォールの二人のフランス人司教と協定を結び、ソソル師に「迫害後にとるべき行動について」という本を編集させたことです。この本は 1800 年（シャミナード師が追放からフランスに帰った年）にフィレンツェで発行されました。但し、内容の大部分は、オーシュの大司教が主宰する三人の司教の会議において、すでにモンセラートで話し合われたものでした。その論文は二巻から成っていて、当時のフランス教会が置かれた非常に特殊な状況によってもたらされた、あらゆる具体的な問題を非常にバランスよく考察しています。特に、宣誓した聖職者とそれを拒否した聖職者間の心を引き裂かれるような分裂は、大きな問題でした。和解と小教区・教区の再組織の問題は、生易しい課題ではありませんでした。

第二巻の二つの章から、いくつかの考え方を取りあげてみます。第 8 章は、小教区において秘跡などをどのように授けるかという問題を取り扱っています。この章では、司祭の数が豊富であるということは必ずしも有利とは言えないと

述べています。つまり、ごく少数であっても熱心で良い司祭であれば、教会はそのような司祭を必要とする、と述べているのです。すべての小教区の必要性に応えるのに充分な数ではないとしても、必ずしも司祭がどの小教区にもいる必要はありません。この再キリスト教化の初期にあって、聖職者は主任司祭であろうとなかろうと、自分はどこの、どのような教会禄のある役職にも結ばれていないと考えるべきです。ものごとをより良いものにするという希望のうちに、すべての人は指示されたところへはどこへでも、たとえ自分の小教区外であっても出かけるべく、自分を司教の意向に委ねるべきです。時代が要求し、教会が必要とすることに適応することが大切なのです。もし、日曜日やある地域の聖日にミサを捧げることが出来なければ、叙階前の聖職者か有徳の信徒が、通常ミサが捧げられる時間に人々を集めるべきです。司祭がするはずの説教は朗読に替えることができます。

第 10 章はミッションについて話しています。これはフランスの至る所の村や都市でなされた宣教活動のことを指していますが、この宣教というのは、数日間、宣教師が熱心に説教して、一人ひとりが回心し、真剣に神に立ち返るようにと励ますものでした。この 10 章では、次のように述べられています。「フランスで信仰をいち早く再建する最も確実な手段の一つは、福音宣教という手段、中でも真の熱意を持って、信仰による照らしと正確な神学的知識を持つ宣教師によってなされる福音宣教です。これほど多くの人を神へと連れ戻した良い働き手のグループは、私たちの間から消え去ってはいません。この種の役務に非常に向いていると思われる高潔な聖職者が数多くいます。

そして、この 10 章では、これほど多くの人々を、これほど短期間のうちに呼び集めた宣教に対してなされた、すべての異議申し立てに反駁しています。宣教師によって播かれたものは、後に主任司祭や司教代理によって育てられ、強化されるはずです。

同じ内容の本が他にもあります。それは、「宣教師の手引き―フランスのカトリック再建に働くべく召された司祭を確保する行動について―」という本です。この著作はジャン・ノエル・コストによるもので、彼の死後、1801 年にローマで出版されました。この本の編集者によれば、出版以前に 8 冊ないし 10 冊の手書きの写しがフランスにあり、多数の聖職者に読まれていました。シャミナード師がこの本のことを知ったのは、その出版後、つまり、フランスに戻った後であったことはほぼ確実です。サラゴサの時代にそれを知っていたかどうかに

ついては何もわかりませんが、この本にはいくつかの非常に啓発的な段落があります。第二部の 3 章では、住民がカトリック司祭に助言を求めることを躊躇するようにみえる地域では、どのような手順を踏んだらよいかについて記述されています。そこでは、信徒を選び、信徒が使徒職に自らを捧げることが勧められています。

> 最初に絶対に必要なことは、教育を受けた骨折りを惜しまない信徒たちを用いることです。彼らは我々が取るべき方法を準備し、他の人が我々を受け入れるのを容易にしてくれるでしょう。最初の一歩を踏み出すためには、我々よりも彼らのほうがより相応しいでしょう。というのは、その信徒たちに対する偏見が少ないからです。つまり彼らは、ある所から他の場所へ移動する際により少ない障害で済みますし、我々が困難しか見いだせないような無数の状況を利用して、説き聞かせる必要のある真理を、よりたやすく人々に勧めることが出来るのです。聖職者不足はこのような手伝いを必要とするでしょう。このことはキリスト教を信じない異教の国々で働く宣教師も同様です。その宣教師たちは、人々の救いと人々を真の宗教に留まらせる上で、とても大きな働きをするカテキスタと呼ばれる数人の信徒を、自分の指導の下に呼び集めるのです。

再キリスト教化という、とてつもなく大きな課題と司祭不足が新しい宣教方法を要求したあのような時代にあって、以上のような考え方が沸き立っていました。

（3） タルブ教区の福音宣教への再組織とその実り

タルブ教区の再組織の発展をたどることは、同様に、非常に意義深いことです。この再組織の歩みは、司教の強い勧めで、教区総代理であるトマス・カステラン師によって、サラゴサから指導されました。教区全体がいくつかの宣教区に―中心の宣教区とそれに従属するいくつかの宣教区に―再組織されました。各宣教区の責任者は宣教師で、彼は定まった住所を持ちませんでした。つまり、彼は自分の宣教区域全体を移動して回り、福音宣教に関心のある人々を糾合し、

そして、必要な時には近隣の宣教区の世話をする用意もありました。宣教師たちは、信心深い人々の司牧に専念するよりも、むしろ、罪人や不信心な人の回心にその努力を傾注しました。宣教区を組織するにあたって、男女の信徒が何らかの役割を担うこと―たとえそれが教えること、または、宣教師たちと中心の宣教区間の連絡をとる奉仕の仕事に過ぎないとしても―が勧められました。その結果、カトリック小共同体が互いに強化され、教会生活や教区の活動に非常に気を配るようになりました。これら共同体の生活はとても熱心だったので、そこから司祭職への召命が生まれ始めました。フランスでは未来の司祭を養成することは不可能だったので、彼らをスペインへ送らなければなりませんでした。数人の若者は神学校に入るために祖国を離れることに同意し、サラゴサに集合し、トマス・カステラン師の指導下に入りました。

シャミナード師がサラゴサに着いた時、このタルブ教区の計画はすでに始まっていました。更に、サラゴサでは、ルイ・ザビエル・シャミナードがその大部分の時間をフランス人神学生の養成のために捧げていたのです。このことを、私たちはシャミナード師が自分の兄（ルイ）の人生について書いたノートから知っています。フランス人神学生のうち何人かは、タルブ教区の宣教の実りなのです。シャミナード師がタルブ教区における宣教の努力がもたらした結果について知っていたことは確かです。

結　論

以上、この項で述べてきた事柄から、私たちは躊躇なく一連の結論に導かれます。サラゴサで、追放されたフランス人司祭たちは、フランス教会の新しい事態に関して、また、その結果として生じた司祭職の再組織に関して、検討していました。このような研究の中で、初代教会の状況が繰り返し言及されました。そして、使徒たちが世界をキリスト教へと改宗させる仕事に着手した時にとった行動、あるいは、異邦人の地で宣教師たちがとった行動を模範とすべきことが、少なくとも初期には、繰り返し言及されました。彼らは信徒たちを説得して、フランスの再キリスト教化という働きに自らを捧げるよう勧めなければなりませんでした。

シャミナード師が、その追放期間中にサラゴサのフランス人司祭たちの間で

進められていた研究会のメンバーであったことは間違いありません。

シャミナード師の宣教計画の概要

シャミナード師の手紙から引用された二つの文章が、師の宣教計画がどのようなものであったかを知る手掛かりとなります。追放の終り頃、1800 年 8 月 26 日付で、師はサラゴサからド・ラムルス嬢宛てに手紙を書いています。

> ・・・勇気を出してください。時間と歳月が過ぎてゆきます。テレーズさん、私たちはどんどん進み、私もあなたもそれぞれ歳を取っていきます。私たちは大体同じ歳です。体力は衰えていきますが、まだ何もしていません。私たちのよき師、イエス･キリストの栄光のために、思いきって何かを始め、行わなければなりません。そのことについて考えて下さい。私も考えてみます。・・・

この手紙の主旨は、シャミナード師がすでに何かを計画していることをうかがわせます。師の心にあったものをどのようにして知ることが出来るでしょうか。14 年後の 1814 年 10 月 8 日付、アデル･ド･トランケレオン嬢宛ての次の手紙で、シャミナード師は何かを表現しています。

> あなたに私の秘密を漏れなく話しましょう。霊的娘たちの中でも自分の指導に全面的に従う者に対して、依然として何かを秘密にするような司祭がいるでしょうか。私は 14 年前に 「教皇派遣宣教師」の資格でフランスに帰国しました。祖国は全く不幸な状態にありました。もちろん、教区長方の許可の下にそのような資格で帰国したのです。私はこのような任務を一番よく果たせるとしたら、それは現在見られるような信徒会を設立する以外にないと考えました。各会員は、性別、年齢、身分の如何を問わず、宣教の積極的なメンバーになることが求められました。信徒会の各グループの幾人かの会員は、まだ世間に住んでいますが、一つの小さな修道団体を形作ることになるでしょう。これら各グループの中には、信徒会の運営に携わる男女の役職者が常に見られることでしょう。これら幾人かの

信仰心に富む男女は共同生活を望んでいました。この共同生活には利点が数多くありました。今のところ、幾人かはこの世の事柄をすべて捨てて、正規の修道者として共同生活をしたいと望んでいます。この霊性には従う必要があります。ただそのことが信徒会の働きを本質的に変えることなく、むしろ、それに役立つよう注意しなければなりません。これまでに数人の信徒会会員がそれぞれ異なる修道会に入会しました。私たちは喜んでこのことに注目しました。女性の役職者たちが多少残念そうにそのことを私に知らせた時に、私は、彼女達を慰めるために、「『負けるが勝ち』のゲーム（トランプで、沢山集めた者が負けるゲーム）をしているのだよ」といってあげました。しかし、今、私たちは既成の修道会に入ることとは全く違う何かを経験しています。共同生活を望むこの人たちは、信徒会と同じ精神を持つ修道者、いやむしろ、その精神を生き生きと生き続け、正規の修道者として生活することを望んでいる信徒会会員なのです。

この手紙の段落には非常に重要な内容が書かれていて、後でこの手紙について検討しますが、ここでは、シャミナード師が、自らの宣教計画の概要をアデルに打ち明けようとしているということで充分です。師は、この 14 年間に自身が取り組んできたものすべてのことを思い起こしながら、この手紙を書きました。その内容を整理すると次のようになります。

① シャミナード師はフランスに帰国して「教皇派遣宣教師」となった。
② 信徒会を創設し、その一人ひとりのメンバーは活発な宣教者であった。
③ やがて、もっと深く献身した信徒会会員達のグループが現われ、彼らは在俗修道会へと変化するように思われた。
④ 最後に、新しい霊示が与えられた。即ち、修道会を創立するという霊示であった。

このように、シャミナード師の宣教計画が少しずつ展開していくのをみてわかるように、ダイナミックな発展があり、更に統合されたものになっています。以上のことから、シャミナード師がサラゴサで計画したものを復元する試みが可能となってきます。

私たちは、神の霊示を心に留め、サラゴサへ行く時にシャミナード師が携え

ていった種々の背景やサラゴサでの体験全体を、フランスへの帰国後に師が着手し始めたすべてのことと比較する必要があります。もし、師が上記の手紙で語った論理的な糸をたどるなら、私たちは師の宣教計画の概要を復元することができます。

（1） 活動が一か所に限定されない宣教師の姿は、新しい光を身におびることになります。事実、初代教会の使徒たちがそうでした。革命後のフランスの教会の状況とそれが必要としたものは、初代教会のそれと比較できるでしょう。ただ、「初代の信徒たち」だけが欠けていたのです。

（2） 初代の信徒とはどのような人たちだったのでしょうか。 彼らはキリスト教に改宗した人々でした。つまり、彼らは、時には非常に重いリスクを背負うことになる選択をした人々でした。彼らはそれまでの自分の大切な信念や生き方、つまり、自分のすべてを、教会の信仰を持つために捨て去らねばなりませんでした。そして、たぶん迫害と殉教にも直面しなければなりませんでした。これらすべてのことは、彼らの信仰がどれほど深く、強固でものあったかを示しています。彼らは信仰をうけ入れ、勇気と確信をもって自分自身を信仰に賭けました。今の信徒をそのような信仰をもつ人に養成するには、どうしたらいいのでしょうか。

（3） 信徒に大きな信頼をおくことが必要でしょう。また、初代教会の信徒間に一致を築き上げるために大きな助けとなったグループや共同体の意識を再発見する必要があるでしょう。それに加えて、そのグループや共同体は、抵抗できないほど魅力的な力を持つ必要があるでしょうし、それが他の人をキリスト教へと導くことになるでしょう。教会は宣教の団体として考える必要があるでしょう。これらのグループや信徒の共同体は、永続する宣教共同体となるでしょう。つまり、他者を福音化できるように、自分自身が深く福音化されるということです。彼らは洗礼の奉献がもっているダイナミズムを最大限に生きなければならないでしょう。

（4） マリアは、特別な意味で、最初の信徒です。マリアの福音的な心構えは、私たちが自分の中に形づくるべきものです。そして、マリアは救いの歴史の中で使命を持っています。マリアは人々の中にイエス・キリストを根づかせ、キリストにおいて信仰を芽生えさせます。マリアに奉献する人々は、自分がイエス・キリストに似た者になると考えることができますし、マリアの使命の手助けをすると考えることもできます。これらのグループや共

同体は、マリアのものにならなければなりません。

（5） しかしながら、これらの信徒共同体が増加し、非常にダイナミックに活動して、たった一人の宣教師ではすべてのことを指導したり、組織化したり、活力を注いだりすることが出来なくなった時は、どうしたらいいでしょうか。その時には、核となって責任をとる人々、永続する団体が必要となります。

（6） シャミナード師が神の霊示の下で、次のように考えたことは大いにあり得ます。「内的な強い力を備え、新しい形を持った一つの修道会が、何と見事に私がいつも夢みてきたことに当てはまることでしょうか。そして、その修道会は男女二つのグループとなるでしょう。私は今まさにそれを見ることが出来ます！」

（7） 以上が、師の宣教計画が存続していくはずのあり方であり、一般的に言って非常に明確な概要です。最初の直感は非常に洞察力のあるものであったかもしれません。しかし、実際には、詳細な点では非常に漠然としたものでした。特に、ある新しい形の修道生活へと繋がる、奉献した責任者たちのダイナミックな核をつくるためには、どのような方法をとったらよいのでしょうか。歴史がそれを明らかにしていきます。この計画は少しずつ現実のものとなっていきました。即ち、最終的には二つの修道会が創立されることになるのですが、いくつかの試みを経て苦労して誕生し、結果的にはしっかりと根を張り、実り豊かなものとなったのです。

第三章

計画の開始

シャミナード師は、まだサラゴサにいる間に、一つの使命を受けていました。それは、オーシュの教区長であったツール・ド・パン大司教が、1791 年から司教が空位であったバザという一つの従属教区の管理を師に委ねたというものです。フランスに戻るにあたって、シャミナード師には二つの可能性がありました。一つは完全に教会管理の仕事に入ること（そして、多分、時が来れば高位聖職者へ）、そして、もう一つは自身の宣教計画に従事することでした。バザ教区の管理に対するシャミナード師の姿勢は、師の精神がどのようなものであったのか、また、サラゴサで受けた使命の種子が師の中でいかに力強く定着していたのかを深く示しています。

シャミナード師の計画は一連の事業の創設から始まることになりますが、それらはやや奇妙な年代的順序で生じることになります。立ち止まってこれについて考えることは大切です。そうすることによって、この計画の持つ明確な宣教目的とその独創的な内容が見えてくるからです。

最初に創設されたのは「無原罪の聖母青年会」でした。今日では、シャミナード師が「無原罪の聖母青年会」というもので何を心に思い描いていたかを正確に理解することは困難です。

その理由は、第一に、教会が置かれた歴史的状況の中での正確な事態が今日と同じではないこと、第二に、シャミナード師が追放から戻った時に創立し育成した「無原罪の聖母青年会」は、後にマリアニストの学校で何年にもわたって存在した信徒会とは非常に異なっていたことです。シャミナード師が設立したものを理解するためには、学校の信徒会を完全に度外視しなければなりません。私たちは、シャミナード師が「なぜ」、「何のために」若者と成人男女のグループを「無原罪の聖母青年会」に糾合したのかを理解する努力をすべきです。

「無原罪の聖母青年会」の歴史には、また、一つの摂理的な出来事があります。それは、アデル・ド・バッツ・ド・トランケレオンがアジャン近郊に創立した会が「無原罪の聖母青年会」に組み入れられたことです。これはシャミナード師の計画が実現していく過程で大きな影響を持つものでした。

シャミナード師の「無原罪の聖母青年会」から、これまで「在俗会」と呼ばれてきたものが誕生しました。それが在俗修道者と呼ばれたのは、世俗的な条件の中に生活しながら修道者の身分であることを熱望したからです。在俗修道者はなぜ「無原罪の聖母青年会」の中から生まれてきたのでしょうか。この質問に対する答えがシャミナード師の計画を理解する鍵なのです。

バザ教区の管理に対するシャミナード師の姿勢

フランスへ帰る時が来たと思ったシャミナード師は、オーシュのツール・ド・パン大司教に相談し、大司教はシャミナード師の計画を承認した上で直ちにバザ教区の管理を師に委ねた、とシャミナード師の伝記作家は語っています。1791年1月16日にサン・ソヴール司教が亡くなって以来、バザ教区は司教が不在でした。そして、シャミナード師のスペイン追放期間中に、教区総代理であるキュルチュール師も亡くなったために、この教区は事実上指導者が誰もいない教区になっていました。シャミナード師は大司教の要請を受諾することに大きなためらいを覚えたようです。一方、大司教にとっては、これは何か本当に摂理的なことだ、とシャミナード師に納得させる必要がありました。シャミナード師は最終的に同意しましたが、その代りに、聖座から「教皇派遣宣教師」の称号を得たいという要請を大司教が支持してくれるように、と願いました。シャミナード師はフランスで使徒として働くためにこの称号を望んだのです。

以上のことは、シャミナード師が何よりも自分を宣教師と考えていたことを示しています。師は忠実に教区と関わりましたが、バザ教区に腰を落ち着ける必要性は感じませんでした。そうした方がよかったのかもしれませんが、師は同時に他の任務で働き始めるために、むしろボルドーへ戻る方を選びました。

1801年7月15日の政教条約によって、フランスの教区は再構築されました。バザ教区は、一教区としてはなくなり、その大部分の地域はボルドー大司教区に属することになりました。シャミナード師はボルドーの大司教が任命されるまで待ち、ダヴィオ大司教が任命された時、1802年6月19日に手紙を送りました。この手紙からいくつか非常に参考になる文章を抜粋することは、興味深いものがあります。「わずか1年半前のことになりますが、オーシュの大司教様はいわば強引に、私にこの教区の管理を委ねようとなさいました。私は大司教様に対する敬愛の念とその職務に対する同情の気持ちから、またそれ以上に、

神が教会のために働くようにと私に吹き込んでくださった愛によって、大司教様の切なる要請に屈しました。それで、私はすでに、ボルドー市の現状と特に青少年が見捨てられている状態から出てくる様々な仕事を行っていましたが、これらの仕事に加えて、この困難な任務を果たすことになったのです。」

この手紙もシャミナード師の姿勢を示しています。師は高位聖職者への道を歩むつもりはありませんでした。師がこの教区管理の責任を引き受けたのは、個人的な召命としてというよりも、教会への愛とオーシュの大司教との友情のためでした。師は自身がサラゴサで受けた個人的な召命が、ボルドー市の現状、特に若者が見捨てられている状態に応えることだと感じました。当時の聖職者不足とシャミナード師がすでに得ていた信望とを持ってすれば、師が司教になることは全く難しくはなかったと考えざるを得ません。しかし、師は宣教計画を自分に与えられた神の計画だと思っていたので、この使命感は師にとって教区管理の仕事とは非常に異なった意味を持つものでした。ダヴィオ大司教がボルドー大司教管区の責任者になるとすぐ、シャミナード師はバザ教区の管理者からの辞任を申し出ました。師は、サラゴサで心に思い描いていた宣教計画を、ボルドーで実現し始めていたのです。

シャミナード師の事業の創設順序に関する考察

シャミナード師が創設した種々の事業は非常に珍しい順序で始まりました。教会の歴史を通してみると、通常、先ず男子修道会が創立され、それから女子の部の創立、そして最後に信徒グループが男女修道会の周りに集い、「第三会」とか「アフィリエ」として同じ精神を生きるようになります。その場合、三者に共通する本質的な精神は、修道会がその源となっています。つまり、修道会が創立されてはじめてその精神を生き、その精神に養われたいと望む信徒が存在するようになるのです。

シャミナード師が創立したものは、それとは全く反対の順序でなされました。最初に、信徒のグループがそれ自身の明確な精神を持って創立されました。その結果、このマリアニスト信徒グループの必要に応えるものとして、二つの修道会―最初に女子の部、その次に男子の部―が生まれたのです。マリアニストグループが創設された歴史的順序は、これまで述べてきたように、シャミナード師の宣教計画の本質が、社会の福音化であったことを示しています。それは、

フランスの再キリスト教化であり、キリスト信者の倍増であり、また、男女信徒を兄弟愛に満ちた生活と宣教を拡大させるという目的よって、一つに結ばれた共同体へとグループ化することでした。二つの修道会が存在することになった理由は、これら信徒共同体に奉仕することだったのです。

マリアニストの精神を真の意味で説明するためには、この歴史的な起源を常に心に留める必要があります。マリアニストの精神は、まず信徒会、つまり、一般信徒の共同体やシャミナード師の「マリアの信徒会」の中に生まれました。また、汚れなきマリア修道会とマリア会は「在俗会」と呼ばれる「世間にあって修道者の身分を生きる信徒の会」のメンバーから誕生しました。

この本は「マリアの信徒会」の歴史を再現したり、その組織に関して詳細に取り扱ったりするものではありません。ここで関心があるのは、なぜシャミナード師はこれらの人々を「無原罪の聖母青年会」に糾合したのか、彼らはどんな精神を持っていたのか、そして、どのように彼らは進展したのか、ということです。

なぜ、何のために
シャミナード師の「無原罪の聖母青年会」は生まれたか

シャミナード師は1800年11月の初めにフランスに戻りました。その直後に、ボルドー教区の行政責任者であった教区総代理、ヨゼフ・ボアイエ師と会うのは当然でした。シャミナード師はボアイエ師をよく知っており、革命後の新しい世代のキリスト教化に専念するという自身の決意を表明しました。それは微妙な時期でした。宣教に向けての懸命な努力とともに、賢明さを合わせ持つ必要がありました。一般的に、教区や小教区を再建することはまだ不可能でしたが、いくつかの祈りの場は、狭いながらも機能していました。司牧的な規定や聖職位階からの指導に従う司祭がこれら祈りの場に従事できる限りは、それを増やす必要がありました。こうして、家の一室を新しい祈りの場として提供する個人の家が増えてきました。シャミナード神父がしたことはこれだったのです。

シャミナード師はボルドーに戻った当初から、追放以前にそこで役務を通して知っていた人々との関係を回復させましたが、同時に、師は新しい関係も築きました。ララン師の幾分伝説的な物語から離れ、より文献に裏打ちされた歴

史的視点から、「無原罪の聖母青年会」は 1800 年 12 月 8 日に始まったこと、また、最初のメンバーは 12 名だったが、一人亡くなったため、1801 年 2 月 2 日にアルノ・ミクー通り 7 番地の「無原罪の御宿り祈祷所」で最初の「奉献の宣誓」をしたのは 11 名だったことが明らかになっています。これらの日付と最初の奉献の宣誓をした人々の名前は、創立メンバーの一人、ベルナール・ロティが書いた小さな長方形の紙に残されています。

以上述べてきた事実から、いくつかの所見が浮かんできます。まず第一に、「無原罪の聖母青年会」誕生の日付から言って、宣教計画はシャミナード師がフランスに戻る前に既に師の心の中で成熟していたことを示しています。事実、ボルドー到着後たった一ヶ月で、すでに師は断固とした熱意をもって「無原罪の聖母青年会」を始めるために一つのグループを造ったのです。師は何か漠然とした司牧の仕事をしたり、バザ教区の責任者としての仕事の結果生じるかもしれない管理的な活動に没頭したりはしませんでした。師は待つことも執筆に時間を使うこともしませんでした。この時期の仕事や説教に関連した師の手記には修道生活への言及は全くありません。つまり、それらは全てキリスト者の生活か「無原罪の聖母青年会」の活気づけと組織作りに絞られています。シャミナード師の考えは非常に明確で、信徒のメンバーと一緒に「無原罪の聖母青年会」を始めることでした。

第二に、創立メンバーをみると、何か新しいことが始まっていたのが分かります。最初の「無原罪の聖母青年会」のメンバーのうち何人かは、以前に他の信徒会に所属していたことは事実です。以前の信徒会はすべて革命のために数年間抑圧されていたのです。シャミナード師はそれを再興する決意をしたわけではありません。イエズス会の信徒会は、一人ひとりの身分や彼らが属している社会的なグループによって、それぞれ異なったグループに組織されていました。つまり、各信徒会はそれぞれの特性に適応した規則で機能しましたし、それぞれの財源を持ち、それぞれの募集活動を展開しました。もし、私たちがシャミナード師の「無原罪の聖母青年会」の最初のメンバーがどのような人たちなのかを確認してみれば、そこでは非常に多様な身分の人々が一つのグループになっていたことがわかります。商人、教師、司祭、聖職者、兵士だった人、靴屋などがいました。この「無原罪の聖母青年会」は新しいもので、初期のキリスト教の精神を復興させるものでした。初期のキリスト教は全く人を区別せず、その共同体はどんな身分の人にも開かれていました。

シャミナード師の「無原罪の聖母青年会」を特徴づけたものをここでいくつか挙げてみます。

（1） マリア的な性格

最初から、「無原罪の聖母青年会」は無原罪のマリアの保護下にありました。シャミナード師によれば、この称号は恵みに対する忠実さ、救いの業における緊密な協力、そして、悪の力に対する勝利の神秘を思い起こさせるのです。聖書の中で、マリアはイエスの側にいて、救いの業において、つまり、受肉の神秘と十字架において協働しておられます。マリアはキリスト教の誕生の時に、エルサレムの最初のキリスト者共同体の中におられました。マリアの母としての使命は、信仰を伝え、それによって人々がイエス・キリストに似たものと成長するのを助けることです。最初から、「無原罪の聖母青年会」はマリアへの奉献が持つこれらの宣教的な視点を強調しました。シャミナード師自身、1803 年 5 月 26 日に教皇に宛に次のように書いています。

> 数年来、イエス・キリストの教会にとって慰めとなることですが、ボルドー市では、いと聖なる乙女の無原罪の御宿り・青少年の母の名を奉じ、その保護のもとに集まる青年男女の集会が行われ、日一日と著しく増加していくのが見られます。
>
> 堅固な信仰を持つ熟年の司祭や信徒は、この有益な活動を奨励し持続させることに特別に尽力しています。したがって、現在の趨勢からみて期待できることと思われますが、この関心に値する将来のマリアの僕（しもべ）たちは、神の恵みによって、いつか入っていくことになる社会の様々な身分の中で熱烈な宗教心を広めるように召されることでしょう。

シャミナード師のこの手紙から、私たちは次のような考えを強調することができます。

① 「無原罪の聖母青年会」は、無原罪の御宿りの秘義において、いとも聖なる乙女の保護の下に、また、マリアへの祈りのうちに集会を持ったこと。

② 「無原罪の聖母青年会」が創立され、それが相当な数に成長したことは、教会にとって一つの慰めとなったこと。つまり、それは教会に影響を及

ぼし、教会の奉仕の働きにおいて慰めであったということ。

③「無原罪の聖母青年会」は、社会の各層に熱烈な宗教心を広める上で、マリアの僕（しもべ）たちを養成する苗床であったこと。

ここでも、マリアの僕（しもべ）として社会を再キリスト教化するという目的がはっきりと解かります。

（2） 共同体の精神

シャミナード師の手記の中に、おそらく、1806 年に書かれたと思われる一つの文書がありますが、その中で、師は「神の母、マリアの無原罪の御宿り」というタイトルで「無原罪の聖母青年会」の性格と精神を研究しています。この文書は、多くの修正が加えられた未完成の草案で、シャミナード師の独創的な考えを表現しています。それで、そこに現われている考えをここでいくつか取り上げてみる価値があります。

- 「『無原罪の聖母青年会』とは、初代教会の信者を模倣するために、頻繁な集会を持ち、ただ一つの心と魂で結ばれ、ただ一つの同じ家族を形成しようとする熱心な信者の会です。」
- 「『無原罪の聖母青年会』の本質と性格が、愛の絆によって心と精神を一致させたメンバーたちの頻繁な集会の中にあるということを理解するのはたやすいことです。この愛こそ、天と地においてすべての堅固な一致を生み出す原理なのです。」

初代教会の信者をモデルとし、使徒言行録の最初の数章にみられる精神を考えながら、シャミナード師は自分の「無原罪の聖母青年会」に堅固な共同体の霊性を与えました。師はこの文書で、「『無原罪の聖母青年会』は初代教会の集会に似たものとなるよう試みる」と明言しています。小教区は本来、そうあるべきです。しかし、シャミナード師は当時の小教区が革命のもたらした窮状からほとんど再建され始めていないか、たとえ小教区が存在したとしても、真のキリスト教的な内容が何もない単なる行政区分でしかないことに気づいていました。これが、師が「初代教会の信者のグループと同じようなものを形成しなければならない」と思った理由です。

これを実行するために、シャミナード師は「孤立」を克服しなければなりませんでした。シャミナード師は、熱の例を引きながら、互いに支え合うためには絶対に共同体が必要なことを示しました。「先ず最初に、自然の秩序を観察し

てみなさい。体の熱は他の一人か数人の暖かい体と身近に接していなければ保たれません。接していれば、熱は相互に伝わり合い、保たれるのです。孤立した体からは熱は急速に失われますが、それはその体の周りの空気が常に動いているために、絶えず熱が奪われるからです。革命後のフランス社会は何か非常に反道徳的で、寒々とした雰囲気を生み出しています。」仲間から孤立した信者の信仰は、熱心さを奪われるしかありません。事実はそうなので、熱心さを保つために二つの解決法があります。

- 炎である神とだけ交わりを持つために、完全な隠遁者となる。
- 相互の愛で結ばれた熱心な雰囲気によって互いに支えあうために、共同体に参加して他の信者たちと親しく交わる。

以上が「無原罪の聖母青年会」とその共同体の精神が強く必要とされる理由です。シャミナード師は同じ文書の中で次のように繰り返しています。

> 初代教会の信者の一致と「無原罪の聖母青年会」会員の間に存在し得る一致は、全て一致の源であり、一致の絆である「愛」に根ざしています。一致のモデルは三位一体の父と子と聖霊の間にみられる一致です。精神と心の一致は、ある程度まで、別々の体を持つ人々を一つの魂とします。そして、祝福された人々が天国で共にあることから来るその幸せを味わっているように、精神と心の一致は、地上の信者が共に集う時、その同じ幸せを味わえるようにしてくれます。

このような理由で、毎週開かれる「無原罪の聖母青年会」の集会はきわめて重要なものでした。彼らによってなされる祈り、歌（時には彼ら自身の作曲によるもの）、講話、対話を通して、その集会がどのように組織されていたかを私たちはよく知っています。これらの集会によって、「無原罪の聖母青年会」は結束力と一致を獲得しましたが、この集会はまた、メンバーの養成と鼓舞をその明確な目的としていました。

ボルドー市の「無原罪の聖母青年会」の集会は大きな反響を呼び起こしました。この集会は、生活と文化において再びキリスト教信仰の光を放射し始めたのです。同時に、毎日曜日の午後に持たれた集会は、「無原罪の聖母青年会」に入った人はその決定によって、無原罪の聖母青年会に向けた関心とそれに捧げ

る時間で何を要求されるのかをよく理解していたことを示しています。

（３） 宣教的ダイナミズム

シャミナード師以前の信徒会は、選ばれた熱心な信者のグループの中で、熱心さを維持することをその目的としていました。これに対して、シャミナード師の「無原罪の聖母青年会」は、最初から普通の市民の中に広く普及していきました。ここで意義深い事実をいくつか挙げてみましょう。「無原罪の聖母青年会」は 1800 年 12 月 8 日に 12 名の青年で始まりましたが、翌年には、すでに 66 名の「無原罪の聖母青年会」会員と何人かの志願者がいました。1802 年の最初の 2、3 ヶ月には、約 100 名になっていました。更に、1801 年 3 月 25 日には、マリー・テレーズ・ド・ラムルス嬢と 16 歳～24 歳の若い女性からなる部門がスタートしました。この女性部門もまた、１年間で 60 名を数えました。1802 年のクリスマス頃、成人男子のグループが始まりましたが、その最初の会員たちの中には地主、商人、医師、店員、労働者、弁護士がいて、「家庭の父親の会」と呼ばれる新しい部門が仲間となりました。この部門も同じペースで成長しました。残念ながら、後に「黙想の女性の会」と呼ばれた成人女性の部門がいつ始まったか、その正確な日付は現在判っていません。しかし、それが 1803 年までには存在したことは判っています。３年間で、シャミナード師はあらゆる年齢、性別、社会階級の人々を一つのグループにまとめる「マリアの信徒会」を誕生させたのです。間もなく、その会員総数は 500 名になります。

一旦最初のグループが形成されると、シャミナード師はフランスを再キリスト教化するという師のプロジェクトを非常にはっきりと示す新しい宣教法を会員たちに伝えました。それをヨゼフ・ベリエ師は次のように説明しています。

> 1802 年に、シャミナード師は共同体を通して人々をキリスト教化するという方式を「マリアの信徒会」に採用しました。こうして、師の信徒会は、真の信者やリーダーを養成しながら、一般組織のもつ外面的な性格をも備えるようになるのです。それは、普通のキリスト者の生活に共通するもの以外の義務や実践を課すものではありません。これはキリスト者のすべての義務を容易に実行しうる方法として、救われる場所のようにみえるでしょう。「マリアの信徒会」は、敬虔な信仰を持つキリスト者には、誰にでも開か

れるべきものです。さらに、キリスト教に対する青少年の態度が、偏見と無知とに影響されていることを考慮して、この信徒会は、あらゆる手段を駆使して、信仰生活から離れている人々をも惹きつけ、迎え入れようと試みることでした。その宣教活動は改宗という形をとり、魂の宗教的変容は先輩会員との触れ合いによって信徒会員の中ですでに行われていました。

「マリアの信徒会」はエリートのグループでも、ごく少数者のための避難所でもなく、誰にでも開かれたキリスト者の共同体でした。彼らの信仰を伝えようとする力は内から生まれ、彼らは新入会員の倍増によって社会を再キリスト教化しようとしていました。

「マリアの信徒会」の会員となって間もない人々でも、キリスト教信仰を非常に真剣に受けとりました。洗礼の約束の更新は、非常に個人的かつ明確な行為でなければなりませんでした。この更新は、マリアに対する奉献の行為と共に、その信徒会の中で会員の前で行われました。その時から彼らは自分がキリスト教的な生き方をする人になるように、また、洗礼が本来的に要求する使徒的な働きに献身しました。

以上のことから、「マリアの信徒会」の本質的な目的である宣教について、私たちはもっと深く研究するようにと促がされます。それは影響力のある人々からなるエリートのグループを養成し、彼らが社会の中で使徒活動をするように準備するという問題ではなく、それは、キリスト教に基づいた生活をする共同体をつくり上げる試みだったのです。その共同体は強い兄弟愛で結ばれ、そこでは最も弱い者であっても信者の理想を生きることが出来るほどでした。その信徒会の外でキリスト教を宣べ伝えることが第一の目標ではありませんでした。つまり、その目的は、何よりも生活の中で実践されたキリスト教を示し、それを広めるために信徒会内部での交わりを通して他の人々を惹きつけることでした。一言でいえば、それは使徒活動の専門家を養成し、キリスト教化されていない大衆のところに送り込むという問題ではありませんでした。むしろ、それは四散させられていた人々を出来るだけ数多く惹きつけ、「マリアの信徒会」の内部にある温かい愛情に包まれた兄弟的な支えを期待できる雰囲気の中に、人々を連れてくるという試みでした。

結果的に、シャミナード師が試みていたことは、使徒たちの働きの実りであ

る初代教会の共同体と同じようなものを形成するということでした。師は「使徒たちの宣教」が私たちに示している理想的なキリスト者の共同体のことを考えていたのです。あの共同体の中では、ユダヤ教や異教から改宗した男女がお互いにキリスト教化し合い、信仰を理解し内面化させ、福音的な成熟のプロセスを歩み、常に他者が仲間になるよう惹きつけていました。それは内部から福音化し、外部から他者を集め、同時に自分たちもまた福音化される真に永続的な宣教でした。

事実として、このように考えられ実行された「マリアの信徒会」は、すべての活発な小教区の理想でした。ここにシャミナード師の洞察力のもつ大胆さと冒険があります。当時、小教区は使徒活動の面で機能していませんでした。つまり、キリスト教の再生は、小教区への依存によっては不可能だったのです。それはただ初代キリスト者の共同体を再生させることによってのみ可能でした。シャミナード師の共同体が試みていたのは、まさにこのことでした。

シャミナード師の信徒会に関する研究家の一人、ヨゼフ・ベリエ師はこれを次のように説明しています。

> シャミナード師の独創性と勇敢さを理解するためには、そのメンバーを真の堅固な信者からなるグループとか信徒使徒職のスペシャリストにするために注意深く選別するような従来の信徒会のことを忘れる必要があります。そのような信徒会は小教区の役務の補助的な働き以外の何物でもありません。シャミナード師の「マリアの信徒会」は、小教区とは何か異なったものであり、滅びから救われることだけを捜し求めている人や他者の救いのために働きたいと思っている人と同じように、あらゆる年代、身分の人々、男女、新受洗者、悔い改めた者、高潔な人、伝道者に開かれていました。

シャミナード師は、キリスト者の共同体を通しての救いという使徒的手段に関して、確信を持っていました。それは、「キリスト教的生活を生きる共同体を造り、それに内的な一致を与え、それを熱心に活気づけることによって、そこに参加した人がすべて進歩するようになる。また、その共同体に強い拡張力を与えることによって、出来るだけ多くの会員を増加させることが出来る。つまり、『マリアの信徒会を通してのキリスト教の再建』」という確信でした。

（4） 信仰養成の共同体

以上述べてきたような「マリアの信徒会」についての考え方がもたらした結果は明白でした。その信徒会は、すべてのメンバーの信仰を大いに養成する共同体でなければなりませんでした。このために、信徒会は最初から明確な養成過程を計画する必要がありました。

すでに信者である人は「マリアの信徒会」に入るために体験入会をすることができました。1802 年に、キリスト者としての教育を全く受けたことがないか、それが不足している若者を加入させるために用いられる手続きが作られました。彼らは「アスピラント」と呼ばれるグループを形成しましたが、それは一人の指導者の責任下で洗礼志願期のような時期を過ごす志願者たちでした。この指導者は深い信仰を持ち、霊的にも優れた会員でしたが、同時に、一人ひとりをよく受け入れる愉快な仲間でもありました。この若者たちは 16 歳以上という年齢にもかかわらず、何人かは初聖体の準備をしなければならないという状態でした。この準備期間の終わりに、彼らが望めば、「マリアの信徒会」に入るための体験入会をすることが出来ました。

「マリアの信徒会」の入会の条件であった 16 歳以下の若者のグループが幾つかあって、「ポストラン」または「入会希望者」と呼ばれ、それぞれ一人の「マリアの信徒会」会員の責任下にありました。これらのグループは一人の志願期の責任者によって統合されていました。

短期間のうちに、シャミナード師は「マリアの信徒会」を創設しただけでなく、人を育てる優れた力をその会に与えました。師の考えは明らかでした。それは、「マリアの信徒会」会員を倍増させることによってキリスト者を倍増させるということです。

シャミナード師はその信徒会員が常に自分自身の養成に心を配るようにといつも要請していました。一つはっきりと指摘できる事は、師が読書の必要性を強調したことです。「マリアの僕（しもべ）の手引き」は読書に関する部分を含んでいますし、彼らのための読書室と図書館があったことはなお一層の証拠となります。「マリアの信徒会」の成功によって、シャミナード師には高位聖職者や大司教の評議委員会のメンバーになるなどの、新しい可能性が開かれました。しかし、シャミナード師は非常にはっきりとした使命を持っており、師には「教皇派遣宣教師」という称号で充分でした。その称号をもって、師はフランス全土に「マリアの信徒会」を普及させ、それを指導するために全力で献身することができ

たのです。

（５） 使徒的実り豊かな共同体

この項目では、「マリアの信徒会」の本質的な目標であったその宣教の拡大には言及しません。むしろその信徒会会員の指導力や創造性を通して着手された使徒的な活動と奉仕全般について、また、いくつかはすでに存在していましたが、彼らが生み出し、鼓舞した一連の団体や仕事について述べることにします。これらすべては、彼らが「マリアへの奉献」によって表明されるキリスト者の誓約を生きたその真剣さを示しています。

以上の点をもっとよく理解するために、具体例になる幾つかの活動をみることにしましょう。何よりも先ず、「マリアの信徒会」中に様々な機能や責務がありました。志願者を養成する仕事、欠席した会員を文通によって活気づけること、週ごとの集会の準備と計画などです。会員によって進められた補助の仕事の中には、刑務所での働き（物質的な援助、また、囚人たちに対する道徳的、霊的支援）、毎週の貧者訪問、そして「煙突掃除人」（生計を立てるために煙突掃除をし、普通はサヴォワかオヴェルニュという山岳地域から来ていた一般的に貧しい子供たち）としてよく知られた子供たちへの働きなどがありました。「マリアの信徒会」の会員によって活気づけられた様々な団体（しかし、それらの団体は彼らが始めたものではなかった）の中には、「キリスト者友の会」、「知恵の友の会」、「良書運動」、また、シャミナード師の信徒会に加入した 30 以上にものぼるそれぞれの会の仕事がありました。その他、多くの信徒会員が方々の教育中枢で専門的に働いていたことを忘れてはなりません。

「マリアの信徒会」が行なっていた実り豊かな使徒活動を示すためには、以上述べた短い概要で充分です。これらの活動や働きについてもっと知りたい読者は、ここに引用されている信徒会に関する研究を参考にすることができます。私たちはここまで、なぜ信徒会は誕生したのか、どのような性質がその精神を明確にしたのか、を紹介してきました。

シャミナード師とアデル・ド・トランケレオン
― その摂理的な出会い ―

シャミナード師とアデル･ド･トランケレオン（将来の汚れなきマリア修道会

の創立者）との出会いは摂理的でした。1808 年の夏に、アデルの母親（トランケレオン男爵夫人）とシャミナード師の信徒会の一人であるジャン・バプチスト・ラフォンは、フィジャックのホスピスで院長を訪問している時に偶然に出会いました。当時アデルは 「アソシアシオン」という小さな祈りの会の中心人物で、その創立のために活発に働いてきた人でした。その院長との会話の中で、ラフォン氏はアデルのことを聞きました。すぐに彼はアデルにシャミナード師の信徒会と連絡をとるようにと勧めました。こうして、シャミナード師とアデルは文通によってお互いに知り合うようになり、活発な教会生活の促進のために、とても慎重に、そして、非常に効果的に協働することになります。ボルドーのシャミナード師とトランケレオン城のアデルは、手紙を通して、地理的には離れていても精神的には一致して、自分たちの希望と豊かな計画を分かち合うことになります。

この文通の最初のねらいは、アデルのアソシアシオンを「マリアの信徒会」に加入させることでした。当時、アデルのアソシアシオンには一人の司祭を含めて 70 名のメンバーがおり、様々な場所に散らばっていました。

アソシアシオンの全体的な目的は「神のより大いなる栄光」でした。アデルは親友アガタ・ディシェへの 1807 年 6 月 24 日付の手紙でこれについて書いています。「『神のより大いなる栄光のために』ということを私たちの仲間の心に印象づけるよう試みましょう。そのことはアソシアシオンの全体的な目標でなければなりません。『神のより大いなる栄光』ということは偉大な聖人の熱望でした。それで、親愛なる友よ、私は、私たち皆が同じ心と精神で結ばれ、私たちの良き師であるイエス様の栄光のために働くのを見たいのです。」

上に述べられたアソシアシオンの目標は、祈り、愛、立派な働きで人生を満たすことによって良き死を準備することでした。この目標に向かって、彼らは祈り合い、個人的にまたは手紙を通して、互いに熱心に勧め合いました。彼らはいくつかの非常に単純なことを共通のものとして実践しました。例えば、毎日午後 3 時に、カルワリオでのイエスの死を崇敬し、暫くの間祈るために（ただし、日常の任務を止めないで)、精神的に一致することなどでした。

アソシアシオンの規則は次のように述べています。「各会員は、いとも聖なる乙女の特別な保護の下に自分を委ねなければなりません。」マリア的なインスピレーションは、創立者達の望みとして最初から現われていました。

アデルはまた自分のアソシアシオンにひた向きな宣教精神を吹き込み、それ

を広め、ダイナミックなものにするために献身してきました。

アデルのアソシアシオンに関する以上の簡略な描写から、「マリアの信徒会」に完全に加入するためには、アソシアシオンはいくつかの点を変える必要があったことに気づきます。当時、その信徒会の青年女子部門は、志願者と外郭団体のメンバーを除いて、250 人の会員を擁していましたが、女子部門はマリー・テレーズ・ド・ラムルスの責任の下で二つの部門に組織されていました。それで、シャミナード師はボルドーの二部門を心に留めながら、アデルのアソシアシオンを第三部門と呼び始めました。けれども、フィジャックでの出会いから完全な加入までに４年が経ちました。統合するまでには細かい問題を解決することが必要でしたし、予期しなかった歴史的出来事が幾つか起こったために加入が遅れたのです。

加入を準備し待っている間に、シャミナード師は「マリアの信徒会」で使用されていた「マリアの僕（しもべ）の手引き」という本を彼らに送りました。この本や文通を通して、師はアデルとその仲間たちを新しい考え方で高めたかったし、彼らが会員になる準備を助けたかったのです。アデルはマリアの母性の精神を非常に深く生き始め、また、真のマリア二スト家族の持つ共同体の精神で使徒的な特性を新しい光の中で理解しました。1813 年 2 月 16 日付けの手紙で次のように書いています。「いとも純潔なマリアの家族を広めましょう。私たちの聖なる師イエス様の栄光のために、出来るだけ多くの若い心をマリアの保護の下に集めましょう。」

アソシアシオンの会員たちは「マリアの信徒会」の会員へと内的に変容するために、この霊的な旅をすることになるでしょう。彼らは自分たちの明白な一つの目標として使徒活動を引き受け、また、マリアへの奉献を「マリアの使命に参加するためのマリアとの契約である」と考えることになるでしょう。待ち望んでいた「マリアの信徒会」への加入の日が来た時、アデルはそのことを 1813 年 6 月 25 日付の回章で表明しました。

> 私の親愛なる姉妹であり友人である皆様、主は私たち愛する仲間に新しい祝福を注がれました。私たちの尊敬すべきシャミナ―ド師は、私たちの尊敬する補佐であるローモン神父に、志願者を受け入れる権限を与えて下さいました。ローモン師は、神の栄光と比類のない私たちの母マリアへの献身のために精力的に働いておられますが、

あなた方が皆この新しい恵みの源泉を共にすることを望んでおられます。今週、ローモン師とあなた方の尊敬する女性の指導者の一人がアジャンへ行くことになっています。そこで、彼は「マリアの子」という聖なる、甘美な、愛すべき名前をあなた方に与えることになるでしょう。あなた方は非常に特別な方法で威厳に満ちた母マリアの旗の下に登録されようとしています。あなた方がマリアと契約しようとしている栄誉ある約束のために出来るだけ熱心に準備してください。

アデルとその仲間たちの加入はシャミナード師の「マリアの信徒会」に新しい活力を流入させました。この活力の再生によってある実りが生み出されることになりますが、次の第四章でみるように、この実りによってシャミナード師のメッセージは豊かなものとされるのです。

マリアニスト「在俗会」の誕生

私たちは、シャミナード師が修道者になることを望みながら、自分を惹きつける修道会を見つけることが出来なかった、ということを決して忘れてはなりません。師は常に修道生活に大きな関心を示しましたし、師がミュシダンにいた間に、修道会を創立するという考えを持ったということは有り得ることです。このような理由で、フランスに戻るにあたって、多分、師は新しい形式で修道生活を生きる「マリアの信徒会」の指導者グループのことを既に見越していました。事実、師は後に 1814 年 10 月 8 日付の手紙でこのことに言及しています。「『マリアの信徒会』の各分団の幾人かの会員は、まだ世間に住んでいますが、一つの小さな修道団体を形成することになるでしょう。これら各分団の中には、『マリアの信徒会』の運営に携わる男女の役職者が常に見られることでしょう。」

シャミナード師の直観は、従って、世間の中で生活する修道会でした。それは、「マリアの信徒会」に対して責任を持つ会員によって構成されるものでした。実行はされませんでしたが、他に「12 人組」を創めるという計画に言及した師の言葉があります。この「12 人組」というのは、若者たちの間にあって「いわば、パン種となって、道徳と宗教の原理を絶やさないようにする」グループのことです。

世にあって修道者であると称することを望む、より献身した信徒会会員は、どのようにして生まれたのでしょうか。これは現在も明確にはなっていません。会員の数とシャミナード師と密接な関係にある信徒会の数は、シャミナード師一人の人間の能力を完全にしのぐまでに成長しました。数人の司祭や成人の会員に助けられたとはいえ、シャミナード師の協力者はまだ充分ではありませんでした。そこで起こったものが「在俗会」と呼ばれてきました。シャミナード師はいろいろと異なった表現でそれについて言及しましたが、例えば、「世間に生活するキリスト者が進んで選び取った修道者の身分」というのはその一例です。

マリア会総本部公文書館には、「在俗会」に関連したシャミナード師の手書き書類の収蔵品があります。そこには、師が抱いていた考えがはっきりと出ています。即ち、信徒会に責任を持ち、それを維持し、広めるために働く在俗会員のグループを養成するという考えです。然しながら、これらの書類はあちこちで削除され訂正された未完成の草稿の形で現在まで残されてきました。不可能ではないとしても、これらの書類の日付を確定して年代順に並べることは非常に困難です。その中には一度も実行されなかったものもありました。また、実行されたものの中にはまだ矛盾がみられるものもありました。これらすべてのことから、在俗会が誕生しつつあったことがわかります。シャミナード師は、最終的な在俗会のかたちにする前に、書類上また実践上、いくつかの試みをしたのです。

再度ここで、私たちは次のことを確認できます。つまり、フランスへの帰国にあたって、シャミナード師の司牧計画の中にすでに「マリアの信徒会」の創設が予知されていたこと、また、いつの日か新しい様式の修道生活により深く奉献し献身するダイナミックなグループを創立することが必要になると推測されていましたが、これをどのように実行に移すかは厳密には計画されていなかったことです。

いずれにせよ、これらシャミナード師の書類に常にみられる要素は、「在俗会」の存在理由はただ一つ、「マリアの信徒会」に奉仕すること、これだけです。しかし、福音的な勧告を世間にあって信徒として生きるというその生き方を探求する過程で、はっきりとした進展がありました。幾つかの書類の中で、シャミナード師は「在俗会」には誓願はないと明白に断言しています。

「マリアの信徒会」の中に形成される修道身分は、マリアへの奉献を完全な方法で精一杯生きるという以外に何もありません。・・・いとも聖なる乙女に対する信心は彼らを福音的勧告の実践へと導くでしょう。・・・しかし、誓願それ自体はありません。洗礼の約束（堅信の秘跡によって確認され、最終的に確定されることになる）を更新することは、いつも隠されているとはいえ、内容としては荘厳で本物の宣言（誓願の宣立）をすると言えるでしょう。

他の書類には、「救いや『マリアの信徒会』に関しては何事においても『マリアの信徒会』の指導者に従うという年毎の誓約」の考えがありますが、これには「『マリアの信徒会』に対する不変の忠誓の誓約」が伴っています。単なる修徳的な実践として、従順、貞潔、清貧、償いの苦行、熱誠など種々の誓約がなされた可能性、また、大罪を犯さないこと、祈りや善い働きに励むこと、などがあります。

最後に、幾つかの書類では、誓願の宣立という考えが非常にはっきりと目だっています。「在俗会では、貞潔、従順、及び若者の救いへの献身という三つの終生誓願を宣立することになるでしょう。・・・疑念の原因となるかもしれないので、清貧の誓願そのものは宣立しないでしょうが、各人はその誓願の精神を持つべきです。」

これらの簡単な例証から、在俗会は進展中の過程の中で着想され、生じてきたことが解かります。在俗会のメンバーは「自分たちが世にあって遂行する誓願宣立に伴う義務に忠実に従い」、そして、最初は「自分たちの中に『マリアの信徒会』よりも強く純粋な絆を持たなかった」のです。その書類にはまた、非常に特別な意味を持つ修徳的な実践や非常に詳細な個人的時間割さえも含むキリスト教的生活の規則が書かれています。少しずつ、メンバーは週毎の集会を持ち、一緒に祈るように要請されました。メンバー間の一致は、指導者への従順に次いで基本的なものとして強調されました。このようなプロセスの結果として、在俗会の何人かの会員は一緒に住むことを決定しましたが、この決定は自然発生的なもので、事前に何か計画があったからではありません。

結　論

シャミナード師はその歩みの中で、新しいキリスト者を養成することが必要だと感じていました。師は教区や小教区を単に行政的に再建することには関心がありませんでした。社会を外面上キリスト教的なものに再編成することは、キリスト教を再生するための相応しい方法ではなかったのです。このことは、バザ教区の管理を任された時の師の態度や、教皇派遣宣教師の称号を要望したことを非常によく説明するものです。師はこの称号に非常に大きな価値を置いていました。それは、キリスト者の養成にあたって、司教区の範囲にとらわれることなく使徒として働くことが出来る自由を保証してくれたからです。

このようなわけで、師は自分の計画を始めましたが、それは、初代教会のキリスト者のような人格的なキリスト教への回心を人々にもたらすこと､そして、マリアに奉献した信徒の会という新しい方法で、初代教会の集会を復活させることでした。これが師の計画の本質でした｡「マリアの信徒会」の数が増えるにつれて、新しい要素がこの計画に現われてきました。それは、世間に生活しながら修道生活の様式により近い生活をする「在俗会」が誕生したことです。この「在俗会」はいくつかの試みを経て誕生し、まだはっきりとした将来像もなく進展していました｡「マリアの信徒会」が創られたことによって、人々の内面的な回心と共同体の活気づけによる再キリスト教化という福音宣教の活動が始まりました。シャミナード師は、この計画が発展すると何が必要になるか、ということに関して直観を持っていました。しかし、師は深いキリスト者としての態度を持って、霊の息吹きとみ摂理の手を待ちました。その結果、自分の計画を統合するために見出さなければならないであろう新しい要素の詳細かつ具体的な事柄に関して、計画を立てることができるのです。これが次の第四章の主題です。

第四章

宣教計画の強化

「マリアの信徒会」の力強い発展にともない、次に、より献身したその会員からなる小さなグループが誕生しました。この新しく誕生したグループのメンバーは、シャミナード師と共に「マリアの信徒会」に責任を持つ者になる、というのがその考え方でした。彼らは「時代と場所を越えて『マリアの信徒会』を存続させる」ことになります。

時として、このより献身したグループ―在俗会ーはマリア会へと向かう暫定的なもの、移行期のものといった言い方がなされてきました。しかし、より厳密な歴史的見地からすると、このような観点は全部正しいとはいえません。ある出来事に対して意味のある見方をするためには、起こった出来事に対して歴史的な考察を加える必要があります。それで、汚れなきマリア修道会とマリア会の創立という現象を理解するために、まず、前提となるものを指摘することが必要です。

他方で、もし私たちが起こった出来事を時間的な順序に従って忠実に辿ろうとし、二つの修道会がなぜ、また何のために存在するようになったのかを理解するためには、まず、汚れなきマリア修道会の創立に注目することが必要でしょう。そのようにして初めて、マリア会の創立という歴史上の時機にマリア会の基本的な原則が何であったのかを理解できるのです。

以上述べてきたことから幾つかの結論を引き出すことが出来ます。そこから種々の要素を最終的に解明していくなかで、シャミナード師の司牧計画をよりはっきりと理解することができるでしょう。

この章のより深い理解のために

アデルとシャミナード師は互いに遠く離れて住んでいたので、頻繁に文通しなければなりませんでした。残念なことに、この時期にさかのぼるシャミナード師宛てのアデルの手紙はほとんど残っていませんが、彼女宛のシャミナード師の手紙と、アデルが自分の友人や修道会創立グループの仲間に宛てた手紙は

残っています。これらの手紙を読むと、私たちは修道会創立計画の過程で起こった変化を示唆する多くのしるしに気づきます。

汚れなきマリア修道会の創立に関するこの書簡による資料は、マリア会創立に関する資料よりも豊富に残されています。マリア会については資料が乏しいために、創立に関しては何人かの証人の話や後になって書かれたものに頼るしかありません。

汚れなきマリア修道会の創立において、神に導かれていた二つの計画が一つになりました。一つは、アデルがシャミナード師と出会う前から進めていた「大切な計画」と、他方は、シャミナード師によって活気づけられ、ボルドーで発展していた計画でした。それは新しい修道生活の生き方を模索していた計画でした。最終的に誕生した修道会は二人の考え方が融合した成果でした。それは、アデルの霊性がもたらした貢献によって調整され、具体化されたものです。汚れなきマリア修道会の創立に関する研究は、この相互の影響についてあまり考慮していません。しかし、この二人を共同創立者と呼ぶのは正当なことです。この二人の明白で尊敬すべき協力における聖霊の息吹きを理解するために、すべての先入観を脇へ置かなければなりません。この聖霊が教会に新しい修道会を誕生させる方向へと、種々の出来事を導かれたのです。

汚れなきマリア修道会の創立は、マリア会の創立において深い意味を持ちました。このことはシャミナード師自身によって暗黙裡に確証されています。男子マリアニスト修道者は、始めは、汚れなきマリア修道会の生活の規則に従って生活しました。例えば、シャミナード師はこれについて 1832 年 7 月 31 日付の手紙で次のように言及しています。「私はマリア会を構成する主題を準備しました。中核となるものを充分に持っていると考えた時、ボルドーの大司教に知らせました。私は大司教に汚れなきマリア修道会の会憲の抜粋を提出しましたが、その抜粋はマリア会に、特にその組織と道徳的・修道者的義務に適用されていました。私たちは、マリア会の組織や義務は汚れなきマリア修道会の会憲に充分に規定されていると思います。」

最後に、普通は見落とされますが、否定できない重要な歴史上の事実があります。それは、シャミナード師は一度もマリア会における修道誓願を宣立しなかったという事実です。師はマリア会の創立者であり、最初の総長であることは間違いありません。にもかかわらず、師は、厳密な意味でも教会法的にも、決してマリア会の会員ではありませんでした。この事実は、師が聖シャルル会

で宣立した私的終生誓願、師自身の言葉によれば、修道誓願と同じ本質と内容を備えている私的終生誓願への忠実ということから、ある程度、説明することができます。他方で、幾人かの伝記作家は、サラゴサで受けた計画はマリア会の創立を含むが、それ以上のものであったと言っています。即ち、シャミナード師は自分の他の働きを置き去りにして、マリア会だけに自分自身を結びつけたくなかったのです。

このような理由から、シャミナード師の司牧計画はマリア会の創立だけではなかったという結論に達します。もしマリア会の創立が最終的な目標であったとすれば、師は自分をマリア会と一体化させ、他のすべてのものを考慮しなかったでしょう。しかし、事実はそうではありませんでした。マリア会と汚れなきマリア修道会は、単により大きな枠組みの中の構成要素の一部分だったのです。

なぜ、何のために汚れなきマリア修道会は創立されたか

汚れなきマリア修道会創立に関するかなり完全な物語がマリアニスト・インターナショナル・レビュー誌に発表されました。まず最初に注目すべきことは、アデルはシャミナード師と出会う前に、すでにある計画を持っていたということです。これは師がボルドーで活気づけていた計画と全く同じものというわけではありませんでした。第二は、最終的に誕生した修道会は、この二つの計画が見事に結合したものであったということです。

（1） アデルの「大切な計画」

この「大切な計画」のルーツはアデルの幼少時に遡ります。その頃、彼女はカルメル会に入りたいと望んでいましたし、修道生活において自分を神に奉献するという召命を感じていました。この望みは彼女の幼年期、青年期の霊的生活に深い影響を与えました。予想できない歴史的事件や家族の出来事―例えば、苦しみをもたらした父親の病気―のために、彼女は青春時代にこの望みを叶えることができませんでした。他方、継続した霊的、使徒的生活の強化によって、彼女は徐々に神によって計画された異なる召命へと導かれて行きました。

貴族の家柄にもかかわらず、アデルは自分の館を取り巻く田園地方の環境を体験していました。彼女は貧しさの中にある人々―物質的な欠乏と、特に、教

育の欠如と宗教的な実践の放棄という貧しさを抱えている人々―についてよく知っていました。彼女は愛に駆られてこれら必要に迫られている人々を活発に援助しましたが、時として、その方法は独創的、創造的なものでした。一言でいえば、彼女は田園地方のすべての貧しい人々の中で神様と―それも、その人々の中で招いている神様と―出会いました。このように、修道者として自分を奉献することを望んでいたアデルは、祈りと潜心がその時までに彼女が知っていた地方の農業的環境の中で行う活動と結びつけられることを望みました。

この内面的な成長に加えて、彼女は他の若い女性たちとの喜びにあふれた、深い友情を育んできました。その友情は、1805 年 2 月 2 日付の手紙で彼女自身がアガタ・ディシェに書いているように、常に神に基づいたものでした。

> アガタさん、あなたにお会いできたらどんなに嬉しいでしょう！そうすれば、神様のうちに抱いているあなたへの親しい気持ちをお見せできますのに！それまではお互いに、神様のうちでお会いしましょう。神様だけがキリスト者の友情の原理であり、不変の絆です。ですから、もし私たちが神様において愛し合い、神様のために愛し合い、神様の故に愛し合うなら、その友情は永遠です。このような基礎を持たない友情は、普通は長続きしません。友情においては、本当に些細なものが愛を冷ましてしまう原因となり得ます。しかし、もし愛が神様に根を下ろしていれば、たとえ何があったとしても、愛する理由がなくなることは決してありません。以上述べてきたことが、私たちの死まで続く友情を新しく開始する動機となること、これが私の希望であり、願いです。

アデルはこのような友情を、まず自分の「祈りの会」の中で、後にはシャミナード師の「マリアの信徒会」の中で生きてきました。アデルはその気さくで活気にあふれた気質で多くの寛大な若い女性と接触し、自分の修道生活への望みを何人かの友人に打ち明けるようになりました。これが、アデルが常に「大切な計画」と呼んだものです。つまり、それは修道誓願と共同生活を伴う修道共同体に共に集い、彼女が定住しようとする田園地方の環境にある肉体的、精神的悲惨さの救済に献身するという計画でした。

この計画は、シャミナード師から何の影響も受けずにアデルの中で開花し、

成熟し始めました。それは彼女独自の計画でした。歴史的な状況や他の困難さのために、この計画の最終的な実現は、それについてもっと真剣に考える時が来るまで阻まれました。神の摂理がアデルとシャミナード師を出会わせたのは正にこのような時だったのです。

（2） 信徒会の精神に生きる修道者

シャミナード師もまた修道生活を心に思い描いていましたが、多分、師はその修道生活が自分の宣教計画とどのように調和するのか、また、新しい修道生活を組織することにまだ敵対的であった当時の歴史的な状況とどう適応させるのか、まだわかっていませんでした。第三章で見たように、「マリアの信徒会」の中には、日々の生活において修道者的な奉献を生きている人々や、その信徒会への奉仕により深く自分を捧げてきた人々が数名いました。シャミナード師の影響をうけて、ボルドーでも修道会への胎動があったのです。

アデルは自分の計画を実行に移すために、二人の司祭に助けを求めました。その一人の司祭の助言に従って、彼女は最終的にシャミナード師に頼りました。彼女はすでにシャミナード師に大きな信頼を寄せていましたし、その会員の一人でもあり、かなり長い間、師を聖なる人と考えてきました。残念ながら、アデルがシャミナード師を信頼して自分の計画について打ち明けた手紙は残っていません。しかし、1814 年 8 月 30 日付のシャミナード師の手紙が残っており、その中で師は次のように書いています。

> あなたはあなた方の集まりを修道共同体にすることを望んでいますが、それについて若干のことを内密にお知らせしたいと思います。昨年、あなたにお会いしたいという望みを強く表した時に、特に意図していたことは、一つの計画についてお知らせすることでした。それはあなたが望んでいるものと全く同じとはいえませんが、それでも非常によく似ています。ここボルドーで、私たちは数年来それを実行に移しはじめています。数人の若い女性は修道女として生活し、誓願を立て、通常の衣服の下に修道服を着るなどしています。ラコンブ嬢はこれらの修道女の一人です。現在までのところ、私は全員にただ三か月間の誓願しか許可していません。また終生誓願に関しては、これを許可できないと感じました。その理由については、

いつかお知らせする機会があるでしょう。「マリアの信徒会」の指導にあたっている大部分の女性はこの修道団体に属しています。「マリアの信徒会」の若い女性たちはそのようなものがあるとは知りません。あなたが望んでいるような修道共同体になると、ボルドーの私たちの団体がめざしている目的を果たさないのではないかと私には思えるのです。この重要な件については今後繰り返し話し合うようにしましょう。神の計画だけを行うために、当面は、聖霊の光を願い続けることにしましょう。

シャミナード師によれば、二つの計画は似ているとはいえ、全く同じものではありませんでした。両方とも修道生活の創立と隣人への奉仕に向かっていましたが、この手紙によれば、大きな違いがあります。第一に、シャミナード師は、会員たちは修道者として生活し、誓願を立てるが、他の人々には知られないような形で普通の社会に留まる、そのような修道団体について考えていましたが、アデルは通常の修道共同体、つまり、共通の生活と公的な認知を伴う修道生活のことを考えています。第二に、シャミナード師は「マリアの信徒会」の立場から修道団体について考えていました。この修道団体の目的は、「マリアの信徒会」の活気づけと指導であり、この「マリアの信徒会」を通してキリスト者の倍増をめざすということになります。このような理由で、師は、アデルが考えている修道共同体は自分の考えている修道団体の目的を果たさないのではないかと感じたのです。この点は、汚れなきマリア修道会創立の全過程を理解するうえで鍵となるものです。一方これまで見てきたように、アデルは特に田舎の貧しい人々の物質的、精神的、霊的な必要性を満たすために奉仕することを考えていました。

この二つの計画の違いを理解したので、シャミナード師が勧める心構えについて考えるのもいいことだと思います。それはこの問題について繰り返し熟考すること、そして、神のみ旨を行うために聖霊の光を求めることです。シャミナード師は次のモットー繰り返します。「『マリアの信徒会』の働きに全く献身しながらも、み摂理が指し示すことにいつも注意深い人でありなさい。」

この頃書かれたアデルの手紙は失われているとはいえ、私たちは彼女の応答にあったと思われる幾つかの考えかたを捉えることができます。というのは、第二章ですでに引用した 1814 年 10 月 8 日付の手紙では、シャミナード師の考

え方が変化しているからです。どう変わったのでしょうか？

修道者の通常の共同体という考え方に関して、明らかに師は自分の立場を変えています。この年の 8 月 30 日の手紙では、修道共同体は「私たちの団体と同じ目的を果たすことはできないだろう」と述べていますが、10 月 8 日付の手紙では、「何人かは通常の修道共同体で生活することを望んでいる」と書いています。「進んでこのインスピレーションについてもっと詳しく考えてみる」とも述べているからです。アデルが「このインスピレーション」というものの一つの形やあるいは他のものをもっと明確に師に示したかもしれないと考えられます。

シャミナード師は自分の考えを簡単には変えない人でした。一年ほど後の 1815 年 9 月 7 日付の手紙で、師はまだ「普通の社会で生活する修道者」という考え方について思い巡らしているように見えるのです。アデルが汚れなきマリア修道会の会則を起草する上で助けになるかもしれないテキストについて語っている中で、次のように書いています。「革命の時期に、ある優秀な人物が、世間で生活する者も含めて男女修道者を育成することに専心しました。そしてそれらの会の諸原則をラテン語で出版させましたが、その規則はまだ手書きのままです。私は出版されたものの写しを一部手に入れました。じっくり読んでみるつもりです。それから、皆さんの会則に関して自分が書いたものを読み直してみます。多分、自分の書いたものを良識ある二、三の方に見てもらうことになるでしょう。」

ジャン・バプチスト・ララン師が「ボルドーの『マリアの信徒会』から生まれたマリア会に関する歴史的な記述」という文書の中で、シャミナード師の態度の変化について遠回しにではありますが、どのように言及しているかをみるのは興味深いことです。「最初にシャミナード師は、これらのキリスト者―普通の社会に生活しながら修道生活をすることを探している人々―に初代教会のキリスト者のようなすべてを共有する生活をさせるという考えを抱きました。しかし、師はこのような様式の修道生活は実践的ではないと理解するようになりました。それで、世間的な生活様式を持つ修道生活という考えを完全に諦めることなく、師はひとつの共同体によってそれを実行することを決断しました。」

ララン師は、この考え方の変化の過程にアデルが影響を与えたかもしれないとは何も言っていませんが、この文章にはシャミナード師がその考えを変えたという他の証拠が示されています。

もしシャミナード師が通常の修道共同体についての自分の考えを実際に変え

たとしても、依然として「マリアの信徒会」に奉仕するという目的を、師は強く主張しました。さらに、このことは、活動的な信徒会会員のままで修道者になりたいと思っている信徒会会員の問題でもありました。信徒会会員から修道者になることは、信徒会の働きを弱めるのではなく、むしろ信徒会に奉仕することになる、ということに注目するのも重要です。

（3） 宣教する修道者

前に述べた 1814 年 10 月 8 日付の手紙の結びで、神の計画とアデルの個人的な召命にいつも敬意を払っていたシャミナード師は、自身にとってとても重要なことをアデルへ尋ねています。「修道女になりたいというあなたの望みには、小さな宣教師の意図と思いが含まれているのかどうか、すぐ書き送ってください。あなたの心を全部、いつも率直に打ち明けてください。」師は、神が「マリアの信徒会」を通して、アデルとそのグループを本質的に宣教的かつ福音的な目的に招いておられるのかどうかを知りたかったのです。アデルの返事がどのようなものであったかは正確にはわかりませんが、私たちはアデルがその親友アガタ･ディシェに宛てた 1814 年 10 月 13 日付の手紙を通して、このシャミナード師の考えに対して非常に感激した様子を知ることができます。「私がシャミナード師からいただいた素晴らしい手紙をローモン師があなたに見せてくださっただろうと推察します。その手紙の中で、師は私たちの会の目的を示して下さっています。私たちはそれぞれ自分の身分に応じて小さな宣教師となるよう予定されています。正直にいいますが、この言葉は私をわくわくさせます。だから私たちは、あらゆる手段をもって神の栄光と隣人の救いを求めるべく神に召されているのだと考えようではありませんか。」

シャミナード師がめざした共同体はその姿を現しつつありました。彼女たちは修道生活を生きる信徒会員として、正規の修道共同体の生活を送りますが、本物の宣教師でもあります。一連の予想できない状況によって、このように考えられた修道会の創立は手間取りました。この時期の両創立者の態度ははっきりしていました。忍耐と勇気です。このようなすばらしい恵みに応えるためには、神に対する以前にも増した忠実さをもって、よく準備し成熟してから事を運ばなければなりませんでした。

1815 年の夏の終りにかけて、それは一つにまとまり始めました。修道会の創立はボルドーではなくアジャンになることが既定の事実でした。というのは、

シャミナード師からより多くの助けが得られるので、ボルドーの方が都合が良かったのですが、アジャンのジャン・ジャクピー司教が新しく誕生する修道女達が自分の教区に留まることを望んで、これに反対したからです。また、アジャンに新しい修道院のための土地を借りることが決定されました。シャミナード師は 1815 年 9 月 11 日付の手紙で、次のように書いています。「皆で毎日、聖なる乙女への奉献の行為を新たにしてください。事実、皆さんは『マリアの娘』になろうとしていますし、また、そのようなものとして公に姿を現そうとしています。」

これらすべてのことから、二人はこれから誕生する修道共同体の宣教について、詳しく検討する機会を得ました。次に引用する 1815 年 10 月 3 日付の手紙は、シャミナード師の考え方を知るうえで「鍵」となるものです。

> あなたは、自分の小さな修道女会がどのようなものであるべきか、その概要をお望みですが、それは当然です。おおよそのことを掴んでいただくためですが、まず第一に、すべての修道会の会員と共通に持たなければならないことを考える必要があります（あなたがたも文字通りの意味で修道女となるはずなのですから)。第二には、他のすべての修道会から区別されるはずの特殊なことについて考えなければなりません。
>
> 皆さんはいわゆる修道誓願を宣立することになるのですから、真に修道女となります。そして、誓願を宣立するようにとあなたがたを鼓舞した諸徳、また、誓願の支えとなるはずの諸徳を実践することになります。イエスの尊い御母マリアは、あなた方の保護者であるように、マリアをあなた方の模範としなければなりません。ここから修道生活の最も本質的な修行と実践が出てくるのです。
>
> 皆さんを他の修道会と区別する点は、人々の救いに対する熱誠です。信仰生活と徳において何が大切なのかを知らせなければなりません。つまり、キリスト信者を倍増させなければなりません。皆さんは子供を教えたり、病人を見舞ったり、寄宿舎を経営したりする必要は全くありません。それらの事業は、たとえどんなにすばらしいものであっても、皆さんよりも古い他の団体に任せな

さい。それでは私たちは何をしたらいいのですかとお尋ねでしょう。皆さんは信仰教育を施し、あらゆる身分、あらゆる境遇の若い女性に徳を修めさせることです。つまり、それは彼女たちを真の「マリアの信徒会」の会員にすること、全体集会とか班やグループごとの集会を催すこと、若い女性の小規模の黙想会を行うこと、将来どのような道に進むべきかを指導するなどを行うことになります。皆さんの修道会はすべて宣教修道女によって構成されることでしょう。まさにこのような視点に立って、私たちはこの身分にふさわしい志願者を識別しなければなりません。

以上の簡単な概要からお分わかりと思いますが、「マリアの信徒会」はあなたがたの修道誓願で損なわれることは何もありません。全くその反対です。

従って、これほど聖なるもので、皆さんに使徒的精神を分け持たせる身分のためにどのような準備をすべきなのかを、今、前もって考えておいて下さい。

シャミナード師は「マリアの信徒会」への奉仕と、それを通してキリスト者を倍増させる働きについてずっと考え続けました。アデルの方は、特に田園地方の最も貧しい人々にとって益となるような、幾つかの活動に集中していました。これらすべてのことは少しずつ調和していきました。福音を宣べ伝えるため、また十全な意味で宣教師となるためには、時と場所の必要性や緊急性によって、教育活動や慈善活動から始めることが時として必要になります。アジャンの貧しい人のために教育が最も必要だと知っていたアデルは、もし自分がこれから誕生させる修道会の中の何人かをそのために専念させなければ、市民は大変失望するだろうとシャミナード師に説明しました。師は再びその考えを変えました。ほんの二か月前まで、師は「あなた方は子供を教える必要はありません」と言っていました。（上記 10 月 3 日付の手紙を参照）しかし、同年 12 月 6 日付の手紙では次のように書いています。「子供たちの無料教育に関しては、約束しても結構です。アジャンの人口と、当市がこの仕事のために提供する必要な援助については、間違った情報を与えられていました。」

事実、汚れなきマリア修道会の最初の独創的な一連の使徒的活動は、「マリアの信徒会」を活性化させ、アジャンの貧しい少女たちへの無料授業を開始する

ことでした。実際には、この二つは完全に両立し、補完的な活動でした。その活動とは、物乞いや貧しい女性達への訓育と信仰教育、青年女子「信徒会」による教育（それ以外には教育の手段がなかったので）、個人とグループのための霊操、新しい修道志願者の養成、などでした。

（4） 終生誓願を宣立する修道者

以下に述べることは汚れなきマリア修道会創立の詳しい歴史ではありませんが、ある歴史的な出来事を通して、この新しい修道会の性格について、より良い理解を得ることができます。1816 年 5 月 25 日に、修道会創立グループのメンバーは、借りた場所である「避難所」の古い修道院へ引っ越しました。この日は汚れなきマリア修道会の創立記念日として全マリアニスト家族によって祝われています。事実、彼女たちはその同じ日に共同生活を始めましたが、14 か月後の 1817 年 7 月 25 日まで、誓願を宣立しませんでした。その理由は、シャミナード師とアジャンのジャン・ジャクピー司教の間に考え方の相違があったからです。簡単に、このデリケートな問題の内容を汚れなきマリア修道会のシスター・ロザリオ・ロホの説明から引用します。

> ジャクピー司教の側から言うと、司教は自分の権限下にある「奉献した女性の会」を望んでいました。その当時、フランスの市民法はこのような会を、以前の修道会としてではなく信心深い婦人達のグループとして認可していました。このような会では、閉域の規則はなく、誓願も一年ごとのものでした。自分の教区の必要性に応える使徒として、ジャクピー司教はアデルとその姉妹たちの新しい共同体をこのように考えていました。
>
> 他方、シャミナード師は教会における修道生活のかけがえのない価値を確信していました。師は中途半端な修道生活ではなく、本物の修道生活を望んでいました。というのは、誓願による奉献に大きな敬意を持っていたからです。当時の教会法学者の考え方に従い、またローマ教皇庁の慣例に鑑みて、師は「女性の修道生活には、終生誓願と閉域の規則が必要である」と考えました。閉域の戒律は、例えば他の修道者が病人の世話をしたり、子供たちの教育をしたりするのを妨げるものではありませんでした。シャミ

ナード師は、どんな犠牲を払ってでも、当時の教会法の要求に従った真の完全な修道会を望みました。そのような修道会が、単にアジャン教区だけに限定されたものではなく、聖座によって全世界の教会に向けて承認されることになるのです。また師は、是非とも、世の福音化のために献身する宣教修道会を望みました。この理由のために、閉域の義務と福音宣教の要求とを結びつける必要がありました。そして、実際に、シャミナード師はこの解決策を見出しました。当時の慣習であった三つの修道誓願を伴う閉域を含むものに替えて、師は次の言葉で、閉域の誓願を新しい形で加えたのです。「私は、修道会の長上、または教会の長上によって明白なかたちで一時的に修道院を離れる命令がない限り、蟄居を守ることを誓います。」フランスの市民法が修道会を承認しなかった時であったにもかかわらず、シャミナード師は彼女たちに、いつか聖座と将来の民法によって真の修道会として公式に承認されるであろう奉献を、少なくとも本心では始めて欲しかったのです。

14 ヶ月の長期に亘って待たされた後、ついにジャクピ―司教は、最初のマリアニスト女子修道者が私的な形で終身の修道誓願を宣立することに、口頭で同意しました。1817 年 7 月 25 日に、彼女たちは告白室に入り、そこで内密に誓願を宣立しました。

私たちは以上の短い記述から、二つの計画がどのようにして汚れなきマリア修道会の創立という一つのものになったのかを知ることができます。紛れもないアデルのカリスマによってもたらされた貢献と一つの修道会の誕生によって、シャミナード師の宣教計画は明らかに豊かなものとなりました。

なぜ、何のためにマリア会は創立されたか

誰かが次のように言うと仮定してください。「アデルとシャミナード師が汚れなきマリア修道会を創立したが、後に、シャミナード師はその男子の部を創設した。」多分、私たちは非常に驚くことでしょう。しかしこの観点は、歴史的な事実関係からそれほどかけ離れたものではありません。私たちはアデルがシャミナード師の模索に新しい明確な方向性を与えたことを見てきました。汚れな

きマリア修道会の創立によって、シャミナード師は通常の修道共同体が自分の司牧計画の目的に非常によくかなうものだと確信しました。師は自身の司牧計画の女性部門を実現した後、み摂理の示すしるしがこの計画の男子部門の実現に向けて導いてくれるだろうと期待しました。

「在俗会」が存在していたのは事実です。しかし、最終的にマリア会を創立することになったのは、アデルによる汚れなきマリア修道会の創立と「マリアの信徒会」会員であったジャン・バプチスト・ラランの決心でした。

（1） 最も記念すべき日

それは 1817 年 5 月 1 日のことでした。中心となる登場人物はシャミナード師と師の「マリアの信徒会」のメンバーの一人です。その時この青年は神学生であり、またエステベネ神父の教育機関の教師でしたが、この教育機関では多くの会員たちが手伝っていました。当時彼らはほとんど全員、自分の本当の召命は何だろうかと探していました。これから述べることは全て、この日の出来事の一方の当事者、ジャン・バプチスト・ラランの話に拠ります。

前述の日に、ラランはシャミナード師のところに来て、イエズス会員になるという考えをやめると告げました。それは、その考えに従って歩み始めたけれど、これは自分の召命ではないとはっきり判ったからです。彼は自分が「マリアの信徒会」の指導者の人生と働きに似たものに召されていると感じました。シャミナード師はこれを聞いてほとんど涙を流さんばかりに感動し、喜びの声を上げました。「これこそ私が長い間待っていたことです。神様は賛美されますように！ 神様はその意思を示してくださいました。神様が 30 年前にそのことを私に霊示してくださって以来、私が模索してきた計画を実行に移す時が来ました。」

そこで、シャミナード師はラランに、「修道生活がキリスト教生活に対して持つ意味は、キリスト教が人間性に対して持つ意味に相当する」と説明しました。男女修道者なしには、人間の生活において福音が充分に実現されることはないでしょう。革命以前と同じ様式の修道会を復興しようとするのは無駄なことです。とはいえ、修道生活にとって本質的な様式は一つだけというわけでもありません。ある人が普通の服装を着用して修道者であることはできます。シャミナード師は言いました、「修道誓願は宣立するが、可能な限り修道名、修道服などを持たず、民法の公認を受けない修道会を創立しましょう。『主は新しい戦術

を選ばれました』(Nova bella elegit Dominus)。すべてをマリアのご保護に委ねましょう。マリアの聖なる子は地獄に対する最終的な勝利をマリアに留保しておられます。「マリアはあなたの頭を砕くであろう。」シャミナード師は普段はあまり見せない感激した面持ちで、「謙虚な心で、この方のかかとになりましょう」と言って締めくくりました。

今度はラランが、感動してシャミナード師への信頼を顔に表し、考える時間を請いました。彼は何人かの友人、特にエステベネ師の教育機関で一緒に生活している友人と話し、今聞いたシャミナード師の考えや計画について彼らに説明すると約束しました。そしてそのように実行しました。こうしてマリアニスト家族における男子修道者の最初のグループが誕生したのです。

ここまで私たちは最初の男子マリアニスト修道者の証言を聞いてきました。ここでマリア会が誕生した時に存在したいくつかの理念を強調することは興味深いことだと思われます。

① この新しい修道会は、革命以前に存在したような修道会を復興しようとするものではありませんでした。それは新しい様式を持つ修道会です。つまり、可能な限り、どのような外的なしるしも帯びず、市民法の承認も受けない修道会です。しかし、ありのままの歴史的現実が後に示すように、市民法の承認のない修道会は不可能です。マリア会もいくつかの市民法にかなったものになることが必要でした。

② これは修道生活の誓願を有する真の修道会です。修道会として、これは再キリスト教化の計画に完全に統合されることになります。それは、福音を現実に適用するに際して、修道会なしには、福音は不完全なものに留まるからです。

③ この新しい修道会は、悪に対する戦いと勝利の秘義であるマリアの保護の下に置かれることになります。マリアの使命に統合されたこの修道会は、「約束された方の踵（かかと）」となります。

④ この人々の理想は、「マリアの信徒会」の指導者（シャミナード師）と同じような人生、同じような事業に生涯をささげることでした。シャミナード師が生きたように生き、師が行なっていたことを行う―これがマリア会の構想の出発点でした。

（2） マリア会に関する最初の基本的な概念

この最も記念すべき日から二年余り経ってから、すでに創立されていたマリア会は、新しく創立された修道会の起源に関する歴史的な記録を保存するために、あの日以来起こった出来事の公式の歴史を書くことを決定しました。1817年10月2日の会合でなされた最初の合意から、1818年8月30日に始まった黙想までに起こったことを確証することは必要でした。ジャン・バプティスト・ララン師はこの記事を書くよう委託されました。けれども、現在、ララン師の手になる記録は私たちの手許に何も残っていません。マリア会の総本部資料室に保管されているマリア会の起源に関する「歴史的な解説 Notice Historique」という資料の最初の部分は、実は、ララン師の記録の写しである、と推定されます。

> 1817年10月2日、守護の天使の祝日に、新しく設立される修道生活を進んで受け入れると決定した最初のメンバーたちは、サン・ローランのシャミナード師の家に集いました。その日、オギュスト・ペリエ、ドミニック・クルーゼ、ジャン・バプティスト・ララン、ブルーノ・ダギュザン、そしてジャン・バプティスト・コリノーは、自分たちが決定したということ、及び、世と縁を切るだけでなく、計画された創立を成し遂げるために、持てる能力を十分に発揮して働くよう、神によって召されたということを宣言しました。その時に始まって８日毎に行なわれた初期の会合で、以下のような基本的な考えが書き留められました。
>
> イ．この会は、初代教会のあらゆる熱心さを備えた真の修道会となるであろう。
> ロ．この修道会は、混合構成、つまり、司祭と信徒から構成されるものとなるであろう
> ハ．この修道会は、その基本的な働きとして、中産階級の若者の教育、宣教活動、黙想会、そして、「マリアの信徒会」の設立とその指導を行うであろう。
> ニ．会員はあまり人目につかないようにし、状況に応じた用心をすることになるであろう。

ホ．何よりも、この修道会は至聖なる乙女マリアの保護の下に
置かれ、マリアのものとなるであろう。

このテキストが示しているように、1817 年 5 月 1 日に起こった出来事について語られていることと同じ線に沿っています。創立に関わったグループの人々には、何か新しいものが創設されるというはっきりとした意識があります。後のいくつかのテキストの助けを借り、それらに光を得て、以下に、これらの考えについて述べてみます。

① マリア会は、終生誓願を宣立し、初代教会のあらゆる熱心さを有するが、それらを新しい様式の下に表現する真の修道会である。

② この修道会は、同じ修道会の中で司祭と信徒が一つに結ばれた混合構成となるものです。修道会の初めから、最初の共同体は労働者、聖職者、教師から構成されていました。すべての修道者は深い共同体精神を持たねばなりません。つまり、一つの心、一つの魂でなければなりません。同じ修道会ではありますが混同することなく、彼らの間には深い一致がなければなりません。各修道者はそれぞれ司祭または信徒としてのアイデンティティを常に保つのです。

③ この修道会は本質的に宣教的な修道会です。その使徒的な目標は、信徒を倍増させ、信仰を養成し、キリスト者の共同体を活気づけ、そして、それだけという訳ではありませんが、主として「マリアの信徒会」に奉仕するということです。しかし、創立後に会員たちがどのような特定の仕事をするようになるのか、誰も正確にはわかりませんでした。使徒的な働きは広く開かれており、み摂理への信頼も深いものがありました。標語は、カナで僕（しもべ）に言われたマリアの次の言葉でした。「この人がいうことを何でもしなさい」。たとえば、教育の仕事、宣教活動、黙想会指導、聖母青年会活動など、特に若者と貧しい人への働きに献身することは、後のテキストで同様に強調されています。

④ この修道会は、出来るだけ修道者としての目にみえる外観をもちません。むしろ、信仰と祈りに裏打ちされた深い内的精神によって生かされます。

⑤ 最後に、この修道会は「マリアの会」、つまり、マリアに属し、マリアのものである修道会です。何故なら、マリアは救いの歴史において使命を担っているからです。　新しいマリア会修道者は、マリアの使命に完全に統

合されたこの会と、特別な誓願、つまり堅忍の誓願によって自分を結びつけるのです。

（3） 最初のマリア会員を養成した黙想会テーマ

黙想会でシャミナード師が最初の会員たちにした講話の概要にしても要約にしても、完全な形でここに再現する必要はありません。現在、それは広く知られています。この本は、この黙想会に参加した修道者が書き残したほぼ一致している様々な概要をたどって、講話のオリジナルな内容を調べるという問題に入り込むつもりはありません。しかし、いくつかの黙想テーマを強調することによって、マリア会の最初のメンバーを形成する上で、命を吹き込んだ精神の一端を得たいと思います。

マリア会を創立するという決定を確認し、この男子グループを形づくった最初の二つの霊的修行はとても重要です。一つは、1817 年 10 月 2 日に終り、創立に関する決定をした黙想会、もう一つは、1818 年 8 月 31 日から 9 月 5 日まで行われ、最初のマリア会員の誓願宣立を準備した黙想会です。この二つは、いわば、「マリア会創立の黙想会」といえます。

この二つの黙想会の間になされた講話の多様なテーマの中で、二つが目立っています。「信仰」と「マリア」です。シャミナード師は後の黙想会でもこの二つのテーマに立ち返って講話しました。以下に、この二つのテーマに関するいくつかの最もオリジナルな視点、もしくは、繰り返し語られたいくつかの観点を挙げてみます。

＜ 信　仰 ＞

① シャミナード師は、信仰を、精神を照らし、意志を敬虔な行為へと向けさせる神からの贈り物、として提示します。信仰に導かれて、人（その精神と意志）は神に服従するのです。

② シャミナード師は、修道者の身分を「信仰を実践する身分」と定義しますし、修道者の召命を「信仰を生きる身分への召し出し」と考えます。

③ また信仰は、やがて来るがまだ見えない現実を前もって味わうことであり、その現実を楽しみにすることです。つまり、信仰はその現実が確かに存在するのだとわれわれに確信させるので、このような現実は現存するものとなり、実体的なものとなります。信仰が私たちの存在に浸透するとき、そ

れはあたかも「神の言葉」が私たちの中に来て住まわれているようなものです。このように、信仰の人は信仰に生きます。つまり、その人は信仰によってだけ行動する者となるのです。

④ マリア会の修道者はこのような信仰の人となるべきです。

＜ マリア ＞

① シャミナード師は、マリアを信仰の視点から考えるようにと私たちに勧めています。これら初期の黙想から、新しい修道会を特徴づける二つの透視図が浮びあがってきます。　「マリアとの契約」と「十字架上のイエスの言葉、『これはあなたの子です』を生き抜くこと」、この二つです。

② ヘブライ語聖書における人々と神との聖書的な契約を用いながら、シャミナード師は「マリアとの契約」という理念をマリアの名を戴く会によって発展させました。このマリアとの契約は、新しく創立された修道会を規定する一つの基本的な特徴です。マリアはマリア会のメンバーを選んで自分の特別な家族としますが、彼らはマリアを自分たちの母として選びます。これら男子修道者は、マリアを敬い、愛し、誉め称え、そしてマリアの使命に参与することに自分の生涯をかけるのです。マリアはすべてをあげて彼らを保護します。マリアは彼らのすべてをご自分の所有物とし、その優しさで彼らを包まれるでしょう。マリアとの契約のこのような見方には、強い共同体志向の特性があることに特に注目してください。マリアと契約するのは個々人ではなく、男子の共同体としてのマリア会です。修道者一人ひとりがこの契約を自分の生活に個人的に当てはめなければならないのは明らかです。

③ マリア会員は常に自分を「十字架の下に立つ聖ヨハネと行動を共にする者」と感じなければなりません。そして、イエスの次の言葉を自分たちに向けられたものとして聞かなければなりません。「これがあなたの母です。」

④ 後に、1821 年の黙想会で、特に「赤いノート」あるいは「ボルドー写本」として知られている手書きの資料による「第 18 黙想」の中で、シャミナード師はある重要な説明をしています。その説明の中に、次のような非常に意義深い二つの要素を見ることができます。「神が私たちを召されたのは、私たち自身の聖化のためだけではなく、フランスに、ヨーロッパに、いや全世界に信仰を復興させるためでした。つまり、今の世代を誤謬から

守るためでした。何と偉大な事業でしょう！何と高貴で、聖なる、寛大なものでしょう！マリア会の精神はマリアの精神です。これが全てを語ります。」

（4） 後のシャミナード師の文書

後に書かれたいくつかの文書で、シャミナード師はこれらの理念を繰り返し述べ、また、発展させています。ここで、最も重要だと考えられる三点を挙げます。これらの中に、私たちはマリア会に関するシャミナード師の理念の完成を見いだすことができます。

① シャミナード師手書きのいわゆる「ノートブックD」がいつ書かれたものか、まだ正確な日付は判っていませんが、多分、1828 年から 1838 年の間に書かれたと思われます。それは本当に未完成の草案に過ぎないものですが、非常に貴重で豊かな内容となっています。次の一節は、この本で取り上げてきた幾つかの考えを理解する上で、より一層光を与えてくれます。「マリア会を創立することになった一つの動機は、フランスに、いや世界に、最初のエルサレム教会の姿を再興することでした。この目的に導かれて、男女二つの修道会が生まれました。両修道会において、よく研究された組織とともに、全体的な規則や固有の規則があるので、全ての生活状況は容易く見分けられることでしょう。」

② 汚れなきマリア修道会とマリア会の会則の著者が両修道会創立の時に持っていた計画の大要は、シャミナード師によって書かれ、1838 年 9 月 16 日にグレゴリオ 16 世教皇に提出されました。この手紙の中で、シャミナード師は両修道会を、再度、より大きな司牧計画の一部として示しています。

> 神は、悪の奔流に堅固な堤防で対抗させるために、今世紀の初頭にあたって私に、教皇派遣宣教師の勅許状を懇願いたすよう、霊感を与えられました。それは、信仰の松明をいたる所に再び点ずるためであります。どのようにしてかと申しますと、感嘆している社会に向かって、すべてのところで、あらゆる老若男女、あらゆる身分のカトリック信者の、威厳を帯びた集団を指し示しながら、点ずるのであります。この集団は、特別な団体の形式で集

まったもので、自負心を抱かず世間体を気にせず、我われの聖なる宗教の教義と道徳を、全く純粋に実践するのであります。以上の意向を抱き、また畏敬すべき司教さま方の勧めを受け、慎み深く請願書の中に全霊を込め、ピオ七世聖下の膝下にひれ伏してこれを奉呈しました。聖下は私の願いをかたじけなくも聞き入れ、1801 年 3 月 21 日の勅令で、最も広範な権利を賜りました。聖下、それ以来、熱心なコングレガシオンが男子の部、女子の部としてフランスのいくつかの町に組織されました。キリスト教はわずかの間に相当数の信徒を獲得するという幸いを得ました。そして、それによって多くの善が行われました。

然しながら聖下、この手段は賢明に運営されれば優れたものではありますが、それだけでは不充分でありました。

聖下、そこで私は神の前で次のように信じるようになりました。すなわち、二つの新しい修道会を創立することが必要である、一つは青年女子のため、もう一つは青年男子のためです。彼らは、キリスト教が古臭い制度ではないということを、その良い模範を示すことによって世間に対して証しするでしょう。彼らはまた、福音が 1800 年前と同じく現代に於いても実行できるということを示すことでしょう。彼らは教育という分野に進出して、あらゆるレベルの学校、あらゆる種類の学校を、特に最も多くの見捨てられた階級の人々のために開設することになります。

③ 1839 年 8 月 24 日付の黙想指導者に宛てたシャミナード師の有名な手紙は、その全文を引用する価値があるでしょう。しかし、ここでは両修道会特有の性格に言及している一節だけを挙げておきます。

・・・・これが私たち両修道会と他の修道会とを区別する性格であり、家族の特徴なのです。私たちは道徳の改善という事業、信仰の擁護と普及という事業、そしてそのことによって隣人を聖化するという事業、このような大事業において、特別な仕方で至聖なる乙女マリアの助手であり道具であるのです。マリアはご自身の熱意を私たちに伝え、あの宣教計画を私たちに託しているので

すが、その計画はマリアの殆んど無限ともいえる愛によって示されているのです。私たちは、生涯の終りまで忠実にマリアに仕える誓願を立て、マリアが私たちに言われることは何でも敏速に実行するのです。マリアとの契約によって当然彼女に帰すべきものとなった私たちの命と力を、このようにマリアへの奉仕に用いることができることを、私たちはうれしく思うのです。

以上三つの文書が書かれた日付はこの本が設定した年代（1800 年－1817 年）からは外れています。上記の三つの日付までに、マリア会はその教育事業の分野ですでに大きな発展を遂げていました。また、1830 年の革命によって、「マリアの信徒会」は禁止されていたことを思い起こさなければなりません。「マリアの信徒会」は 1834 年に再興されましたが、それ以来、「マリアの信徒会」が低下したことは確かです。マリア会がその創立当初に存在したあり方と後の時代のそれとの間には、顕著な相違がみられます。とはいえ、シャミナード師の計画は依然として同じ目的を持っていました。つまり、「各時代の必要性に最も合致した手段を通してのフランスの再キリスト教化」です。

結　論

（1）「マリアの信徒会」に奉仕する修道会という理念は、いくつかの試みや変更を経て、シャミナード師の思考局面に生じてきました。以前に述べたように、この理念は追放からの帰還以前に、そしてフランスに戻った後の最初の数年間に、はっきりとした形ではないとしても、芽生えていたかもしれないし、考えられていたかもしれません。しかし、この理念がサラゴサ滞在中に詳細に練り上げられたとは考えられません。シャミナード師がサラゴサで受けた霊示の真の本質は、初期キリスト者の共同体のような使徒的な共同体を創設することでした。この霊示は「マリアの信徒会」としてすぐに実践されました。この計画の具体化と発展を強化するために、最初に汚れなきマリア修道会が生まれてきました。その創立に、アデルはその個性をもって貢献しました。マリア会の創立がこれに続きました。シャミナード師の考えは、男女二つの部門からなるただ一つの「マリアの会」

を創立することでした。その会は、「死なない人」となって「マリアの信徒会」を永続させるのです。この二つの修道会は、一人の父親を持ち、基本的な会則と使命を同じくし、また、最初は、会計までも同じでした。

（2） 汚れなきマリア修道会とマリア会は、どちらか一方だけで意味のある司牧計画ではなく、「マリアの信徒会」という計画と無関係に誕生したものでもありませんでした。両修道会はシャミナード師のただ一つの宣教計画に非常に緊密に結ばれたものとして現われてきました。両者は正にこの計画を強化するために誕生したのです。教えるという働きは、「マリアの信徒会」の活気づけと共に、すでに両修道会の創立当初から存在しており、この宣教計画と無関係ではありませんでした。何人かの信徒会員は両修道会創立以前にすでにこの種の働きに参加していました。彼らは結果的に、シャミナード師の表現を使えば、「信徒会の精神に生きる修道者」としての働きを始めていたのです。この「教える」という働きはまた、計画全体を強化し補完するものとして現われていました。

（3） シャミナード師の計画が発展するにつれて、多様な組織や団体は、複雑だが調和を保ったグループとして、つまり、真のネットワークで結ばれた共同体としてまとまっていきました。その計画は、フランスと全世界の再キリスト教化という目的を持ち、共通の使命に向けて組織され、共通の精神で生かされた社会的な組織体でした。また、それは、初代教会の共同体をモデルとして集まった共同体を通して、「初代教会のキリスト者」を養成し、倍増させました。彼らはマリアと共に集い、マリアに自分自身を奉献し、福音を宣べ伝えるために世界のどこであろうと出かける気持ちを持っていました。

（4） これらすべての福音宣教のグループはその出発点において、深く一致し統合されていましたが、時が経つにつれて、それぞれ別々に動き始めました。避けがたい変転と方向転換を伴って、歴史はこれらのグループを異なった道へと導いたのです。しかしながら、今日、私たちは新しい春が巡って来たこと、つまり、シャミナード師の預言者的で生気を吹き込む計画が再び花開くことを示唆する時のしるしに気づき始めています。このことを次の第二部で取り扱うことにします。

第二部　シャミナード師のメッセージの現状

第二部の導入として

組織体と精神

この本の第一部は、シャミナード師の司牧計画がどのようにして生じ、師がそれにどう応えたのかについて述べています。第二部では、宣教計画の現状を組織体と精神という二つの観点から述べます。ここでいう組織体とは、実は、私たちが最近、マリアニスト家族と呼んでいる「社会的団体」のことです。第五章でこの社会的団体について考察し、「マリアニスト家族」という言葉が意味しているものをさらに正確に定義します。差し当たり、「マリアニスト家族とは、自分たちをシャミナード師が創設したものの継承者であると自認する会とか共同体からなる一グループである」ということを知っていれば十分です。第六章では、この組織体にいのちを与える精神について述べます。

ここでは、「組織体」と「精神」という言葉は類比的に用いられています。ある精神をもってある団体組織に集うようになった人々は、組織だってない集団に埋没して自分を見失った生き方を止め、新しい生きた団体を組織するようになるのです。

このような意味で、ここで述べる精神というものが、外面的な構成要素、例えば、印、紋章、一定の色、制服などから成るものではありえませんし、これらのものにその由来を求めることはできません。何であれこれら外面的なものがいのちを与えることはありません。逆に、これらすべては、いのちが外面にそして最も表面に現われたものなのです。さらにまた、精神はその組織から、つまり一連の規範、規約、規定から生ずることもありえません。組織機構というものは社会的団体に固有のものです。組織機構は何か人間の身体構造を思わせるものですが、ここではむしろ、法人組織的なものを指しています。例えば、マリアニスト家族の組織機構を定義すると、単純化して多くの部分から成る組織体であるといえるでしょう。つまり、これは社会的団体を分析する定義ということになります。団体組織に関していえば、私たちは、明確に規定された構成要素、それぞれの行政組織やよく考えて制定された規範、さらにそれらの計画、調整、評価、決定の手続き、などをすべて備えた完全な組織のことを考え

ることができるかもしれません。精神なしでもこれらすべてのものは、多分神経と筋肉を供えた強力な骨組みでありつづけるでしょう。しかしながら、何か身体的なものは、精神が無くては死んだも同然です。さらに、精神は、理論的で抽象的なもの、静的で固定されたものから構成されることはありえません。机上の理論は一つの例といえるでしょう。それは非常に論理的であるかもしれませんが、それだけでは何の結果ももたらしませんし、いのちを与えません。

精神は内的でダイナミックなものです。それは共通の使命、共有する計画、深い欲求に動かされた同じ目標から成り立っています。そうすることが必要だ、あるいは緊急だ、と感じて様々な人が集う時、彼らにとって新しい生き方が可能になります。今、「可能」になると言いましたが、それは必要性と緊急性を感じることが大きな意味を持つとはいえ、それがすべてではないからです。彼らはまた同じ動機によって動かされることが必要です。一つの簡単な例として、三人の人が、ある地域で文盲撲滅のために働く必要があると思ったとしましょう。つまり、彼らは同じ目標を持っているし、その選ばれた場所で読み書きを教えるための効果的なプログラムを開始するかもしれません。しかし、その中の一人は、共産主義者を養成するために文盲と戦い、革命を始めようとしています。もう一人の人は、自分が編集したポルノ雑誌が売れるようにそうします。三人目の人は、より人間開発が進み、より成熟し、より高い能力を備えた人を養成したいと望んでいます。従ってその働きは、自分の兄弟姉妹である他者のための無私無欲の愛が動機となっています。この三人は、同じ目標を持つとはいえ同じ動機を持たないので、社会的団体、または組織にいのちを与えることはできないでしょう。この組織体は解散に追い込まれ、日の目を見ることはありません。

真の人間的な一致に至るためには、共通の使命と基本的な動機づけを共有する必要があります。このことは特にいのちを与える精神に当てはまります。さらにこの使命が、もしその時代の真の必要性に合致し、人間の魂の深みから来る動機づけを持つなら、湧きあがってくる精神は社会的団体にいのちだけではなく、成長、生産性、活力を与えます。つまり、精神が息吹くのです。以上述べたことが、マリアニスト家族とマリアニスト精神についてこの第二部で考える視点です。

これまで何回も、私たちの今の時代は、シャミナード師が生きた歴史的な時期とその類似点を比較できると言われてきました。今日、師の司牧計画と同じ

ものを実践できるでしょうか。あの時期はマリアニスト家族を誕生させました。師の司牧計画が現代でも可能かどうか、また、どのような条件あるいはニュアンスで可能なのかをごく簡単ではあっても、考えてみることは興味深いと思います。

一見したところ、教会が今存在している私たちの社会と歴史的な時点は、シャミナード師の時代のそれとは非常に異なっているように思われます。これから私は、両者の比較からより明確になる特徴をいくつか指摘したいと思います。

社会において

シャミナード師の時代以来、途方もない進歩があったことは否定できません。科学、技術そして人間の能力の面でも素晴らしい発展がありました。人類に利益をもたらす発明や発見は間断なく続いています。とはいえ、新しい問題が起こるとか、以前からあった現象や危機が悪化するということもありました。富の分配という面で不均衡が増大しています。しかし同時に、この不正義に関するより大きな関心が、国レベルだけでなく国際レベルで増大しています。この不公平な状況から起こってくるある問題、例えば世界の飢餓の問題は思いも寄らない広がりを帯びてきました。

飢餓という悲惨な地域とは対照的に、ある場所では消費者中心社会、むしろ浪費社会が進展し、人間らしく生きる条件を無為にしています。このような社会は常に所有と権力へと人々を誘い、人と人との関係を破壊しています。世界は全面戦争を体験しましたが、それにもかかわらず、留まることを知らぬより複雑な軍事力、しかも破壊と死への大きな可能性を持つそれに向かって、狂気じみた競争を続けているのです。人権については多くのことが語られていますし、人権擁護の分野で種々のことがなされ、全人類を結ぶ共同体への深い憧れがあります。しかし他方では、拷問、暴力、抑圧、それに人種差別が満ちあふれていますし、テロリズムは私たちの社会的腐敗となり、あらゆる不正が横行しています。

私たちの時代は根本的に科学技術の社会となりました。私たちは機械だけでなくコンピューターとロボットの時代に生きており、これらのものは、仕事そのものにおいても労働者間の関係においても、人間らしい手ざわりの喪失の一因となっています。労働者の移住の動きは、より貧しい社会グループにおいて

特に顕著です。失業によって、人々は将来と仕事を求めて自分の故郷を離れざるを得なくなります。田舎は人口流失で疲弊し、都市はあまりの人口集中のために苦しんでいます。快楽主義とエロチシズムは家庭生活を破壊してきました。家族は、以前には知られていなかった危機を体験しています。今日、家族の中に子供の数は減少し、生活空間は狭くなり、家族が共に過ごす時間も少なくなりました。人間性は、現代の文明の持つイメージとスピードによって圧倒されてしまう可能性がありますし、刺激と誘惑に間断なくさらされています。この刺激と誘惑によって、人間性は満足を得ることはできませんし、刺激や誘惑は、人が望むような速さで得られるものではありません。

精神的な緊張やストレスは私たちが新しく体験しているできごとです。多くの地域にある危険性や、ある環境（家庭、労働、知的職業）で大きくなってきた不安定さは、心理的なもろさを抱える世代を生みだすもとになっています。今日では、確立し成熟した人格を養成することは、以前より困難になっています。また、シャミナード師の時代には実際上存在しなかったある現象、例えば警鐘を鳴らすべき麻薬の拡散が今日問題となってきました。

教会において

教会の置かれた現代の状況は、教会が存在している国によって大変異なっています。いずれにせよ、教会はシャミナード師の時代のそれとは違っているように思えます。第二バチカン公会議以後、真の深い刷新をもたらした教会には、相当な進展がありました。教会は政治的権力から身を引き、エキュメニズムに対して開かれた態度をとり、世界との対話を開始し、すべての人の幸福のために働く善意の人々と協力するようになりました。

しかしながら、問題も増加しています。非常に多くの人々の非キリスト教化、司祭・修道者の召命の減少、修道生活や司祭職からの離脱、それに信仰実践の希薄化などです。ある地域では教会は迫害に、それもしばしば陰険なそれに直面しなければならず、他の場所では多少無神論的世俗主義と向き合わなければなりません。

社会と教会についてのこのようなパノラマは、性急で不完全な単なる概要に過ぎません。単に一番目につくものを述べただけです。私たちの時代はシャミナード師のそれと非常に異なっているのでしょうか。

一見したところ、そのようにみえます。しかし、これから描写するような大きな司牧的必要性を詳しく調べてみると、ある面では予期しなかった類似性を見いだすことができます。

私たちの時代は、実際のところ、何を探し求めているのでしょうか。現代は超越性と聖性を、あらゆる深い人間的なものの再生を、健康的な人と人との関係を、共同体の中でこそもっと慰めとなる生活を、そして、今日人類が直面している大きな問題を解決することができる強い連帯と全世界的な一致を渇望しています。マリアという人物について、また、マリアが教会の中で有する使命についての理解が深まるにつれて、今日人類は大きな恵みを受けることができます。神に対してよりこころを開き、より単純で深く人間的であり、マリアへの奉仕においてよりこころを込め寛大であるような新しい男女にとって、マリアは教師となるでしょう。マリアは信仰と希望のしるしであり、悪とすべての闇の力からの開放のシンボルであり、善なるものと愛の大勝利の神秘です。今日私たちはまた、多くの人々の非キリスト教化と環境の世俗化に気づいています。伝統的に福音宣教の働きを担ってきた司祭や男女修道者の減少という事実があります。教会は宣教的な働きを、もう一度勇敢に新しくすることが必要です。確かな養成によって、以前にも増して、信徒の中に「最初のキリスト者」のような人格を育てる必要があります。私たちは使徒的な共同体を形成して福音を生きなければなりませんし、新しく福音宣教を担う人々を養成しなければなりません。これらすべてのことは、ギョーム・ヨゼフ・シャミナード師の司牧計画の正統な後継者であるマリアニスト家族とその精神に対して大声で叫んでいます。以上が第二部の主題です。

第五章

マリアニスト家族

シャミナード師の時代から現在まで、汚れなきマリア修道会とマリア会（マリアニスト家族の二つの修道会）は常に存在してきました。またマリアニストの第三会[1]の人々も、人数の多少や結びつきの濃淡は別にして、存在してきました。マリアニストの学校には、マリアのソダリティという名を持つものを含めて、通常、生徒のキリスト教的使徒グループが存在していました。そして、マリアニストの世界で多少散らばっていたとはいえ、他の成人のグループもある程度マリアニストとしての意識を持って存在してきたことを誰も否定できません。今日起こっているものは、これらのものとは何か非常に異なっているものです。この第五章で、新しく現われてきたいくつかの傾向を指摘したいと思います。

マリアニスト家族の項目がマリア会と汚れなきマリア修道会の「生活の規則」のどこに置かれているかを知ることが、何か新しいことが起こっていることを示す最初の指摘となります。このことを短く説明することによって、「マリアニスト家族」という言葉が今日何を意味しているかをもっとはっきりと理解できるようになるでしょう。

今日また、マリアニスト家族の両修道会の間には相互関係の強化に向かう注目すべき傾向が存在します。

しかし、疑いもなく前例のない重要性を持つようになった出来事は、マリアニスト家族の信徒グループの出現と成長です。この第五章では、これら信徒グループが歴史的にどのように発展してきたのか、また、現在世界でどのような状況にあるのか、について概観してみようと思います。

以上の考察から、私たちはマリア二スト家族の将来に対して楽観的な見方を持つことができるように思います。1996 年の総会が私たちを「希望における仲間」と呼んだように、私たちがその将来に注目し、「希望における仲間」となることはふさわしいことです。

---

1 「アフィリエ」

両修道会の「生活の規則」におけるマリアニスト家族

第二バチカン公会議の規範に従って、汚れなきマリア修道会とマリア会の両修道会はそれぞれの生活の規則を新しくし、聖座によって承認されました。以前の会憲と比較して最も注目すべき一つの相違点は、両修道会の歴史上初めて、マリアニスト家族について言及するという関心があることです。新しい生活の規則は、ものごとの総体的な体系の中でのマリアニスト家族の位置を、何らかの形で描写しようと試みています。マリアニスト家族の描写に充てられたスペースとそれについての見方が似ていることから考えて、私たちはマリアニスト家族についてより明確な考え方を得ることができます。以下に、順を追って、マリアニスト家族に言及している生活の規則の条文を挙げます。

（1） マリア会の生活の規則

1983 年に承認されたマリア会の生活の規則には次のような条文があります。

① マリアニスト家族の定義：

マリア会と汚れなきマリア修道会が何故創立されることになったのか、その一つの主な理由は、マリアニストの精神を共通のきずなとするあらゆる身分のキリスト者によって構成されるより包括的な共同体が永続し、発展することを保証するためである。この包括的な共同体を「マリアニスト家族」という。（第二巻 1－1）

② マリアニスト家族グループ間の一致：

私たちは、マリアニスト家族の他のグループと私たちとを結ぶきずなを強化しなければならない。それによって相互の補足的な役割を一層意識するようになり、また、教会の共通の使命を促進するために共に働くことが必要になる。実際、私たちはマリアニスト家族に参加した他のキリスト者と交わる時、自らが修道者であるということを一層深く理解することができる。私たちの共通の起源と使命から考えて、汚れなきマリア修道会との協力関係は、特別な重要性を私たちに意識させる。（第二巻 1－2）

③ 堅忍の誓願の精神はマリアニスト家族の発展へと向かう：

とりわけマリアニストの堅忍は、マリア会員がマリアの役割に関するシャミナード師の洞察に参与していくための動機づけとなる。会員は自分の召

命の精神を体得するにつれて、マリアを賛え、マリアの使命について語るのを喜ぶようになる。会員は人々の信仰の育成、殊にマリアニスト家族の発展に尽力する。(第二巻 1－5)

④ 従って、マリアニスト家族の発展はマリア会員の使徒職において特別な位置を占める：

マリアニストとして、私たち会員はマリアニスト家族を拡張し強化する義務を負う。私たちはキリスト者を招いて共同体を形成するように励ますが、その共同体は彼らがマリアニストの精神に従って生きることを意識的に選択した共同体なのである。会員はこれらの共同体固有の性格と自律性の進展を十分に図りながらも、その共同体に必要な奉仕を捧げ、果たすべき役割を担うべきである。(第二巻 1－3)

カリスマの分かち合い：

私たちがそのカリスマを分かち合うために優先的に選ぶ方法は、マリアニスト家族の成員である信徒共同体の設立とその発展である。私たちは、彼らがマリアニストの霊性と宣教法によってこれらの共同体を形成するよう尽力し、それによって信仰共同体のネットワークを作るよう共に働く。他方彼らは、私たちが修道者としての召命に忠実であるようにと促がし、その信仰の証しによって私たちを豊かにする。(第二巻 5－6)

⑤ 第一巻 63 条はマリアニスト家族について明白には述べていませんが、マリア会員がマリアニスト家族の中で有する役割について言及しているので、考察に値する重要な条文です。

（2） 汚れなきマリア修道会の生活の規則

1984 年に承認された汚れなきマリア修道会の生活の規則にも、同様の取り扱いが見られます。

① マリアニスト家族の定義：

マリアニスト家族は、種々の階層に属するキリスト者のグループによって構成される。彼らはマリアとの契約を生き、マリアの使命に参与するよう招かれている。本会は彼らと、特に男子マリア会と兄弟的きずなによって結ばれ、教会の奉仕のために協力して働く。(Ⅱ－2)

② 毎日新たにされるマリアニスト家族との霊的一致：

姉妹たちは、毎日マリアニスト家族と一致し、マリアへの奉献の祈りと時

の祈りを唱え、マリアとの契約を新たにする。３時の祈りは、イエスがカルワリオにおいて愛する弟子にマリアを母として与え、彼のもとにマリアを引き取るよう願われた時を思い起こさせる。この祈りは、伝統的にマリアニストにマリアの霊的母性の秘義を想起させ、マリアの子として生き、自分のもとにマリアを迎えるようにとマリアニスト一人ひとりになされる招きである。（Ⅱ－3）

③ 堅忍の誓願とマリアニスト家族：
マリアニストの堅忍の誓願を生きることによって、姉妹たちはマリアニスト家族の発展のために働くようになる。（Ⅱ－1）

④ マリアニスト家族の他のグループとの使徒的協力関係：
マリアを知らせ、愛させ、マリアに仕えさせることは、マリアニストの召命の一面である。そのためにも姉妹たちは、マリアニスト家族の種々のグループと協力して働き、教会のマリア的運動に参加する。（Ⅱ－30）

⑤ 教会のために本会のカリスマの富を確信し、このカリスマが広まることを望んでいる私たちは、マリアニスト家族と共にその拡張のために働く。（Ⅰ－71）

以上に述べてきた二つの「生活の規則」からの条文は、マリアニスト家族に関する小論のための同じ霊的展望と指針を示しています。このことは、何か新しい重要なことが起こりつつあることを示しています。もしそうでなければ、二つの修道会がマリアニスト家族というテーマをそれぞれの会則にこれほどまでに取り入れることはなかったと思われます。

汚れなきマリア修道会とマリア会のより密接な関係

この両修道会がこれまでどのような関係を持ってきたのかは、まだ十分研究されてはいません。シャミナード師の考えでは、両修道会は一つの同じ修道会でしたし、師はこの修道会を「マリアの会」と呼んでいました。最初は、その関係は緊密なものでした。後には、いくらか困難な関係が存在しました。つまり、協力関係は少なくなり、接触が頻繁な時期と多少疎遠な時期を繰り返しました。しかしながら、現在、否定し難い事実があります。それは、最近、途切れることのないより緊密な使徒的協力だけでなく、内的刷新に関し、また共通

の霊性の源泉を一緒に探求することに関して、注目に値する親しい関係が存在してきたことです。

1986 年のマリア会総会で、汚れなきマリア修道会のシスター・サベリア・ロンガレッティは、最近の両修道会間の協力に関して講演しました。彼女の講演を基にしながら、次にいくつかの重要な点を挙げておきます。

① シャミナード師と師の著作に関する研究が両修道会でお互いに発展したこと。つまり、フランス語で出版され数ヶ国語に訳された文献が使用されたこと。

② 世界の様々な所で、マリアニストのカリスマに関する講座、講話、研修会が持たれたこと。

③ 養成に関する国際会議が、1984 年 10 月 29 日から 11 月 17 日までローマの汚れなきマリア修道会の総本部で、また、1994 年 11 月 15 日から 12 月 12 日までマリスト会総本部でそれぞれ開かれたこと。両修道会は修道生活の養成に関して一緒に考察しました。養成ということに関して、また、これほどの期間をかけて協力するということは、両修道会の歴史上、すべてが初めての出来事でした。

④ ノビスのための共通の学習コース。これはいくつかの管区でなされています。

⑤ 両修道会の総本部や管区本部の合同会議。

⑥ アデル・ド・バッツ・ド・トランケレオンの列福･列聖調査のためのマリア会員のヨゼフ・ベリエ師の働き。汚れなきマリア修道会のシスターの研修プログラムへのマリア会員の協力。

⑦ マリアニストシスター（汚れなきマリア修道会）へと修道召命を方向づけ、また彼女らを養成するうえでのマリア会員の協力。現在、この協力は相互的なものになっています。また、マリアニストシスターに導かれ、あるいは、彼女たちの中に受肉しているマリアニストのカリスマに惹かれて、マリア会の修練院に来る青年のケースもあります。

⑧ 経済的なレベルでの協力。

⑨ マリアニスト家族の信徒グループと働く上での相互協力。

⑩ マリアニスト家族の祝日や重要な記念日を一緒に祝うこと。

⑪ クリスマスシーズンに両修道会の総長から、マリアニスト家族の信徒グループに宛てられる合同メッセージ。これは素晴らしい伝統となってき

ました。

⑫ マリアニスト・インターナショナル・レビュー誌の存在。この雑誌はその製作と配布に関して何か全く新しいことを行いました。執筆者は、両修道会からだけでなく、初めて、マリアニスト家族のグループからも選ばれます。この出版物は全マリアニスト家族に配布されます。

⑬ マリアニストシスターの総本部が、1986 年マリア会総会の第六セッションに参加したこと。この総会の決議はこの重要な出来事を記録しています。マリア会総長、ホセ・マリア・サラベリ師は、「これは汚れなきマリア修道会の総本部が初めて公式にマリア会の総会で発言した出来事である」と言及しました。汚れなきマリア修道会総長、シスター・マリア・テレサ・カストロは総会参加への招待に感謝を述べ、シスターたちを紹介しました。最後に、彼女はこのような現実を、つまり私たちは同じ修道家族であることをより深く生き続けたいと表明しました。今日、より親密な関係を示す出来事としるしは、増加し強化されています。

マリアニスト信徒グループの急激な台頭

王室スペイン語アカデミー辞典の最新版の中で、“ECLOSION”（急激な台頭）という言葉の三番目の意味として次のように述べられています。「文化的な運動、又は、他の歴史的、心理的な現象に関していえば、『開花すること』、『現われること』、『突然の出現』の意味。」幸いなことに、最近マリアニスト信徒グループに関して起こったことは、正にこのことでした。

私たちがマリアニスト家族と呼んでいるものに関して、シャミナード師の時代から今日までの歴史は、いつかは書かれなければなりません。私たちは 1850 年から 1950 年の間に起こったことについて僅かなことしか知りませんが、多分それはあまり多くのことが起らなかったからです。1950 年代の初めに、マリアニストの第三会の間に、ある目覚めがありました。信徒マリアニストの開花というこの現象を、ポール・ヨゼフ・ホッフェル第９代マリア会総長は、1960 年 3 月 19 日付の「マリアの家族の膨張」という回章で取り扱っています。この回章は次のような意義深い言葉で始まっています。

この回章は種々の事情の下に書かれることになりました。み摂理

は通常、そのような事情を通して、その御旨を表そうとなさるのです。先の第二次世界大戦以来、マリア会の世界にいろいろな団体が入って来ました。それは、ある団体はマリア会の特徴であるマリア的な霊性から生き生きとした樹液を吸収するために、また、あるグループはマリア会の事業やその使徒活動を支えるためでした。これらの団体が時を同じくして、いろいろな国に現われたということは、ある面からいえば、以前にも増した真剣な研究と変化に富んだ刊行物のおかげで、マリア会の精神がマリア会の内部にも外部にももっとよく知られ、高く評価されるようになり、その結果、社会に広く行きわたったからだとみなすことができます。しかし、他方、この出来事の中に、ご自分がかつて創立者シャミナード師に示された計画を実現したいと望んでおられる、マリア様の特別なお働きのしるしを見るということは無理なことでしょうか。この計画は、これまでいろいろな不都合な事情があって、その発展が妨げられてきたのです。

このテキストが語っているマリアニスト家族のイメージに注意してください。つまり、ここに示されているのは、マリア会を中心としてその周囲にピラミッド型の階層組織のように集まったグループというイメージなのです。これらのグループはマリア会を中心とした世界の内に存在し、マリア会という命の樹液によって生き、マリア会の働きと使徒職を支えるのです。このようなイメージは、今日、何か非常に異なったものに変わりつつあるのですが、この引用で本当に注目に値するのは、信徒マリアニストの出現によって、多分、私たちは今シャミナード師の計画が完全なかたちで実現しているということに気づきつつあります。「その計画は今日まで、それに反対する様々な事情によって挫折してきたのでありますが…」ということです。1960 年代に、ホッフェル総長は何か新しいものの出現を予感しました。私たちは、シャミナード師が後世の人々に残したすべてのこと、つまり、師の真のメッセージが摂理的によみがえった時代に生きているのです。

世界のあちらこちらで発展している第三会に関していえば、ホッフェル総長は次のように断言しています。「このよみがえる活力は、長上たちの働きよって引き起こされたのではありません。・・・・一つの運動が永続するためには、聖

霊の働きによって動かされた大衆の心に根を張らなければなりません。」

実際、今起っている信徒グループの「急激な台頭」という現象は、聖霊に導かれた基礎に土台を置く出来事に共通する特徴をすべて備えています。

それから、ホッフェル総長は、マリア会員が働いている世界の至るところで現われてきている様々なグループを紹介しています。スペインに関しては、「聖ヨゼフの事業」と「在俗会」を取り上げています。マリアニスト家族全体の中で現在起っていることですが、この二つのグループは様々なレベルの要求と関わり方を含んでいます。「無原罪のマリアの信徒会と在俗会」の起源と発展の歴史に関して、マリア会員のフランシスコ・ホセ・ガルシア・デ・ヴィヌエザ・ザバラ師の著作があります。その本の最後で、1967 年にスイスのフリブールで開催されたマリア会総会の折にもたれたマリアニストの世間での事業に関する最初の国際的会合についてふれています。

これらの出来事は何かが国際的なレベルで起こっていたことを示しています。この信徒マリアニストの再興はアメリカ合衆国の諸管区でみられますが、そこでは、マリアニスト家族への興味と関心が大きくなっています。1960 年代の 10 年間に、フランスで、他の諸グループの間に、「フラテルニテ・マリアニスト」に統合する方向へと向かう新しい動きが開花し始めました。1970 年代の 10 年間には、信徒マリアニストはチリでしっかりと定着し、そして「モヴィミエント・マリアニスタス」が出現しました。これは他のラテンアメリカ諸国に広がりました。1980 年代には、フラテルニテ・マリアニストはスペインとイタリアで始まり、成長し、速いペースで発展しています。

以上、急ぎ足でごく最近のマリアニスト信徒共同体（ＭＬＣ）の歩みを振り返ってきましたが、もちろん、これは不完全なものです。しかし、以上述べてきたようなマリアニストの共同体や運動、それに、他のグループが芽生えてきたことから、1981 年に開催されたマリア会第２８回総会が何故、次のような特別な勧告をしたか理解できます。「総会は、総本部と管区本部に、次の三分野で引き続き研究し、激励し、行動するよう要請する：　①召命、②マリアニスト家族、③正義と平和。」マリアニスト家族に関することは、1981 年から 1986 年までの５年間に向けて、総会が定めた三つの目標の一つだったのです。マリア会員のクエンティン・ハーケンワース師が次の５年間、この分野について取り組みました。その中で二つのことが基本的な目標とされました：①マリアニスト家族の中に信徒共同体を創設するよう常に鼓舞すること。②信徒グループの

指導者間の対話を促進すること。

マリアニスト家族内に信徒共同体を創設する件に関して、ハーケンワース師がその文書で、フラテルニテ・マリアニストのようなグループを促進するよう強調していることは明らかです。彼は、1981 年の総会が総本部にこのような共同体の促進のために特別な努力をするよう要請したことを確認しています。

マリアニスト家族信徒グループの指導者間の対話を開始する件に関しては、ハーケンワース師は次のように説明しています。

> 1983 年 1 月、マリア会総長評議員会は各管区長に、マリアニスト家族に関する草案の声明を送付しました。管区長は、マリアニスト家族信徒グループと活動し、経験を積んできた会員たちにこの声明を回しました。この草案は対話を引き出すことを意図して出された声明でしたが、まさにその通りになりました。32 の回答があり、その大部分はかなり長文の意見を付していましたが、いずれもマリアニスト家族について大きな関心を寄せ、真剣な考察を加えたものでした。

この対話の他の面を理解し、また、その対話がマリアニスト家族信徒共同体のテーマの理解と解明のために、どのように貢献したのかをもっと明らかにするために、以下に、いくつかの考察を続けます。

（1） マリアニスト家族の正確な定義

「マリアニスト家族への参加にあたって基本的に求められるものは、シャミナード師が教えたような宣教精神を生きるという意識的な約束である」ということが、対話の過程で明らかになりました。この約束はグループか共同体の中でなされます。シャミナード師によって教えられた宣教精神を完全に生きている共同体は、マリアニストのカリスマを体現しています。ここにもやはり組織体と精神、つまり、集団ないし共同体の組織と霊性という考え方があります。日々この霊性を生きるという約束は、様々な生き方や社会状況にある人々によってなされ、様々な方法で実践され、マリアニスト家族内でこれらの人々を一致させる唯一の絆となるのです。

近年、マリアニスト家族を定義する上で明確になってきた他の点は、マリア

ニストの霊性の持つ二重の活力でした。第一は、私たちマリアニストは、聖霊によってイエス・キリストとの一致へと導かれるのですが、マリアはこの聖霊の働きに母としての愛をもって協力しておられるという点で、第二は、私たちマリアニストは、マリアの使命に参与していること、従って、教会の使徒職に統合されているという点です。

以上のことを考慮して、私たちはマリアニスト家族を次のように定義することができると思います。「マリアニスト家族とは、マリアニストの霊性の持つ二重の活力を生きることを約束したグループ、共同体、及び、個人からなるネットワークである。」

（2）マリアニスト信徒グループのタイプ

以上の考察から、マリアニスト家族内で二つのタイプの信徒グループを区別できるように思います。この区別は、1984 年 11 月 30 日付 「ＳＭ三部門」16 号でさらに明らかにされました。それは次に述べる二つのタイプの信徒グループです。

① アフィリエ：

このグループは霊的な絆を通してマリア会や汚れなきマリア修道会と結ばれているので、マリアニスト家族に属しています。従って、この関係はマリア会や汚れなきマリア修道会との霊的な一致であり、修道者たちの祈り、功徳及び善業に与ることです。アフィリエはこの二つの修道会なしには存在できません。アフィリエはマリアニストの精神に従って生活し、修道者の使徒的使命に協力するように努めるのです。

② 信徒マリアニスト共同体：

このグループは、フラテルニテ、モヴィミエント・マリアニスタス、ソダリティなどのように、異なった名前を持つことができます。アフィリエは修道会なしには存在できませんでしたが、これら信徒マリアニスト共同体は存在できました。原則として、この共同体はたとえ修道会が全く存在しなかったとしても、存在することは可能でした。これらは成人信徒のキリスト教共同体であり、シャミナード師の霊性に養われているとはいえ、自律の組織を持ち、会員自身の約束を伴う共同体なのです。従って、この共同体は、自律したり他のグループを設立したりするために必要な機構を備えています。即ち、彼ら独自の規則、信徒の指導によ

る自律した統治、養成プログラム、名前などです。これらの共同体は、1981 年の総会の実りとして、力強く成長してきたものです。

それでは、これら信徒共同体とマリア会、汚れなきマリア修道会、そしてアフィリエとの関係はどのようなものなのでしょうか。ハーケンワース師は次のように答えています：

> それは共通の霊示を持つ自律したグループの関係です。信徒マリアニスト共同体（ＭＬＣ）、汚れなきマリア修道会、そしてマリア会が、シャミナード師によって教えられたマリアニスト精神という強い絆で結ばれていることは明白です。男女マリアニスト修道会は、このマリアニスト精神の保管者としての義務、つまり、全マリアニスト家族に対してその精神を保護し、それを発展させ、それを提供するという義務を負っています。そのために、信徒マリアニスト共同体は、通常、マリアニスト修道者はマリアニスト精神を鼓舞する存在であると見ています。

（3）マリアニスト家族のイメージの発展

上記のテキストはマリアニスト家族のイメージが変わりつつあることを示しています。とはいえ、そのイメージには依然としてヒエラルキー的なニュアンスがあります。それは「マリア会と汚れなきマリア修道会は、マリアニスト精神の公的保管者として、その精神を保護し、発展させ、提供するという義務を負っている」と暗示しているようにみえます。さらに考察が加えられた結果、このイメージに変化が起ってきました。

1986 年のマリア会第 29 回総会への報告で、ハーケンワース師はこのイメージの発展について、はっきりと述べています。彼はマリアニスト家族についての二つの見方を次のように考察しています。

① ヒエラルキー的かつ同心円的見方：

マリア会と汚れなきマリア修道会が中心に位置し、他のグループはその周りに在るという見方。これはマリアニスト家族を図式的に表現するために過去において通常用いられたイメージです。このイメージは、男女修道会がマリアニスト生活の最も典型的な様式であることを生き生きと示すことを意図していました。つまり、この二つの修道会は、マリアニ

スト家族の他の枝に対して、マリアニストのカリスマとその真正性を判断するにあたって最も責任があるということです。

② 合議的な見方：

「円卓」を囲むすべてのメンバーが等しく責任を持つという見方。この新しいイメージは第二バチカン公会議以降の教会論のイメージと平行して発展したものです。現在これは、自分自身を「私たちは同じテーブルを囲む自律した共同体から成る一つのグループであり、それぞれ戴いた独自の恵みと役割に従って独立して活動している」と考えるマリアニスト家族の中で、最も一般的に使われているイメージです。このモデルにおいては、全マリアニスト家族は教会にマリアニスト精神を提示し、それに対して責任があり、また、各枝は自律しているとはいえ、全マリアニスト家族に関係するものごとは共に決定します。

この第２番目のイメージの方が、私たちが今体験している現実にもっと合致しているし、私たちを教会と世界の中により良く位置づけてくれます。一つの具体的な例として、1986 年のマリア会の総会期間中に、数人のフラテルニテ・マリアニストとムヴィミエント・マリアニスタスのメンバーが参加しました。宣教と文化をテーマとした 1991 年の総会は、しばしば多様な文化とより多く直接に接触しているマリアニスト信徒グループの重要性を強調しました。「彼らの信仰と経験に助けられて、私たちはこうした文化を分析したり理解したりすることができ、彼らと共に働く時、その文化をよりよく福音化できるのです。」翌 1992 年に、汚れなきマリア修道会はその総会文書の一節（Ⅱ－31）で信徒マリアニストについて取り扱い、「信徒と共に生きる教会として」というタイトルをつけました。1996 年のマリア会総会で、フランスのフラテルニテ・マリアニストの会長、ロジェ・ビッシェルベルジェ氏は「西暦 2000 年に向かって進むマリアニスト」と題して総会代議員に講演し、すべてのマリアニスト・グループは教会に奉仕することが必要だと強調しました。この総会文書「希望における仲間」は、一つのセクション全体を「マリアニスト家族における協力」についての描写に費やし、1991 年のマリア会の総会文書に書かれていたことを思い起こさせ、「シャミナード師のビジョンを取り戻す」ことの重要性とマリアの使徒的使命に信徒マリアニスト共同体が積極的に参加することを強調しました。

（４） マリアニスト家族総事務局の必要性

もし、この二番目のイメージが現実をより良く表現しており、また、マリアニスト家族に関することは何であれ合議的に決定すべきだとすれば、この家族の諸グループを調整する機構組織がますます必要となります。この機構の最初のものは総事務局でしょう。この事務局は、少なくとも、今世界に存在しているマリアニストグループの最新の記録を保管することになります。そして、信徒と修道者という異なったメンバーを調整する働きを始め、それぞれの代表者からなる何らかの会議か集会を召集することにさえなるでしょう。

1981～1986 年の対話の５年間に、すでにこの必要性について討議されていました。マリアニスト家族の様々なグループが数多くなり、多様性を増し、より自律したものとなるにつれて、すべてのメンバーが「家族の方針や計画」に従うことができるように、ますますそれらのグループを組織的に調整することが必要となります。ただ、誰かがイニシアティブを取らなければなりませんでした。このような理由から、1986 年のマリア会の総会は総本部霊生局長に、マリアニスト家族のグループと協働してグループの調整のための国際的な事務局を設置することを要請しました。さらに、総会はこの事務局の職務として、グループ間の相互関係を深めること､経験の交換､共通目標の決定を指示しました。また、事務局はマリアニスト霊性を表現したり育んだりする文書を書き、翻訳し、頒布することもできます。しばらくの間、総本部は全マリアニスト家族のために一つの会報を発行しましたが、これは国際事務局が 1993 年 2 月 7 日に、チリのサンチャゴで開催された世界集会の折に現実のものとなるまで続きました。

（５） 世界のマリアニスト家族の状況

1999 年には、マリアニスト信徒グループは 500 以上で、会員総数は 5975 人でした。また、アリアンス・マリアルには数人の会員がいます。これに二つの修道会を加えねばなりません。401 名の汚れなきマリア修道会員と 1520 名のマリア会会員です。世界には総数で 8000 人に近いマリアニストがいることになります。この信徒マリアニストとマリアニスト修道者の結合は、同じ霊性を生き同じ使徒的理想に燃えるグループや共同体の国際的ネットワークに属しているという自覚を私たちに与えてくれます。

1993 年 2 月にチリのサンチャゴで開催された第一回信徒マリアニスト共同体

国際大会の時に、この自覚は非常に強くなりました。この大会が「信徒マリアニスト共同体のアイデンティティ声明」を発表したからです。1996 年 6 月、マリアニスト家族世界評議会がエンリケ･ヤーノ氏を議長として会議を持ちました。1997 年に、スペインのリリアで第二回信徒マリアニスト共同体国際大会が開催され、「信徒マリアニスト共同体の使命」という文書が出されました。引き続いて、2000 年 3 月 25 日には、「信徒マリアニスト共同体承認のバチカン布告」が公布されました。2001 年 8 月に、アメリカ合衆国ペンシルバニア州フィラデルフィアで第三回信徒マリアニスト共同体国際大会が開催される予定です。

下に、信徒マリアニスト共同体の最新の統計(2011 年 11 月 7 日現在)を挙げておきます。

国 名	共同体	会員数	国 名	共同体	会員数
アルゼンチン	22	250	イタリア	12	197
オーストラリア	1	10	日本	15	130
オーストリア-ドイツ	4	42	ケニア	4	83
ブラジル	6	75	マラウィ	15	317
カメルーン	1	26	メキシコ	13	86
カナダ-ケベック	1	11	ペルー	24	198
カナダ-ウィニペグ	4	55	フィリピン	2	40
チリ	82	900	ポーランド	2	14
コロンビア	14	109	韓国	22	220
コンゴ-ブラザビル	2	55	スペイン-CEMI	17	200
コンゴ-キンシャサ	17	315	スペイン-マドリッド	33	358
コートジボアール	6	225	スペイン-サラゴサ	60	495
エクアドル	9	70	スイス	7	50
フランス-ベルギー	47	576	トーゴ	11	150
ハイチ	4	86	アメリカ合衆国	102	1587
インド	3	40	ザンビア	1	25
アイルランド	0	10	**合計**	**563**	**7,005**

マリアニスト家族の新しい未来に向かって

以上述べてきた発展は、シャミナード師のメッセージが現実的なものであることを示しています。以下に、いくつかの考えを述べてみます。

① 「今という時代は、他のどのような時代にもまして、周囲の状況からくる制御できない勢力と戦っている」という印象を私たちは持つかもしれません。一人では、私たちは何もできません。孤立することを止めて組織体を作らねばなりません。しかし、それは孤立した組織体とか、ある種の分派的なゲットー（特殊集団）へと向かうものであってはなりません。それは、堀という防衛システムによって孤立し、城壁をめぐらした城を造るという問題ではありません。私たちはきわだった内的な力を備えた社　　会的な組織体とならなければなりませんし、世の中に存在しなければなりません。私たちの起源からくる伝統に従って、選ばれた人々のグループ、もしくはエリートの運動であってはなりません。マリアニスト家族は柔軟な枠組みのグループ、団体、共同体の方向へ進まなければなりません。私たちは多様な特徴をもった社会的な組織体を造る必要があるのです。

現代世界は福音的価値を受け入れません。キリスト教は直接には迫害されないかもしれませんが、キリストの福音は人々の心構えや振る舞いを導かなくなってきました。一方では、信仰が弱体化しないために、かつてなかったほどの注意深い警戒が必要ですが、他方では、勇気ある存在も必要です。「マリアニスト家族は自分自身に対して、過去においてそうであったように現在も、信仰共同体として、キリスト教の再生と、教会の社会的組織の刷新と、新鮮な空気を教会に送ることを目指している」ということを私たちは忘れてはなりません。

② これらのことを実現するためには、マリアニスト家族として国際的なレベルで強力な組織的結合が必要なことは疑問の余地がありません。精神は受肉する必要があります。マリアニスト家族が抱えている解決すべき問題の一つは、普遍教会の中で自身の教会法的な身分を決定することです。私たちは今、現代世界に自分をより相応しく位置づけ、またさらなる精神的な力を与えてくれる教会法上の人格を必要としています。これと密接に関連している問題は、多様なグループが相互に関係を結ぶことができるように、マリアニスト家族への加入方法を制定することです。私たちはこれまでマ

リアニスト家族のイメージが発展するのを見てきましたが、私たちはこの発展を摂理的なしるしとして受け止める必要があります。その名称が何であれ、私たちは国際的なマリアニスト共同体連合、または、マリアニスト運動の世界連合の方向へと向かわなければなりません。名前は大した問題ではありません。必要なことは教会側からの公的な承認です。この承認によって、私たちは組織的な結合を強めることができるでしょうし、私たちが探し求めているような現代世界にもっと浸透するあり方を手にすることができるでしょう。(これは、2000 年 3 月 25 日に、信徒の私的な会として「マリアニスト信徒共同体の承認に関する宣言」がバチカンから公布されたことによって実現しました。)

③ マリアニスト家族はバランスのとれた教会的構成に戻らなければなりません。その起源において、マリアニスト家族は信徒の力に根ざした可能性を秘めた運動でした。現在、その現実は変わりました。修道者は強力な組織、形成されたグループ、それに非常に統一された国際的機構を有しています。信徒マリアニストはわずかな国際的絆しか持たず、散在しています。彼らはまだ多くのことを修道会に頼っています。シャミナード師の最初のプランに戻るためには、多分、いい意味での一種の「文化大革命」が必要とされます。信徒グループは、最初の頃の影響力、人数、一致、それに力を取り戻さねばなりません。二つのマリアニスト修道会は信徒グループにいのちを吹き込むグループとして活動する必要がありますし、また、活力を生みだすように刺激する役割を果たさなければなりません。

④ 私たちはより密接な使徒的協力関係を深めていかなければならないことは明らかです。マリアニスト家族の信徒と修道者は、共通の仕事を増やすことが必要となるでしょう。私たちが一緒に教育事業を行うことについて考えるのも何ら問題ありません。このような事業は使徒的な豊かな実りをもたらすことでしょう。伝統的なマリアニスト学校が官僚的、学問的、財政的な要求にさらされ、そして何よりも使徒職に適性のある人員の欠乏に苦しんでいる今、この結びつきは非常に効果的なものとなり得ます。これはマリアニストの教育事業に信徒グループの多くの会員が協力していたシャミナード師の聖母青年会の素晴らしい教育的な伝統を思い起こさせることになるでしょう。マリアニスト信徒グループがいくつかの教育的な働きを担当したり、マリアニスト修道者が彼らと一緒に働いたりすること

には何の支障もありません。

他方では、マリアニスト家族はそれ自体として、以前にもまして大きな勇気をもって正義と平和のために働かなければなりません。この面でもマリアニスト信徒と修道者間の協力は新たな効果が期待できます。マリアニスト修道者に手伝ってもらうとしても、このタイプの仕事においては、多くの理由があっても、率先して指揮をとるのは信徒であるべきです。

全体として以上述べてきたことは、マリアニスト家族の新しい未来像を一瞥したに過ぎません。しかしそれを完成するためには、マリアニスト家族は、組織体としての一致をさらに強め、より効果的な使徒的協力を築くことに加えて、自らを活性化させる本当のマリアニスト精神を必要としています。これが次の第六章の主題です。

第六章

マリアニストの精神

マリアニストの霊性についてはすでに研究論文があります。この章では、何か新しいものを現すいくつかの特性を提示しようと思います。マリアニストの霊性には四つの内容があります。①マリア：私たちにマリアニストというご自分の名前を与えてくださる方、②信仰：私たちを形成し、自分達が何者であるかを明らかにしてくれるもの、③共同体：私たちを一致させ、結ぶもの、④マリアニストの使徒活動を構成する特徴：これら使徒活動の特徴は、三つの全般的な特性を通して表現されます。

マリアニスト霊性の特性

（1）ダイナミックで生成力のある側面

私たちが「マリアニストの霊性」について話す時、この言葉は一般的に、一連の態度や徳のことに限定されています。このような説明の仕方は、この言葉が「静的な教義」であるかのような印象を与えてしまうことになりかねません。さらに、ある人は、「なぜこれらはマリアニスト霊性に特有の徳であって、他の霊性にとってそうではないのか？」と問うかもしれません。

ここでは異なった説明の仕方をします。何よりも、私たちは霊的な背景を持ち、神からの示しに動かされ、歴史的な状況を生きたギョーム・ヨゼフ・シャミナードという一人の人物を見てきました。これらのことは全部、ダイナミックで生成力のある側面からみて非常に重要な要素です。この人は一連の共同体や団体を創設しようとしています。つまり、これらに自分の「精神」を伝えようとしています。なぜ、これらのものは生まれたのでしょうか。なぜ、これらのものは創立されたのでしょうか。ある使命と共通した動機によって、これら共同体や団体は、当時の混沌とした人間社会の集団から生まれ、存在するようになり、そこにいのちと制度的な構造が与えられたのです。存在と活力を与えるこの精神は、常に何か内的でダイナミックなものです。シャミナード師はエルサレムの初期キリスト者共同体をモデルとして再生することによって、フラ

ンスと世界を再キリスト教化しようとしました。マリアニストの精神は、常に使徒言行録第一章に見られる霊性の中に、その最も深い基礎を有しています。

最初のキリスト者たちは、それまでの宗教実践、しきたりと習慣、そして家族からさえも離れた稀にみるすばらしい人々であったことはすでに述べました。彼らの改宗は勇気ある深い信仰によるものであり、その信仰は皆によく知られていました。というのは、彼らは隠れて生活し、迫害に耐え、殉教の苦しみを忍ばねばならなかったからです。

最初の共同体を形成したキリスト者たちは、祈りのうちにマリアと一致して聖霊を待っていました。マリアは母としての使命をもって彼らの真中に居られました。マリアの存在が最初のキリスト者共同体の形成に影響を与えたことは当然のことでした。

このキリスト者たちの間で、すべてが分かち合われたことは事実でした。彼らは心と魂を一つにしていました。深い共同体志向の精神をもって、彼らは共に働き、相互に高め合い、素晴らしい寛大さをもって極貧の人々を助け、誰をも受け入れました。これらすべてのことがキリスト者共同体の成長の説明となります。彼らは人々を改宗へと導きましたが、それも彼らの共同体が示した証しの力によるものでした。

シャミナード師は何をしようとしたのでしょうか。それは再キリスト教化、つまり、先に述べたような「最初のキリスト者」の姿を再現することでした。ここに、マリアニスト霊性の源泉があります。というのは、これこそが無原罪の聖母青年会、在俗会、汚れなきマリア修道会、そしてマリア会を存在させるようになった精神なのです。

（2） 現代への適応

シャミナード師と私たちの時代とでは全く同じ必要性を有しているのではないことをすでに見てきました。新しい歴史的な状況には目に見えるしるしがあります。人間社会は加速度的に発展しました。すなわち、変化は時として私たちを狼狽させるような形で起りました。私たちが常に古くて新しいマリアニストの精神を説明する時、このことを心に留めなければなりません。マリアニストの精神が今日のマリアニスト家族に存在と活力とを与え続けられるように、私たちマリアニストはこの時代の必要性に合った使徒的な行動へと向かわなければならないでしょう。この使徒的に開かれた態度と、摂理が私たちの歴史を

導いているという意識は､同様にとてもマリアニスト的なものだと思われます。

シャミナード師は、私たちにこの精神を与えるために、聖書から霊感を得ていました。師の聖書注釈が学問的なものよりも信仰と伝統によってより豊かに育まれており、的確なものであったことを知らなければなりません。聖書注釈は現在、非常に進歩しています。シャミナード師の霊的な見方を最新の釈義的な方法よって提示することを考えると胸がおどります。この第六章では、キリスト教の聖書から示されるものに基づいて、マリアニストの精神を説明することにします。

（3） 信徒、修道者、すべての人に開かれたマリアニストの精神

マリアニストの霊性が説明される時、ほとんどマリアニスト修道者のことしか念頭にないような傾向があります。つまり、汚れなきマリア修道会とマリア会の精神のことだけしか話されないということです｡このような説明の仕方は、マリアニスト精神を提示する方法に多大な影響を与えます。なぜならそれは、もっぱらマリアニスト修道者を活気づけることだけに焦点が当てられるからです。結局、他の人々、特に信徒マリアニストは、多かれ少なかれ修道者の精神に与るほかない訳です。ごく最近になって、信徒マリアニストの霊性についての論文が発表され始めました。この小論文は信徒と修道者間の区別を超えてそのルーツのところでマリアニストの霊性について語っています。

私たちはすでに歴史的かつ発生上の観点から、マリアニストの霊性が最初に信徒マリアニストのグループ､すなわち､シャミナード師の「マリアの信徒会」の中に存在したことをみました。正確に言えば、生き生きとしたダイナミックなこの精神を維持するために、汚れなきマリア修道会とマリア会は存在するようになったのです。現在、私たちはマリアニスト家族の新しい夜明けを示す、多くのしるしに気づいています。マリアニスト家族のどのグループも、独占的にマリアニストの精神を有していません。それは信徒と修道者、マリアニスト全体が有しています。言い換えると、それは私たちの時代に与えられた神の賜物であり､マリアニストに存在を与えるものなのです｡マリアニストの精神は、「修道者は修道誓願によって奉献し、信徒は洗礼と堅信の約束を更新することによって奉献する」という事実によって、本質的には何も変わることはありません。マリアニストの精神が私たち一人ひとりをマリアニストとするのです。この点が本書のはっきりとした視点なのです。このような理由から､「マリアニ

スト」という言葉は、ここでは信徒と修道者、女性と男性、つまり、マリアニスト家族一人ひとりのメンバーを意味しています。

マリア

４つのテーマを選び、マリア二スト霊性におけるマリアのいくつかの側面を学ぶことにします。

（1） シャミナード師に導かれてマリアを知る

マリアニスト霊性の出発点は、救いの歴史におけるマリアの姿とその役割を発見することにあります。シャミナード師の書き物には、キリストの秘義へのマリアの関係について豊かな材料があります。受肉へのマリアの参与についてはルカ福音書の最初の二つの章に基づいていますし、救いの歴史におけるマリアの役割は、ヨハネ福音書のカナの婚礼、十字架の下のマリア、そして黙示録の婦人の箇所に描かれています。これらの箇所に加えて、婦人とその子孫について告げている創世記のテキスト、そして、最初のエルサレム共同体において使徒たちと共にいるマリアを描写している使徒言行録の場面、を加えることができるでしょう。

このようにマリアを信仰の目で見ることで、シャミナード師はお告げにおけるマリアの「同意（フィアト）」の重要性に気づきました。マリアは自分が神の計画を実現するための道具であることを自覚しました。即ち、マリアの信仰による応答は、神の計画に対する一人ひとりのキリスト者の応答のモデルなのです。神はマリアが理解し、自由に「はい」と返事することを望まれました。つまり、神はマリアと共に一つの計画を進めるためにマリアの同意を求められ、それが世の救いと関わっていることをマリアが理解するようにされました。マリアは無条件に受け入れました。こうして、マリアはイエスを人類の歴史にもたらす母となっておられるのです。恵みに満たされ、その息子イエスの十字架の下まで忠実であったマリアは、キリスト者の生き方の模範として示されています。カナの婚礼でマリアがとられた態度は、シャミナード師の考えでは特別な重要性を持っています。マリアは、イエスが信頼に足る方であると感じさせる、正にその人であり、僕（しもべ）たちがイエスを信じるようにしてくれる方です。最初のキリスト者共同体において、マリアの存在は一致をもたらし、聖霊に心

を開くよう示唆を与えてくれました。

マリアは、キリスト者のあるべき姿を形づくると同時に、他方で人々をイエス・キリストへと導いてイエスを信じるようにと励まし、人間の歴史の中にキリストを根づかせ、罪と悪を取り除くことをその使命としています。マリアの無原罪の御宿りの秘義は、悪の力に対する戦いと勝利、つまり、秘義全体のシンボルです。マリアは神によって約束された婦人であり、悪と死から解放された最初の人なのです。十字架上のイエスは愛された弟子に代表されるすべての人に言われました。「これがあなたの母です。」こうしてイエスは多くの兄弟姉妹の長子、すべてのキリスト者の長子となられます。キリスト教の初めから、マリアは新しいアダムであるイエスとともに新しいエバと考えられてきました。神は歴史全体を通してマリアを救いの働きに協働させられました。従って、神の計画におけるマリアの使命に気づく人は、個人としても使徒的な意味からしても、マリアと同じ使命に参与するよう招かれていると考えることができます。

（2）マリアニストグループは「マリアに属する」グループ

シャミナード師の考えによれば、どのマリアニストグループも「マリアに属するグループ」です。つまり、マリアが実際にこのグループの真の創立者であり、そのメンバーを呼び集める方なのです。このグループはマリアに属するものであり、マリアの所有物なのです。シャミナード師の時代には、マリアニストグループはマリアの信徒会、在俗会、そして二つの修道会でした。現在では、汚れなきマリア修道会とマリア会のほかに、信徒マリアニスト、モヴィミエント・マリアニスタス、在俗会、それらに属する団体、すなわち、私たちがマリアニスト家族の全景で見てきたすべてのグループが存在しています。

これらのグループはマリアと霊的な契約を交わしており、それ故にマリアニストと呼ばれます。つまり、「マリアの所有物」なのです。マリアへの奉献によってこれらのグループの一つに参加を決断することは、マリアと契約することを意味します。そしてそれは、マリアご自身がご自分の家族の一員にするために私たちを呼び集めることです。確信をもってマリアと契約を交わすことによって、私たちはマリアを母として選んだということ、その結果、マリアは私たちを福音的な生き方に養成してくださり、聖霊の働きの下にイエス・キリストと一つになるよう導いてくださることを表明するのです。

マリアを愛し愛させ、崇敬し崇敬させるという私たちの努力は、人々をイエ

ス・キリストへと導くこと以外に目的はありません。それは、マリアは人々を常に多くの子供たちの長子である自分の息子イエスに似た者となるように養成しているからです。また、マリアとの契約は、マリアと共に一つの社会を形成することを意味します。すなわち、私たちはマリアの愛と助けと保護を願いますし、マリアは私たちに期待されます。それは、人々をイエス・キリストへの信仰に導き、キリスト者を倍増させるために、マリアは悪の力、罪、不正義に対して戦うという自分の使命において私たちの人間性、能力、人生に期待されるのです。マリアに自分自身を奉献することは、自分もマリアと同じ使命を持ち、それを深く理解し、その同じ使命に参加する人、つまり宣教者となるために、自分の人格と人生に決定的な方向性を与えることを意味しています。自分をマリアに奉献するということは、このようなダイナミズムの中に、また、この契約の持つ差し迫った必要性に全力で関わっていくことを意味します。

このように「マリアに属するグループ」への参加を決断することには、深く根を下ろした共同体志向という特徴があることを決して忘れてはなりません。グループ全体はマリアに属していますし、このグループと私たちとの絆は、それがどのような形式であっても､私たちの奉献の行為を通して表現されます(洗礼と堅信の約束の更新､あるいは他の約束や誓願の更新)｡ある場合は､この｢マリアに属するグループ」との絆は、一つの修道誓願、つまり、行動的かつダイナミックな生き方でそのグループに生涯留まるという堅忍の誓願を通して示されます。

（3） イエスに愛された弟子のように、マリアを迎える

シャミナード師の霊性は、ヨハネ福音書の一節、十字架の下でイエスがヨハネと母を相互にゆだね合う場面（ヨハネ 19、25－27）に重要な鍵があります。この節は「マリアニストの福音」と呼ばれてきました。現在の聖書注釈は、ヨハネによるイエスの十字架と死の物語を理解するうえで大きな進歩を示してきました。それで、私たちはシャミナード師の霊性の全体像を把握し、それをより良く生きることができるようになりました。この物語全体を観想することによってのみ、私たちはこの節の深い意味を理解することができるのです。

この物語（ヨハネ 19、19－37）は五つの場面から構成されていますが、それぞれが非常に象徴的なドラマとして描かれています。この組み合わせは五つ折りパネルの絵のようになっており、内容において豊かなものとなっています。

今私たちの関心をひく真中の絵のもつ深い意味をよりよく理解するために、その絵の前後にある二つの場面を見ることにしましょう。

第一の場面：十字架の罪状書き（ヨハネ 19、19－22）

ヨハネ福音書に描かれる十字架の罪状書きに関する場面は劇的な表現となっています。「ユダヤ人の王、ナザレのイエス。」この罪状書きは、十字架刑の場所が都に近かったし、また、三ヶ国語で書かれていたので、多くの人々に読まれる可能性がありました。つまり、地元のユダヤ人の言葉であるヘブライ語、ローマ帝国の公用語であるラテン語、そして、当時の文明世界の国際語であったギリシャ語です。「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」とピラトが言い張ったことは、「イエスは王である」ということを全世界に向かって宣言したことを象徴的に表現しています。詳細な表現はすべて、「イエス・キリストは全人類の王である」というメシア的な内容を十字架上から示唆する方向へと向けられています。この罪状書きの三つの言語は普遍的な特徴を備えているのです。この節は王としてのイエス・キリストの即位式を示しており、これに続く節はすべて、即位に基づいて君主が自分の王国を受け入れる人々に与える贈り物、つまり、この出来事は、王としてのイエス・キリストがその王国（神の国）に入る信者に与えてくださる贈り物を意味しています。

第二の場面：服の分配と縫い目のない下着のくじ引き（ヨハネ 19、23－24）

ほかの着物に較べて目立って強調されている下着は、出エジプト記 28 章 4 節や黙示録1章13節で記述されている祭司の服に言及されている可能性がありますが、その祭服はまさにその縫い目のない下着なのです。イエスは祭司として死を迎えようとしています。しかし、この場面は何よりも、四つに分けて分配された着物との違いを目立たせるために下着を裂かなかった、という決定に焦点を当てています。この下着は裂かれずに残されます。つまり、この下着は「上から下まで一枚織りであった」（ヨハネ 19、23）のです。明らかにこの表現は同じような象徴的な内容に言及しています。教会の一致は、イエスの十字架の犠牲で織りあげられているのです。縫い目のない下着とは、イエスが自分を信じる人々にお与えになる贈り物、つまり、一致の賜物を指しているのです。

中心となる象徴的でメシア的な第三の場面（ヨハネ 19、25－27）の内容については、それをより浮き彫りにするために最後に考察することにします。

第四の場面：イエスの渇きと十字架上での死（ヨハネ 19、28－30）

十字架上でのイエスの渇きは何よりも身体的なものでした。しかし、ヨハネ

はなぜこのような劇的なかたちでこの渇きを描くのでしょうか。また、彼はイエスの死について語るのに驚くような用語、他の福音書の著者とは明らかに異なった用語を使いますが、それは何故でしょうか。ギリシャ語原本から直訳すると、彼は次のように述べています。「イエスは・・・・頭を垂れてその霊を贈り物とされた。」通常、ここは「息を引き取られた」と訳されますが、この表現は、「イエスは自分の霊を授与した、」または、「イエスは自分の息（霊）を引き渡した」とする方が原文の意味を真に、完全に表現することになります。ヨハネはイエスの最後の息を「聖霊のほとばしり」の前触れとして表現しているように思われます。イエスの渇きは、身体的な渇きだけではなく、象徴的な意味、つまり、イエスの霊（聖霊）を賜物として与えたいという渇きが含まれていたでしょう。

第五の場面：イエスのわき腹は槍で突かれ、血と水が流れ出る（ヨハネ 19、31－37）

ヨハネ福音書だけにみられるこの最後の場面は、前の場面と同様に象徴性に満ちています。ここで、「その骨は一つも砕かれてはならない」（出エジプト記 12、46）といわれた過越の子羊に言及されているのは明らかです。イエスのわき腹から流れ出る水は、エゼキエル 47 章の「水の瞑想」の個所のように、いのちと健康のしるしとして神殿から流れ出た水のようです。刺し通された方の死はメシアの時代を開始します（ゼカリア書 12、10）。開かれたわき腹から流れ出る血と水は、イエスご自身から教会へと流れる、しるしとしての秘跡を思い出させます。槍で刺し貫かれるこの物語は、非常に深い超自然的な現実、すなわち、新しい時代の開始、イエス・キリストの過越の犠牲によって始まったメシアの時代の開始、そして、秘跡を通して教会に与えられる新しいいのちの開始について語っているのです。

この短い省察は、私たちが救い主の賜物を顕わす非常に象徴性に富んだ物語について考えているのだと理解できます。すなわち、教会の一体性、聖霊のほとばしり、神的ないのち、教会の秘跡などです。

中心の場面：イエスの母と愛する弟子（ヨハネ 19、25－27）

この場面をただ単に、イエスは自分の母を愛する弟子に委ねている、とみることは単なる物語として解釈することになります。「この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った」という最後の場面も、この物語の「ハッピーエンド」以外に何の意味もないということになってしまいます。しかし、この箇所はいく

つかのメシア的な内容と関係しています。例えば、イエスは自分の母に「婦人よ」と呼びかけていますが、この言葉は創世記 3 章 15 節の「約束された婦人」、ヨハネ福音書 2 章 4 節のカナの婚礼での「婦人よ」、黙示録 12 章 1－6 節の婦人を思い起こさせます。他の例としては、「その時から」という表現で何回かくりかえし出てくるイエスの「時」との関連をあげることができます。ほかにも細部にわたって多くの用語をあげることができます。26 節は明確に「自分の母」と述べますが、27 節では、ギリシャ原文によれば定冠詞つきの「母」(the mother) と言われています。以上述べてきたすべてのことから、私たちは知らずしらずのうちに深い霊的・象徴的な局面へと導かれます。十字架のそばには「母と愛する弟子」がいました。すなわち、「母」が「婦人」に取って代っており、また、愛する弟子が弟子の模範であることに気づきます。この「母」はマリアであると同時にマリアに象徴される教会でもあります。イエスが愛された弟子はイエスのすべての弟子の象徴です。イエスはヨハネにマリアを委ねます。イエスは母マリアと母なる教会を委ねているのです。象徴的な内容全体を通して、豊かな救いに満ちているこの荘厳な中心の場面について、私たちは以上のような解釈へと導かれます。

さらに別の側面もあります。普通この場面の最後の節は、「この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った」と翻訳されますが、他の訳も可能で、そちらの方がよりよい解釈だと言えます。この「家」と訳されている言葉（τα ἰδια [ギ]）は、一般的に聖書において、もっと明白な別の意味でよく使用されています。また特にヨハネ文書の中で、それは「私のもの」、「他と区別されたもの」、「私の所有物」（霊的・物質的）という意味です。それで最後の節は次のように訳したほうがいいということになります。「そのときから、この弟子はイエスの母を自分のものとして受け入れた。」マリアと教会はイエスの真の弟子を特徴づけるものとして存在しています。このことは、イエスが愛する弟子を特徴づける賜物としてのマリアと教会を迎え入れる、一人ひとりの弟子の霊的態度を強調しています。

正確な翻訳が何であれ、マリアニストである私たちにとって、その意味は明らかです。イエスの愛する弟子は常にマリアニストの模範です。すべてのマリアニストは、マリアを自分の最も大切なものとして、自分の家に、自分の個人的な生活に受け入れます。マリアニストの「家」には、主がもたらして下さる恵みと自由という貴重な賜物の中にいつもマリアが存在しておられます。イエ

スの弟子はマリアを母として受け入れます。マリアニストはマリアを自分の福音的心構えを養成してくださる母として受け入れます。

（4） 福音的心構えを養成する母マリア

シャミナード師の教えは、マリアの母としての活動を通して、私たちはイエス・キリストに似た者となるよう養成されなければならない、ということを絶えず確認しています。マリアは何よりも先ず私たちにキリストを与え、同時に、私たち一人ひとりの中にキリストを形づくるために働かれます。

マリアの福音的精神、つまりマリアのキリスト者としての心構えは、マリアニストに対して養成的な影響を及ぼします。マリアは、マリアニストの模範として、私たちに常に行動を起こさせ、刺激を与えるように働き、そしてある程度までマリアニストを造っています。マリアの精神を黙想することによって、私たちはイエス・キリストの似姿に形づくられ、その似姿と一つになるのです。以上の考察から、すべてのマリアニストグループの精神はマリアの精神である、という伝統的なシャミナード師の考え方が出てきます。だからこそ、私たちのキリスト者としての最も深い心構えを形づくってくださるマリアの精神を、理解し吸収することが私たちにとって非常に重要なのです。

現代世界では、誰もが希望、問題、喜び、心配を抱えて生きていますが、マリアニストは、マリアを同じように身近に生きている若い女性として見ることが必要です。この視点から福音書の関連する個所を読むことによって、私たちは自分自身の生活に大きな示唆を得ることができるのです。

① 若いおとめマリア

イザヤ書 7 章 14 節には、神からのしるしとして、いや、むしろ神の介入のしるしとして一人の若い女性が描かれています。「おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」それは、神は我々と共におられる、という意味です。この出来事は、神が歴史に介入されるしるしです。マタイはその福音書の中で、この預言はマリアにおいて成就したと述べています。天使は夢でヨセフに言います。「恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」（マタイ 1、20）。ヨセフはこの神の行為のしるしを大事にしなければなりません。イエスは人類の歴史が生み出したものではありません。確かに、イエスは母の胎から生まれましたが、それは聖霊の働きに

よるものであって、人間の行為によるものではありません。マリアは希望のしるしとして登場していますが、それは、おとめマリアが母となるということは神が行動されたということ、神が救い主として歴史の中に介入して下さったことを示しているからです。マリアがおとめであるということは、その子イエスの神性のしるしです。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」（ルカ 1、35)。謙虚で貧しい女性の胎内で、聖霊は世の救い主の生を始められたのです。このことは、マリアの心が神の行為に近かったということを意味します。つまり、マリアは神の救いの行為に浸っていたのです。マリアがおとめであることは、受肉と救いの理解に光を当てるしるし、つまり、「神は私たちと共におられる」というしるしなのです。

神の救いの行為の近くで生きるということ、つまり、受肉される神をはっきりと示すしるしになるというこのマリアと同じ精神は、人間にとって希望のしるしとなるために奉献したマリアニストを活気づけるのです。

② 信仰に満たされた若い娘マリア

マリアの信仰を黙想するためには、立ち止まって福音書のお告げの場面を考察しなければなりません（ルカ 1、26－38)。ここには神とマリアが登場しています。神は天使を通して語られ、マリアは神に開かれている人間を表現し、また、イスラエルの希望と神を探し求めるすべての人の歩むべき道を象徴しています。神とみことばを受け入れる人間を象徴的に表現することによって、マリアは神の救いの行為の道具となります。

天使のお告げは、光と影に満ちています。神はマリアを特別な使命に招かれます。天使の挨拶はいくつかの重要な聖書の個所を思い起こさせます（シオンの娘、ゼファニア 3、14－18 など)。主は力強い救い主として、あなたと共に、あなたの内におられます。マリアは選ばれた民と同一化され、マリアが生むことになる子は救いの神となります。マリアは自分の召命がどれほど偉大なものかという予感が自分の中に起ってくるのを感じます。それは、生まれる子のものとされる称号はすべて神的な特徴を備えているからです。マリアが母でありおとめであるということは、もう一つのしるしです。しかし、この救いの計画がどのように現実のものとなるのかについては何も述べられていません。マリアは神秘に満ちた、そして多分に危険を伴う冒険に自分を賭けなければなりま

せん。マリアの応答は、その信仰の偉大さを示しています。「私は主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように。」この節は、神に対して最大限の素直さと最も深い信頼とを示しています。この言葉は無条件の「はい」です。つまり、この言葉は、自分の召命の持つ神秘と、今はまだわからないが、その召命からくるすべての要求に対して、完全に自分を委ねていくという「はい」なのです。このような意味で、マリアは漠然とした不確かな未来に向かって行動し、人間的な安心を捨て、そして自分自身から出て神の働きへ全てを委ねていくのです。信仰に満たされた若い女性マリアは、新しい神の民の始まりです。これと同じ勇気ある信仰、そして神に結びついている信仰は、すべてのマリアニストの信仰でなければなりません。

③ 祈りと奉仕を一つに結び合わせる若い女性マリア

マリアはお告げとご訪問という二つの連続した場面での中心人物です（ルカ1、39－56）。お告げは神との対話であり、ご訪問は奉仕の活動です。お告げの後、マリアは自分の家を離れてザカリアとエリザベトの家へ行きます。この旅の意味は明らかです。マリアは特別な状況にあるいとこを助けに行くのです。エリザベトは年を取っていたのに子を宿し、誰もが不妊の女と思っていたのにすでに6ヶ月になっています。その若いいとこであるマリアは、自分がそばにいて奉仕する必要がある老年のエリザベトを助けに行くのです。マリアは愛に駆られ、緊急な助けが必要だと感じて急ぎます。奉仕の精神は祈りから生まれてきます。祈りにおいてマリアは神を経験し、奉仕において他者に神を紹介するのです。

マリアのエリザベトへの挨拶によって二つの出来事が起こります。エリザベトの胎内の子は喜んでおどり、エリザベトは聖霊に満たされてメシア的な祝福の言葉で語りかけます。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。・・・・主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、何と幸いでしょう。」このことを通して、私たちはこの二つの出来事の始まりとなったマリアの挨拶の持つ深い意味を理解します。それは、神が働いておられるというメッセージであり、しるしでした。マリアの挨拶は神を運んだのです。

この二人の女性は、心から自分たちの信仰体験を分かち合っています。マリ

アはお告げとみ言葉の受肉という深い信仰体験をしたばかりです。しかし、マリアは祈りと活動､黙想と奉仕をどう結びつけるか､その方法を知っています。ですから、マリアはいとこを訪問しに行くのです。エリザベトもまた深い信仰体験をしました。神は不妊という彼女の恥を取り去り、老齢という夫の限界を取り除いて下さいました。彼らは息子をもうけようとしています。二人の女性は抱擁し、信仰を分かち合い、主への感謝と賛美の歌マニフィカトで結ばれます。

これらすべての場面で､マリアは信じる者として登場します｡信じる者とは、祈る人、信仰を分かち合う人、そして、隣人への奉仕に自分を賭ける人を意味します。これはマリアニストの霊的生活の概要を示しています。

④ 観想する若い女性マリア

ルカ福音書では､マリアは常に思い巡らす若い女性として見られています(ルカ 1、29，2、19，2、51)。マリアは、今起っていることの成り行きについて、心に納めて熟考します。今起っている出来事とマリアが聞く言葉は、途切れることのない黙想のテーマです。個人的な体験と主のみ言葉を通して、マリアは神の計画のもつ神秘を理解しようと努め、それらを自分の心に納めます。マリアは信仰の念祷をします。すなわち、マリアは賛美し、礼拝し、自分を完全に明け渡します｡このような意味で､マリアは祈る共同体の模範です｡マリアは、個々人が私たちの信仰のもつ無尽蔵の神秘を理解する際の模範を表しているのです。

福音書が｢マリアはこれらのことをすべてこころに納めていた｣(ルカ 2､51)と述べる時、それは宝箱を抱えるように、大切な宝物を大事に守る行為に当てはまります。マリアの心は、神体験という宝、自分が受けたみ言葉という宝物を守っています。しかし同時に、心は一人の人間と生活をダイナミックに象徴するものでもあります。心に何かを保つということは、同時に、信仰の持つ神秘を生活と行動に生かすということも意味します。神のみ言葉を聴き、神の働きを体験することに対して同じように注意深い態度で臨むことは、マリアニスト霊性の特徴でもあります。

⑤ 若く貧しい女性マリア

マニフィカトは聖書的な意味での「貧しい者」の賛歌ですが、その人々は常

に神に対して素直であり、すべての人間は基本的に神の助けを必要とすることを深く確信しています。マニフィカトは歴史を一変させる神の力を証しするものです。それはマリアを変容させ、マリアの中に偉大なことをもたらします。神のこの変容させる力は歴史の状況を変えます。「主は権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」この祈りの霊性は真福八端の霊性、すなわち、自分のすべての信頼を神に置いている貧しい者の霊性です。

その祈りにおいて、主のはしためであるマリアは貧しい者との連帯を示し、小さく謙虚な者、つまり、他者の目には何の価値もない者との交わりに入ります。主の憐れみがこれほど強く宣言されるのはこのためなのです。しかし、マリアのこの貧しい者との同一化は、祈りのときに体験される単なる霊的賛歌なのではありません。マリアは、現代の貧しい者に典型的に見られる、不安を抱えた貧困の中を生きたのです。神の言葉を簡単に振り返ることで、いくつかの例を見出すことができます。

- 苦痛で疲れる旅
  マリアは出産を間近かに控えているにもかかわらず、ガリラヤのナザレからユダヤのベツレヘムへ行かなければなりません（ルカ 2、3－5)。
- ホームレス、あるいは、非常に気を揉む環境の中で過ごすという状況
  出産の時、宿屋にはマリアが泊まる場所がありません。マリアは、現代の非常に多くの貧しい人々がとる解決策、つまり、洞穴に避難するしかありません（ルカ 2、7)。
- 移住
  ヨセフはマリアとまだとても幼い子供を連れて外国へ旅をしなければなりません（マタイ 2、13)。マリアは現代の貧しい移民が忍ばねばならない不便さ、異なった国、理解できない言葉、異なった習慣、異なった宗教、生活のための労働などをすべて体験します。
- 子供たちが家族から離れていくのをみる両親
  イエスを見失い神殿で見つける物語（ルカ 2、41－52）は、家族の中に起こる断絶という深刻な人間的な問題に深い思いやりをもって触れています。子供たちが両親への依存をやめて、自分自身の生きる道を探す日が来ます。
- 暴力
  マリアは、暴力によって息子の命を奪われるという不正義を、すべて耐え

忍ばなければなりません。どれほど多くの家族が、同じような暴力によって苦しんでいることでしょうか。そして、マリアは、不法な宣告による十字架の下に、イエスと深く心を通わせて立っています。（ヨハネ 19、25）

マリアの人生で、貧しさの体験は現実のものでした。信仰と貧しさはマリアを霊的に陶冶（とうや）しました。同様に信仰と貧しさはマリアニストの霊性を形づくるはずです。

しかしながら、マリアは自分の貧しさを素晴らしい奉仕と歓待の精神を持って生きました。自分が受けた不親切な扱いとは対照的に、マリアは羊飼いたちを洞穴に歓迎し（ルカ 2、16）、彼らと豊かさ（イエス）と貧しさ（洞穴）を分かち合います。人々を歓迎する同じ精神で、マリアは後に占星術の学者たちを自分の住居に迎えます（マタイ 2、11）。

⑥ 信頼に満ち、信仰を伝える母マリア

人間の様々な必要性に対して敏感なマリアの感受性豊かな精神は、カナの若い新婚夫婦が直面していた問題に気づかせます（ヨハネ 2、1－11）。この個所はまたシャミナード師の霊性において非常に重要な意味を持っています。

ユダヤ民族の間では、結婚式は荘厳に祝われ、その祝いは通常一週間続きました。福音書はイエスの母がそこにいて、イエスとその弟子たちも招かれていた、と述べています。多分、彼らは既に祝いが始まってしまってからそこに着いたと思われます。それで、ぶどう酒が足りなくなるという事態に直面することになったのです。マリアは起ころうとしていることに気づき、若い二人が困惑するだろうと思って、すぐにこの二人の立場に自分の身を置いたのです。それで、イエスに「ぶどう酒がなくなりました」と言います。ぶどう酒が足りなくなったという物質的なことがマリアの関心事ではありません。マリアは、「ぶどう酒がなくなってしまう」ではなく、「彼らにはぶどう酒がありません」と言います。マリアの心を占めているのは、人々が直面している困難さなのです。

マリアはイエスに必要なことを告げ、イエスに全幅の信頼を置きます。マリアとは、常に希望と信頼を意味する言葉です。拒絶のようにみえるイエスの反応にもかかわらず、マリアは変わらない信頼をイエスに寄せて召し使いたちに言います、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください。」少し考えただけで、マリアがどのような信仰を持っているのか、また、召し使いたち

と共にするマリアの行動が如何に効果的なものかがわかります。この時点でイエスは有名な人ではありませんでしたし、イエスが最初の奇跡を行おうとしていたことを忘れてはなりません。イエスは全く評判にもなっていませんでしたし、前にも述べたように、多分、イエスの一行が遅く着いたことがぶどう酒の不足という事態につながっていたのです。召し使いたちには、イエスを信頼して従うという人間的な理由は全くありませんでした。さらに、イエスが命じることは彼らを当惑させるものでした。「水がめに水をいっぱい入れなさい。・・・さあ、それをくんで宴会の世話役のところに持っていきなさい。」この言いつけはぶどう酒の不足と何の関係があったのでしょうか。なぜ彼らは、水がめを満たすために 600 リットルもの水を運ぶという大変疲れることをこの無名の人の言う通りにしたのでしょうか。しかし、福音書は述べます。「彼らはかめの縁まで水を満たした。」召し使いたちは不平も言わず従いました。それをくんで宴会の世話役のところへ持っていくように、とのイエスの第二の言いつけに続けて、福音書は言います。「それで、召し使いたちは運んでいった。」彼らはすぐに信頼してイエスに従いました。彼らがイエスへのこのような信仰を持つようになったのは誰のおかげでしょうか。疑いもなく、そこにマリアがいたからです。召し使いたちへのマリアの言葉から、イエスを深く信じるという心構えが生まれてきています。マリアは、イエスの言うことに対して、たとえそれが普通ではないことであっても、それを全面的に受け入れ、信頼をもって従うという態度を私たちの中に形成し続けています。私たちはイエスを信じなければなりません。存在するものはすべて、この神的な人物へと方向づけられる必要があります。このことが教会の活動であるように、マリアの活動なのです。ここに、人々をイエス・キリストへの信仰に導く教会の姿として、マリアが再び現われています。

以上のことから、私たちにとってシャミナード師が与えた標語の広がりと意味が、より理解しやすくなります。カナでマリアが召し使いたちに言った言葉を取りあげて、シャミナード師はすべてのマリアニストに「この人が何か言いつけたら、その通りにしてください」と絶えず勧めました。この言葉がマリアニストの使徒活動にどのような重要さを持つのかについては後で述べますが、今のところ、マリアの行動を導いている精神について考察したことで充分です。それは、マリアニストはこの同じ精神で行動すべきだからです。

⑦ キリスト者の母であり教会の母であるマリア

マリアはおとめでありながら神から母となる賜物を受けましたが、それは神が御子をマリアにお与えになられたということでした。しかし、マリアは神にすべてを委ねるというかたちでその母性を生きなければなりませんでした。この御子は世の救いのため、父の仕事を果たすための存在です（ルカ 2、49)。マリアは、イエスを神殿に奉献し（ルカ 2、22)、自分の心を刺し貫くであろう剣に備えて準備をし（2、35)、何よりも、世の救いのために捧げられる十字架上のイエスの犠牲に自分を一致させることによって（ヨハネ 19、25)、服従と離脱という神秘のうちにこの母性を生きるのです。それこそが、マリアが信仰によって直観していたものを確かに示しています。つまり、教会がそうであるように、マリアはすべてのキリスト者の母となるのです。

マリアはたゆまず祈りに励み、母としての精神に生きながら、初代教会の中で別格の存在感をもって、人々を信仰において育てる使命を開始します（使徒言行録 1、14)。エルサレムの最初の共同体がマリアの精神を生きたように、マリアニスト各共同体も、自分達のモデルであるこの共同体に倣って、同じ生き方をしなければなりません。

信仰によって生きる人

私たちは、シャミナード師をフランスと世界を再キリスト教化するための宣教計画を構想した人として､繰り返しみてきました｡師が先ず必要としたのは、初代のキリスト者のような信仰によって生きる男女でした。つまり、マリアのような「信仰の人」でした。マリアニストの精神は何よりも信仰に生きることを求めます。シャミナード師は、聖書から取られた表現である「義人は信仰によって生きる」(ヘブライ 2、4　ロマ書 1、17、　ガラテヤ 3、11、ヘブライ 10、38）をモットーとして、繰り返し強調しています。師にとって、すべてのマリアニストは信仰によって生きなければなりません。

私たち各自の中に信仰によって生きる人を形成するために、シャミナード師の教えに基づいたメッセージに沿ったいくつかの点を提案します。

（１） 最初の段階で求められる勇気

私たちはこれまで数回、初代教会の信者の回心の過程について述べてきまし

た。一人ひとりのマリアニストも同様な人格的、根本的な決断を求められます。誰も一夜にして信仰の人になる人はいません。信仰によって生きるということは大変な要求が予想されます。そのため、勇気をもって始めることが必要です。献身と継続が常に必要でしょうが、マリアによってイエスへと導かれてきた男女は、聖霊の導きに信頼することができます。

私たちは何を成し遂げようと望んでいるのかを考えなければなりません。私たちは、信仰が私たちの人格を形成し、人生全体に一貫性を与える原理となることを望んでいます。このことは、信仰の内容が頭だけでなく心とも一致していなければならないことを意味しています。これは偶然に成し遂げられることではありません。私たちの人格の情緒的な核が信仰によって刻印されるために、絶え間ない根気のいる努力によって信仰の神秘を愛し、その結果、信仰の神秘が内面化され、信仰の動機によってだけ行動するようになることが必要とされます。この努力の中心は、日々、私たちの信仰を自分のものとすることにあります。以上のことから、シャミナード師が無条件にこれを要求する理由がわかります。つまり、マリアニストの精神を生きるためには、毎日、信仰の念祷に時間を割くことが必要なのです。最初からこれを実行すると決意しない人は、決してマリアニストではあり得ないでしょうし、「マリアニスト的人格」と言われるようなものを身に付けることはないでしょう。以上のことを始める時、最初の段階で、大きな決意が必要とされます。

（2） 信仰の念祷―信仰によって生きるための不可欠な手段

実際、信仰の念祷が行おうとしていることは、その人全体を神の似姿である新しい人へと変えることです。この新しい人というのは、確固たる信仰に立ち、信仰に生きることを喜び、そしてそれ故に困難や試練、あるいは誘惑に直面しても容易に動揺しないのです。それはイエスへの忠実さ、つまり、日々、各瞬間の、そして殉教に至るまでのイエスへの忠実さを意味しています。

忠実さの秘訣は、「自分自身をイエスに託し、イエスによって生きる方向を明確に示されねばならない」ということを理解するところにあります。シャミナード師は「こころの信仰」について語っていますが、それは師にとって、信仰とは単に使徒信条を知的に受け入れることではなく、もっとそれ以上のものです。私たちは、信仰のすべての真理を自分自身のもの、身近なもの、心に深く根を下ろしたものにし、それらの真理を心に保持します。

シャミナード師は、信仰を何よりも先ず新しい光として、私たちに新しい視野を発見させる光として考えていました。信仰によって、私たちは神が誰であるのか、また、自分たちが誰なのかを知るようになります。さらに信仰によって、神がどれほど私たちを愛しておられるかがわかるようになります。このことによってのみ､私たちは神が私たちに望まれるような人間になることができ、神が望まれるような人格を持つこともできます。信仰の神秘を観想することによって、私たちは一連の福音的価値を得るようになりますし、また、私たちの判断や価値基準を、真にキリスト教的なそれへと変えるようになるでしょう。非常に分かりやすい例として、私たちは貧しさ、謙遜、それに苦しみをどう見ているでしょうか。おそらく、嫌悪するか拒絶するのではないでしょうか。私たちはそれらを受け入れないのです。もし私たちがイエスのご受難を真剣に黙想するなら、私たちが拒絶し受け入れないすべてのことがイエスの復活をもたらした、ということを信仰のうちに理解できるでしょう。そこから私たちの現実に対する人間的な反応が修正されるのではないでしょうか。少なくとも私たちの価値基準は改まらないでしょうか。イエスのご受難の神秘は私たちの心に浸みわたり、ある物事に対する私たちの判断の仕方を変えていきます。このようなことは､私たちが黙想するそれぞれの神秘に関して少しずつ起こるのです。人や出来事や個人的な体験に対する私たちの判断の仕方は、徐々によりキリスト教的なものになるでしょう。信仰の光によって、私たちはイエスが考えたように考え始めることが出来ます。信仰の光は、私たちの物事の見方を、神が見るように変えてくれるでしょう。

しかし、シャミナード師によれば、信仰とはさらに私たちの心に育ち始める新しい気持ちです。信仰は知性だけに留まることができません。信仰は心に届けられた神の恵みであり、その恵みによって、心は神のことや神の国の新しい味わいを得るのです。一連の福音的価値とイエスの判断や価値基準が備わった物差しによって、私たちのこころはあまりにも人間的な執着や恐れや利己心から浄められます。シャミナード師は、一つひとつの信仰の神秘は、それ独自の浄めの方法を持っていると教えています。私たちが父なる神について黙想すれば、この現実を確信し、神との関係が子供としてふさわしいものになるでしょう。このような神との親しさを作り出そうと努めているうちに、私たちの心は浄められざるを得ません。私たちが信仰に満ちた雰囲気の中で生活し、信仰を心に浸みこませ、同時に、神でないもの、つまり、神のご計画にはない全ての

ものから浄められる時、私たちは信仰に喜びを見出し始めるでしょう。利己心や良心のとがめ、それに卑しい欲望から解放された心を持って、私たちは常に他者に開かれ、他者に奉仕し、他者をよりよく理解するために、その立場に自分を置くようになるでしょう。つまりそれは、隣人の善のためにもっと自分を犠牲にし、自分自身と自分の持っているものを喜んで分かち合い、勇気を持って自分の心を満たしている信仰を伝えるようになることを意味します。超自然的な感情や力としての信仰は、私たちが神のご計画に全面的かつ行動的に従うようにしてくれます。

「でも、信仰の念祷は実際にはどのようにすればいいのだろうか」と質問する人がいると思います。このような人の助けとなる多くの方法があります。これはまた、体験の問題でもあります。とにかく、何かを始めなければなりません。それから、深い祈りの体験を持つ人が、その助言によって私たちを指導し、活気づけ、道案内の役割を果たしてくれます。次に、シャミナード師が特に好んだ方法をいくつか挙げます。

私たちは祈りの条件を整えてから祈りを始めなければなりません。このことは、実際上は、私たちが黙想したい神秘やテーマを決めるという直前の準備とともに、信仰に根ざした生活をすることを意味する遠い準備をも要求します。祈りにふさわしい時間と場所を選ぶことが必要です。神のみ前にあるという、勇敢なしかし静かな信仰の行為で祈りを始めなければなりません。神が現存しておられること、そして私たちは神のうちに沈潜し、神は私たちの奥深くにおられることを、緊張のない、しかし、決意を伴った深い落ち着きをもって確信しなければなりません。たとえ私たちの祈り全体が、神の御前にあるという穏やかな引き続いた試みで終わるとしても、その祈りはすばらしい信仰の祈りです。

シャミナード師は他の可能性として、使徒信条の各節を味わいながらゆっくりと復唱する、という簡単な方法を挙げています。これら信条各節は私たちが理解吸収しなければならない信仰の神秘です。各節が自分のものになるまで、ひとつずつ考察するのです。このようなやり方で信条全体を復唱したら、もう一度最初から始めます。そして最初の神秘に浸っている間は、次の神秘へと移ってはなりません。一つの神秘に浸るということは、それについて考察することだけではなく、神や隣人の愛に対して素直に愛情のこもった反応をすること、あるいは、謙遜、信頼、感謝の気持ちを表現することをも意味しています。

一つの神秘に浸ることは、私たちがこの信仰の神秘と完全に調和して生活していないということに気づき始めることを意味します。すなわち、自分の心の中にはこの神秘と折り合いがつかず、根絶しなければならないものが根を張っていることに気づくこと、私たちが変えなければならないこと、これから行おうとしていることについて素直に神と語ること、その生活においてこの神秘をよりよく生きることができるようにと私たちが望んでいる人々のために祈ること、などを意味します。

使徒信条の最初の「私は父である神を信じます」は、上に述べたような様々な思いを引き起こすことでしょう。最初の神秘を充分に味わったら、次の神秘「天と地の創造主」に移ります。そして、この神秘を考察している間は、そのまま留まります。他の神秘についても同様に行います。最初は、次から次へと神秘を渡り歩くような感じかもしれません。しかし時がたつにつれて、その祈りの時間を満たすのに一つか二つの神秘で充分だと分かるでしょう。非常に図式的に説明しているこの方法は、シャミナード師が「信仰の念祷法」と呼んでいたものです。この方法の利点は、私たちがすべての信仰の神秘を真に自分のものとして理解吸収することができるようになる、ということです。

使徒信条の代わりに聖書を用い、様々な節を同じやり方で念祷することができることは言うまでもありません。大切なことは、知的な考察だけに留まらないことです。念祷の目的は考えを豊かにすることではなく、私たちのこころを変えることです。考えだけを生み出すような念祷は、たとえそれが真剣な考察であり、実り多いものであっても、常に不完全な念祷に留まるでしょう。新しい純粋な感情や思いが心に湧き出すことが必要なのです。つまり、感嘆、賛美、礼拝、寛大さ、魂の気高さ、和解の望み、自分を他者へ与えること、祈りへの望み、隣人へのより多くの奉仕、などです。これがこころと生活の両方を変えるものなのです。念祷の間に純粋さと深さを伴ってこれらの思いの一つでも感じるとすれば、その思いはそれ自身すばらしい祈りとなるでしょう。他方、論理と洞察だけの念祷は、自分に密かな満足を与えることになるかも知れませんが、実りのない祈りとなるでしょう。一言でいえば、私たちは多くの考えを伴った念祷から離れて、変容したこころを伴った念祷へと向かわなければなりません。シャミナード師によれば、信仰の念祷の実りはその人全体の回心なのです。

回心した人は信仰という動機によってだけ行動するようになります。それ故

に、私たちは信仰の念祷のうちに信仰と生活を統合しなければなりません。私たちは、神が私たちに何を望んでおられるのかに気づくことによって、自分自身を見出さなければなりません。これが、言行一致したキリスト教的人格を獲得する道であり、弱く動揺する人、つまり、人の言いなりになる人ではなく、完全な人になる道なのです。私たちは、どれほど神が私たちを愛しておられるのか、また、どれほど他者が我々を必要としているのかを知らなければなりません。

ここで、私たちは祈るとき絶えず自分の生活を省み、それが信仰の基準にどれほど適っているかを調べます。自分の行動、怠慢、反応の裏に隠れた動機は何でしょうか。私たちは神のみ前でそれらを明らかにしなければなりません。私たちのこころの中にある最も密かなことをご存知の神は、その動機をどのようにご覧になるでしょうか。私たちは恐れることなくそれらを浄化しなければなりません。また、私たちは自分の生活の中に祈りを浸透させるようになるでしょう。信仰の祈りの結果、いつも神の現存を意識するようになり、生活全般にわたって、私たちが出会うすべての人々に対して、愛とやさしさに満ちておられる神と共に歩むようになります。そして、人や出来事、計画、希望、好機、望みなどを、神がご覧になるように見て、信仰の動機によってだけ行動するのです。以上の事柄は、すべて非常に多くを要求されることです。私たちの行動はどれほど、恐れ、人間にありがちな世俗的な利己心、便利さ、自尊心、野心、その他多くの物事によって密かに動機づけられていることでしょうか！ 信仰はどこにあるのでしょうか。信仰とは、単に表面的に原則的なことを受け入れることでしょうか。あるいは、使徒信条を知的に受け入れることでしょうか。もし信仰がこころに触れるまでに深まっていなければ、私たちは決して信仰の人ではあり得ません。私たちは自分に絶えず次のような問いを発すべきです。「何故、私はこれこれのものを買うのか」、「何故、私はこれを成し遂げようと努力しているのか」、「どうして私はあの人とつきあうのを嫌がるのか」、「私の信仰はどこにあるのか」。信仰と生活を統合するという努力は、生涯にわたるものなのです。

（3）「信仰の念祷」のための準備

シャミナード師は、常々、念祷は修行としての準備が伴わなければ不可能である、と教えていました。現代文明はイメージ、宣伝、性的環境などに絶え間

なく晒されているので、その中で苦しんでいる私たちにとって、この準備はことさら必要です。私たちの生きている消費社会は、全く不必要なものを所有し、生産するようにと仕向けます（価値の矛盾）。現代社会が抱えている過度の性急さや不安によって、私たちは簡単に狼狽してしまいます。以上のような社会の只中にあっては、私たちを様々な束縛や執着から解放し、内的平安を与え、また、私たちをさらにイエス・キリストに似た者へと導いてくれる個人的なプログラムに従って歩むことが絶対に必要です。この個人的なプログラムは、よく指導された日々の訓練と実践を前提としています。

シャミナード師は、私たちが次第にイエスの内的心構えや態度に形成されていく実践的な方法を残してくれています。霊的生活のあらゆることと同じように、この方法においても、私たちを導き、指導することができる賢明で経験のある人の助けが必要です。シャミナード師の実践的な方法は、伝統的に「徳の体系」と呼ばれています。その目的は、私たちがイエス・キリストを着ること、つまり、私たち一人ひとりの中に住んでいる古い人を絶え間なく脱ぎ捨てて、新しい人になるのを助けることです。

これからいくつかの示唆を述べますが、これは私たちをイエス・キリストに似た者へと変えるために取り組むことができる数多くの方法を一瞥するのに役立つでしょう。イエス・キリストに似た者、これこそがキリスト者であるということを意味しています。

次のことに気づくことは非常に大切です。それは、もし内的沈黙を自分の中に創りあげなければ、もし自分の想像をコントロールできなければ、もし自分の情熱と欲求をコントロールしなければ、私たちは決して念祷できないということです。疲れ果て動揺した状態で念祷を行おうとする人は、そこから何も得るものがないでしょう。また、一日中外面的な事柄にとらわれている人も信仰の念祷をすることはできないでしょう。私たちは、各種の沈黙を訓練し、想像と情熱をコントロールし、神の霊が平日の労働の間に私たちに指示し、示唆するものに注意を向けなければなりません。一日の間に神のことを一度も考えない人も念祷を始めることはできません。念祷に取り組み始めるためには、これらの修徳的な訓練と自己管理をも実践し始めなければなりません。この二つを実践することで、私たちはキリストに似た者へと進歩できるのです。

この最初の努力に引き続いて、私たちの弱さ、心の中の悪の根源、そして限界に、さらに深いレベルで気づく方法が始まります。また日々の念祷によって、

私たちは何者なのか、何を変え、何を克服しなければならないのかが示されます。様々な困難や失敗にもかかわらず、私たちは常に忍耐と不屈の精神を保たなければなりません。この方法が深まるにつれて、私たちは内外両面から来る悪と必死に戦わなければなりません。この浄化の働きを理解するためには、これまで以上に霊的指導者の助言と助けが必要になります。私たちが弱さや失敗から起き上がり、再度この修徳的な訓練を始めるためには、誰かの助けが必要なのです。

この方法をさらに進んでいくと、神の愛と隣人への奉仕における成長という新しい世界が現れてくることを実感します。霊的生活の初期には、利己心の巧妙なずるさに気づくのは非常に難しいことです。これに気づくには、長期にわたる忠実さが求められます。このような方法によってのみ、利己心を根絶し、世俗的で無益なものから離脱できるのです。全面的に解放され、神と隣人に対する愛に満たされるようになることは、生涯にわたる取り組みです。これは信仰の念祷の目標と同じことになります。何故なら、念祷と修徳的な努力は一緒に進むものであり、また互いに補足し合うものだからです。

マリアニストの霊性は、私たちが個人として信仰によって生きるだけではなく、自分の信仰を他者と分かち合うことも求めています。私たちは信仰の分かち合いを共同体の中で行いますが、それは信仰の分かち合いが絶えず自分の信仰を伝達する動機づけとなるからです。私たち一人ひとりは宣教師であり、一つひとつの共同体は永続する宣教共同体なのです。このため、マリアニストの信仰生活をどのように説明するにせよ､マリアニストの霊性の他の二つの内容、つまり共同体と使徒的宣教をどうしても補足説明する必要があります。

共同体の精神

エルサレムの最初の共同体はどのようなものだったのでしょうか。最初のキリスト者の集会はどのような特質を持っていたのでしょうか。シャミナード師の教えによれば､「マリアニストの共同体は､初代教会のそれに似たものでなければならない」ことを私たちは知っています。これらの質問に対する答えとしては、使徒言行録の最初の数章に注目することが最善の道です。ここに私たちは、マリアニストの霊性の根源を見いだすのです。

（1） 初代教会の生活と私たちの生活

エルサレムの初代教会は歴史上の他の単なる地方教会とは違います。すべての地方教会はこのエルサレム教会から始まったのであり、この教会は復活されたキリストの霊的遺産を直接に受けた教会です。また、マリアの存在と、常にイエスと共にいた弟子たちの証言によって強化され、そして、聖霊降臨の最初の精神を生きていた教会でした。初代教会の精神は、常にマリアニストの各共同体の理想です。

初代教会とマリアニスト共同体に共通する第一の特徴は、マリアの存在です。これはマリアニスト共同体において、決して単なる一つの細部にすぎないものとはならないでしょう。マリアは私たちにマリアニストとしての名前を与えています。もしマリアが私たちの共同体に存在しないなら、私たちは決してマリアニストではあり得ません。マリアの存在は、私たちの間に素直さと謙遜、一致と和解を吹き込み、私たちを養成する働きをします。また、それは私たちが主キリストの道を共に歩み、共に進歩するよう後押ししてくれますし、私たちが人々をもてなし歓迎する人になるようにしてくれます。それは堅い決意と勇気をもって取り組む使徒活動へと私たちを導いてくれます。

初代教会において、もう一つの特徴が使徒言行録の記述の中で繰り返し述べられ、それらは様々な言葉で表現されています。「同じ精神」、「一つになって」、「一つの心、一つの魂」など（使徒 1、14,　2、46,　4、32,　5、12 参照）。シャミナード師は、これらの言葉を繰り返し用い、次のモットーにまとめました。「ただ一つの心、一つの魂をもちなさい」。初代教会におけるこのような強調は、その共同体のメンバー間にあった愛情で結ばれた一致を示しています。マリアニストの間では、これは伝統的に「家庭の精神」と呼ばれ、マリアニスト共同体の基本的な特徴となっています。聖書的な用語でこの表現が示そうとしていることは、心の一致です。人数に関係なく、また、一人ひとりの相違―意見、文化程度、社会的背景、責任や専門分野、年齢―にもかかわらず、「彼らがすべて一つになるように」（ヨハネ 17、21 参照）というイエスの意思は満たされなければなりません。私たちは福音に根ざした新しい家族を形成するのです。同じ家族の人は相互の愛情で結ばれ、お互いに関心を持ち合い、互いに助け合います。このような基本的な関係はマリアニストの間で奨励されるべきです。

しかし、このような一致を成し遂げるためには一人ひとりに多くのことが求められます。私たちは日々の共なる生活を快適なものにし、家族の集会でお互

いのコミュニケーションを促進し、私たちの働きに刺激を与えるような雰囲気づくりをしなければなりません。このことは非常に実際的かつ効果的に、細部にわたって気配りをするように私たちを導きます。すなわち、人を苦しめ物事を台無しにする批判、人を意気消沈させ精神を毒する悲観主義、非現実的な雰囲気を醸し出す誇張的表現、などを根絶することです。一方、私たちは他者に開かれている「しるし」、善意の解釈、すばらしいユーモアのセンス、状況を大袈裟にではなくありのままに示す技術、などを育てなければなりません。つまり、私たちは、一人ひとりが素直にまた自由に自分を表現し、自分の希望、喜び、悲しみ、失敗、心配ごとなどを語ることが出来、そして、常に関心を持って自分のことを聞いてくれ、元気づけてくれる人がいると気づく、そのようなお互いに支えあう雰囲気を作らなければなりません。

また私たちは、どんな人間の集団にも緊張はつきものだ、という事実を自覚しなければなりませんし、グループ内に起こる緊張を正直に認めなければなりません。マリアニスト共同体の歴史は、和解の恵みによって絶えず再建される共同体の歩みでなければなりません。対話を好み、理解を示すことは様々な相違を乗り越えるうえで助けとなります。私たちは、自分の弱さや限界にもかかわらず、私たちの中に現存されるキリストを指し示す「しるし」であるように努めなければなりません。マリアニストに固有の「心の一致」が求めているのはまさにこのことなのです。

初代教会の共同体の生活に関して一つの興味を引く事実は、使徒言行録で何回も言及されている「高間」の重要性です（使徒 1、13,　2、1,　9、39,　20、8)。この高間は最初の共同体が集会を持ち、祈るために共に集う場所でした。集会や祈りのためにふさわしい場所を持つことは、立派な精神を養成する上で、最初に思ったよりも大きな影響を及ぼすものなのです。

（２） 初代教会の共同体生活

エルサレムの初代教会の共同体生活については、使徒言行録のいくつかの節で描写されています。最初にとりあげる 2 章 42－47 節では、マリアニスト共同体をも特徴づける、四つの面が強調されています。

① 使徒の教えに忠実であること

キリスト者の生活は一時的な熱狂ではなく、使徒たちが教えたことを忠

実に学び、深めることを要求します。使徒の教えや彼らの伝えたものは、イエスと共に生活した彼らが見聞きしたものであり、イエスと共に彼らが体験したものです。彼らはイエスと共に生きる道を私たちに告げています。すべての共同体は、使徒たちと同じ体験を受け入れ、それを忠実に生きなければなりません。

② 相互の交わりの生活

これは、共同体の中で、単に人と一緒に生活するということではなく、心の深いレベルで人との関係を生きている自分を感じることです。生活と宣教活動を深いレベルで共有することは、交わりの精神を強化します。この箇所は共同体の交わりという機会の持つ福音的な喜びと単純さを示しています。

③ パンを裂くこと

疑いもなく、これは感謝の祭儀を意味しています。感謝の祭儀を祝うことは、イエス・キリストを信じる人々の最高の表現です。そして同時に、一致と使徒的な力の尽きることない源泉でもあります。感謝の祭儀は、すべてのマリアニスト共同体にとって常に中心であるべきです。

④ 祈り

前後関係からみて、ここでの「祈り」は祈りの共同体体験に言及しているといえます。現在、多くの祈りの形式がある中で、この祈りの共同体体験は個人的な信仰の念祷を見事に完成させます。このことは、神の言葉に共に耳を傾けること、単純さと信頼をもって神の言葉を分かち合うこと、出来事を通して働かれる聖霊について共に熟考することを意味しています。一言でいえば、共同体の中で自分自身が福音化されるようにし、また、他者の福音化を助けるということを意味しています。

初代キリスト者の生活に関する他の箇所（使徒 4：32－35）は、持ち物の分かち合いについて強調しています。この一致についての理想的な描写は、宗教的な漠然とした友情の気持ちを表現しているのではありません。これは親しい交わりに基づく連帯という実践的な態度を表現しています。信仰は、そして信仰だけが、価値基準を変えることが出来ますし、所有したいという私たちの本能を克服する助けとなることが出来ます。このようにして、信仰は寛大なこころで分かち合いたいと望む方向へと私たちを導

くのです。「誰も物資の不足で苦しむことがないようにしよう」、この初代キリスト者たちの熱心な呼びかけは同様に私たちのものでなければなりません。私たちマリアニストは、この世の物資とあらゆる資源を再配分するこのような活動に参加すべきです。

三番目の箇所（使徒 5、12－16）は、人々を惹きつけたキリスト者の魅力についての言及ですが、これについては後に述べることにします。

（3） 集会の重要性

シャミナード師は、メンバーがしばしば集会を持つことを信徒会の本質であり本来的なものと考えていました。どのようなマリアニストの共同体においても、集会は常に開催されなければなりませんが、それは集会が共同体で本質的な機能を果たすからです。集会には種々の異なった側面があり得ます。ある集会はただ一つの視点から開かれるでしょうし、他の集会はいくつかの視点を持って開催されるでしょう。以下にいくつか可能な側面を挙げてみます。

① 信仰の分かち合いのための祈りの集会

② メンバーの養成を目的とした集会：この集会は、私たちの霊的生活や使徒的奉仕に役立つ種々の話題を提供したり、深めたりするプログラムをより良いものにするために必要です。例えば、宗教的、使徒的関心のあるテーマについて、私たちに最新の情報を提供してくれる講話、あるいは、教会文書やマリアニスト伝承についての文書を共同体で研究することなど。

③ 情報伝達のための集会：私たちは国際的な広がりを持つ大きなマリアニスト家族を一緒に構成しているので、この家族に関することで多くの情報があることに気づくべきです。私たちはこの点でほんの僅かなことしか実行していませんし、自分たちがひどく限定してきた狭い世界で、未だに非常に孤立して生活しています。他者に開かれることによって、私たちマリアニストの世界は広がるでしょう。

④ 識別、計画、評価のための集会：各共同体は祈りと識別を経て始められる共同体の計画を持つべきです。私たちはどのような過程を経て共同体の決定に至るのかを知るべきですし、また、常に共同体とその働きの進歩を明確に評価する準備ができていなければなりません。これに加えて、各自は自分の使徒活動において共同体から支持を受け、また、共同体の

識別を受けなければなりません。この共同体志向の活力は、マリアニスト精神の本質的特徴なのです。

⑤ 最後に、他のよりくつろいだ楽しい集いを忘れてはなりません。マリアニスト家族に生命と喜びと活気をもたらしてくれる集い、例えば、パーティ、共同体の食事、ゲーム、スポーツなどです。

マリアニスト使徒活動の特徴

シャミナード師の教えによれば、マリアニストとは常に宣教師であり、宣教の活動的なメンバーです。宣教において私たちが協働する場合、いくつかの特徴がみられます。

（1） 本質的な宣教目的・・・キリスト者の倍増

エルサレムの最初の共同体において、その数が急速に成長したことは驚くべきことです。「使徒言行録」を注意深く読めばその進展がわかります。最初のキリスト者のリストには、12 使徒、マリア、数人の婦人たち、そして数名のイエスの親戚が載っています（使徒 1、14)。そこには多くても 20～30 名の核となった最初の人々がいるだけです。数日後、一緒に集まった人々の数は、すでに 120 名になっています（使徒１、15)。各地から集まったユダヤ人に、ペトロが聖霊降臨によっていただいた力をもって説教した後、多くの改宗が起こりました。「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日、3000 人ほどが仲間に加えられた」（使徒 2、41)。これら最初にキリスト者となった人々の共同体の生活は、絶えず新しい改宗者を惹きつけました。「信者たちは民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を、日々、仲間に加えられた」（使徒 2、47)。何人かの病人をいやした後、ペトロとヨハネが民衆に話していると、祭司達、神殿守衛長、サドカイ派の人々が来て、二人を捕らえて牢に入れました。「しかし、二人の言葉を聞いて信じた人は多く、その数は 5000 人ほどになった」（使徒 4、4)。使徒言行録 5 章 12～16 節では、内でも外でも依然として成長し続ける共同体が示されています。近隣地域の多くの民衆が、病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れてエルサレムに集まってきましたが、一人残らずいやしてもらいました。この共同体はエルサレムの町を越え出ていく非常に魅力的な力を持っていました。「いやし」は「主の復活」の力のしるし

だったのです。

この主の復活のしるしを繰りかえし行う信者の共同体は、この共同体が拡大する上で大きな力を持っています。境界を越え始めた福音宣教の働きが起こっていましたが、これはすべて目にみえるもの、つまり、キリスト者の存在、生活の証し、信仰を伝える言葉、悪からの解放のしるし、などによるものでした。キリスト者共同体の拡大についての言及はさらに続いています（使徒 6、1，　6、7）。

エルサレムの最初の共同体の印象的な成長を考える時、自分の創立したグループの使徒活動の本質的な目標として、シャミナード師が選んだ「キリスト者の倍増」という表現を私たちはもっとはっきりと理解します。もしシャミナード師がフランスを再キリスト教化しようと望んだとすれば、彼は初代のキリスト者が用いたのと同じ宣教方法を採用しなければならなかったはずです。シャミナード師が好んだ他の表現には、「聖人の一群の壮観を世に示す」「福音は、初代教会と同様に、今日でも力強く生きることができることを示す」などがあります。これらの表現は福音宣教の使命のことを指していますが、この使命というのは、世の人々に近づきやすい形で生活し、証しすることなのです。マリアニスト共同体の最初の主要な使徒活動は、その共同体自体の生活からにじみでる、人を惹きつける力にあります。このことは、シャミナード師がまた、「すべての共同体は永続的な宣教である」と言った理由でもあるのです。マリアニスト共同体はそのメンバーとなった人々を絶えず福音化し、また、そのことによって、外部からの人々を魅了する内的な力が与えられ、今度は彼らが福音化されることになるのです。私たちは自分が生きている福音的価値をわかりやすいものにしなければなりません。私たちの言葉よりも、私たちが実際に生きている姿の方がもっと価値があります。私たちの信仰と生活を共にしたいと望む人には誰にでも開かれ、彼らを喜んで迎え入れることは、マリアニスト共同体の特徴なのです。

（2）マリア的、教会的なインスピレーション

救いの歴史において、積極的な役割を果たしておられるマリアは、私たちの使徒的活動にインスピレーションを与え、モデルとなっておられます。マリアの使命は、人々に信仰を伝え、罪と悪から解放する受肉の神秘によって人々をイエスへと導くことですが、私たちが自分をマリアに奉献するということは、

①マリアと契約を結ぶということであり、②上に述べたマリアの使命に自分も参加することである、と理解してきました。マリアに奉献することによって、マリアニストは今述べた活動に献身する者となり、共同体と共に、マリアの協力者となっているのです。

本書では、これまで数回、教会の姿であるマリアに言及しました。マリアを愛することは、私たちのすべての活動に教会的な次元を力強く与えることになります。私たちは教会とその教え、またその司牧上の指導と密接にかかわりを持って生活しなければなりません。私たちの唯一の目標は、教会が成長して、キリスト者の生活の質と教会の宣教活動と一つになった教会的な交わりが、世の回心のために強化されることです。

（3） 福音宣教の多様な手段に対して、神の摂理に信頼し、準備し、開かれていること

「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」というマリアの言葉は、この精神を要約しています。実際にマリアは、カナで僕（しもべ）たちに言ったように、今このモットーを私たちに言われる方です。マリアは、イエスが私たちに何を命じても、たとえそれが困難で驚くようなことだとしても、それを行なわなければならないと確信させてくださいます。

私たちは、共同体としても個人としても、一つの形や決まったやり方で、ある特定の使徒活動に参加するよう予定されているわけではありません。イエスが私たちに命じられることを理解するためには、時のしるしに注意しなければなりません。教会が呼びかけていること以外に、時と場所による司牧的な緊急事態が発生した場合は、その必要性に応えることが摂理の求めていることだと考えなければなりません。

このことは、マリアニストが新しい使徒活動に参加する上でよく訓練され、高い能力を備えていることを求めています。私たちが人員と手段の面での可能性をつぎ込めるかもしれない多くの活動分野があります。いくつかの分野を示唆としてあげてみます。

① 信仰教育の諸活動、キリスト教教育、大人の要理教育、大学の司牧活動、キリスト教的・使徒的運動の活性化など。
② マスメディアの活動・・・本、雑誌、ラジオ、テレビ、映画など。

これらのマスメディアは、誰がこれをコントロールするかによって、今日の社会に対して良い影響を与えることができるし、悪い影響もあります。

③ 小教区が持つあらゆる面での使徒活動。
私たちは、今日の教会が求められているこのすべての必要な活動に呼ばれている、と感じなければなりません。

④ 公正で公共な社会をつくるための助けとなる広範囲の活動。
この分野では、毎日、新しい可能性が開かれています。日々、平和教育が大変重要です。「貧しい人々を優先させる」という面で指導力を発揮すること、また、発展途上にある国の人々のためにより公共的な支援をすることは、悪と死から最初に解放された方であるマリアに奉献した人々に対するもう一つの呼びかけです。シャミナード師が「マリアの無原罪の御宿り」にみた戦いと勝利の秘義は、不正義、圧迫、そして暗黒の悪の力からの解放の秘義として、今日解釈される必要があるでしょう。

⑤ 新しい地域に教会を根づかせること、例えば、宣教師の使徒活動や種々の方法による若い教会の支援など。
マリアニスト使徒活動の特徴である「役立つよう準備する」精神によって、私たちは自分の国を離れることさえ厭わないようになります。マリアニスト修道者、信徒宣教者、そして結婚した夫婦は、この世のものに執着しない離脱の精神とキリスト教的生活の並外れた証しをすることができます。同時に、彼らは他の国々で非常に必要とされるテクノロジーと科学のあらゆる分野で専門的な活動を引き受けるのです。

結　論

この項を次の言葉で結ぶことにします。マリアニストはその使徒活動を決して一人ぼっちで行なっているのではありません。先ず私たち自身の共同体のメンバー、それから他のマリアニスト共同体のメンバーというように、常に他のマリアニストから支えと励ましがあります。この本は、私たちを存在させるようになったルーツを振り返り、今、もっと共同体を志向する方向へと視野を広げ、より大きな希望をもって明日へと目を向けようと努めてきました。

私たちマリアニストは決して一人ぼっちではありません。
私たちはマリアと共にあります。

－ 完 －